大正五年二月八日印刷
大正五年二月十日發行

（獨習投入插花法）
【定價壹圓】

著作者　近藤正一
東京府荏原郡大井町一五八〇番地

發行者　河出靜一郎
東京市日本橋區通三丁目十番地

發行所　成美堂書店
東京市日本橋區通三丁目十番地
電話本局二七七七番
振替東京一七一九番

印刷者　中野鉄太郎
東京府荏原郡大崎町字下大崎四五二番地

印刷所　東洋印刷株式會社
東京市芝區愛宕町三丁目二番地

不許複製

父祖の遺業を紹ぎて餘生を挿花の末技に託す、笆疎なりと雖も世の塵を隔て、庭廣からざれども四季の花家を繞る、興會すればその一枝を摘みて案頭の花瓶に挿す、作意なく巧技を弄せざる所、投入花の情味眞に無限なりといふべし。

花道に宗師なしとは父祖以來の主張なれば、彼の宗匠を以て居るが如きは我が素志に非ざるも、若し投入挿花の風情を樂むの紳士淑女あつて柴門を叩かるゝあらば、喜んで半日(火曜日)の清談に耽るを辭せざるべし。

大正五年二月

華莊　近藤正一翁

住所　東京府荏原郡大井町一五八〇番地

殘菊、水仙、石蕗、欅、梅もどき、南天燭、寒菊、寒竹、葉牡丹、八朔梅、

山茶花、椿、せんりやう、藪柑子。

終

フロックス。

九月

木芙蓉、萩、荻、木犀、紫苑、鷄頭花、雁來紅、秋海棠、すゝき、かるかや、水引、蔦蔓、木賊、われもこう、黄蜀葵、紅蜀葵、檜扇、カンナ、ダーリヤ、ベコニヤ、ベチユニア、フクシア。

十月

菊、りんだう、烏頭、美女櫻、鷄頭花、野菊、紫露草、桔梗、萩、つくばね朝顏、つはぶき、カンナ、ダーリア、コスモス、ベコニア、マーガレット、フクシア、野木瓜、南五味子、さんざし、欅、楓、梅もどき、梅づる。

十一月

菊、紅葉、コスモス、ダーリア、カンナ、黄櫨、にしき木、唐黄櫨、茶の花、山茶花、梅づる、薔薇、四照花。

十二月

頭翁草、なでしこ、石竹、忍冬、合歡木、菱藻、酸漿、釣鐘蔓、萍蓬（河骨）、水玉、玉蘂花（ほじろ草）、皷子花（ひるがほ）、フロックス、ペチユニア、スヰートピー、ノーゼンパレン、ロベリア、カーネーション、ダーリア、フクシア、マーガレット。

七月

紫陽花、木槿、柘榴、夏藤、ぎよりゆう、夏椿、木槿、朝露草、さんきらい、ぎぼうしゆ、凌霄花、睡蓮、鬼蓮、しのぶ、佛甲草、月見草、夕化粧、蓮、百日紅、孔雀草、カンナ、ダリーア、ノーゼンパレン、トレニア、フロックス、ペチユニア、フクシア。

八月

百日紅、夾竹桃、木槿、芭蕉、旋覆花（小車）、弟切草、刀豆、錦茘枝、露草、夜會草、紅蓼、だんどく、桔梗、女郎花、男郎花、萩、藤袴、朝顔、ひるがほ、月見草、天人菊、蟲取なでしこ、金盞花、孔雀草、紫露草、日向草、黄蜀葵、美女櫻、金魚草、ノーゼンパレン、トレニア、カンナ、ダーリア、ペチユニア、

四月

櫻、松、藤、桃、木爪、海棠、花すはう、ふぢもどき、花うつぎ、椿、連翹、山吹、こでまり、金盞花、薔薇、躑躅、石楠花、櫻草、雛菊、わすれな草、しやが、矢車草、藤牡丹、小田巻草、石斛蘭、ゆきのした、春桔梗、萱草、たんぽゝ、あづま菊小青草、美人草、花梅花、ヒヤシント、フリージア、チユーリツプ、アキザリス、アルメリア。

五月

牡丹、芍藥、躑躅、薔薇、卯の花、燕子花、罌栗、馬蘭、あやめ、いちはつ、しもつけ、鐵線花、細辛、風車、玫瑰花、繡球花、苺、菩提樹ちさの木、夏椿、蜀葵、柘榴、アネモネ、ラナンキユラス、アラセイトウ、ペチユニア、フロツクス、ノーゼンパレン、フクシア、マーガレツト。

六月

百合、草藤、小町草、紫陽花、剪春羅、茶蘭、釣鐘草、花葱、薊、河骨、白

挿花、盆花季寄

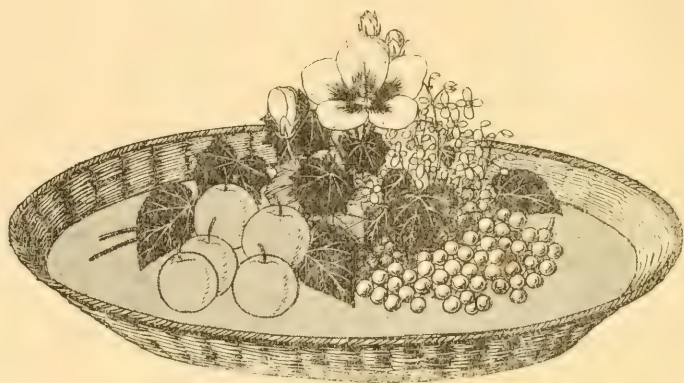
一月

梅、椿、南天燭、交讓木、松、柳、竹、笹、寒菊、水仙、寒牡丹、せんりやう、藪柑子、葉牡丹、雪割草、蕗の薹、齒朶、春の七草、福壽草

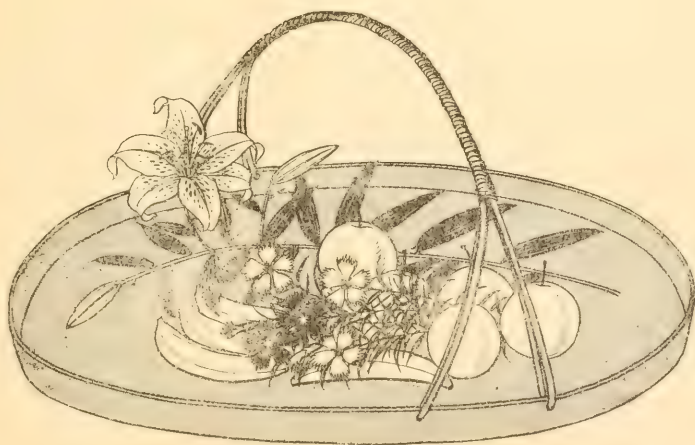
二月

梅、椿、南天燭、寒菊、寒牡丹、せんりやう、菜の花、水仙、柳、ニホヒスミレ、クローカス。

三月

紅梅、桃、彼岸櫻、こぶし、木蘭、棣棠、椿、海棠、金絲梅、花木瓜、まんさく、とさみづき、山茱萸、蓮翹、じんちやうげ、碇草、李花、水柏、阿彌陀傘、熊谷草、一輪草、蝴蝶花、春蘭、三色スミレ、匂ひスミレ、クローカス、フリージア。

秋期の例

冬期の例

春期の例

夏期の例

盆花
野菊と龍膽と烏頭
薔薇と黄櫨と錦木
トレニアとカンナと山茶花
コスモスと梅もどきと茶の花

十二月

盆花
南天燭と殘菊と水仙
櫸と梅づると茶の花
石蕗と南天と美女櫻
南天と寒菊と薔薇

盛合
野菊とセルリと柚子
枇杷の花とコスモスと熟柿
紅花サルヰアと甘藍

盛合
櫸とコスモスと赤蕪菁
櫨と椿と橙
南天と水仙と慈姑
椿と甘藍と籔柑子とバナヽ

黄蜀葵とベチユニア
月草と夜會草

木槿と錦茘枝

九月

盆花
萩薄茨と木芙蓉
ノーゼンバレンと葉鷄頭
薔薇と紅葉葵
薇薔一色

盛合
萩薄茨と葡萄と苹果
ベコニアと薊と絲瓜
フロックスと秋海棠と蕃茄

十月

盆花
ダリヤとコスモス
マーガレットと葉鷄頭と龍膽
菊と松と紅葉
紅葉と濱菊とコスモス
木樨とコスモス

盛合
紅葉と野菊と栗と柹
櫨とダリヤと蔓付絲瓜
ダリヤと櫻紅葉と柹と毬栗
薔薇と蔦と柹

十一月

繡球花と細辛と玫瑰花

檎

六月

盆花
- 姫百合と紫陽花とロベリア
- 玉蘂花と百合と松
- 茶蘭と山百合と濱防風
- 濱皷子花とカーネーション
- 酸漿と常夏と薊

盛合
- 瞿麥と岡河骨と枇杷
- 雛瞿粟と百合と櫻桃
- 孔雀草と松と杏
- ロベリアと花菖蒲とスグリ

七月

盆花
- 睡蓮と金魚草
- トレニアと朝露草
- 木槿とマーガレット

盛合
- マーガレットと桃とバナヽ
- 木槿とトマト
- 日向葵と蔓附胡瓜

八月

盆花
- 小松と紫露草と晝顔
- 百日紅と玉簪花

盛合
- 日廻草と蔓付刀豆と蕃茄
- 金鶏菊と桔梗と甘藍

熊谷草と胡蝶花とニホヒスミレ
海棠と木瓜と春蘭

四月

松と躑躅と白玉椿
藤と海棠

盆花
小田草と春桔梗と金盞花
薔薇と白躑躅と勿忘草
薔薇一色(紅黄白の交盛)
富貴草と薔薇と櫻草

五月

牡丹と藤と躑躅
夏椿と松と蟲取撫子

盆花
霧島躑躅とノーゼンバレン
松と虞美人草と草苺

金盞花とチユーリップと林檎
木蓮と阿彌陀傘とレモン

薔薇とレモン

盛合
萱草と林檎と勿忘草
櫻草と百合根とオレンジ

金盞花と夏蜜柑
紫露草と蔓附豌豆と甘藍

盛合
ベチユニヤと躑躅と穗麥
ヒナゲシとマーガレツトと林

盆花
- 梅一色
- 梅と椿と福壽草
- 椿と水仙
- 根松と梅
- 梅と椿と葉牡丹
- 梅と蕗の薹

盛合
- 梅と藪柑子と香橙
- 梅と葉牡丹と橘
- 松と水仙と林檎
- 椿と水仙と佛手柑

二月

盆花
- 水仙と葉牡丹
- 椿と菜の花
- 山茶花と迎春花

盛合
- 椿と白菜と佛手柑
- ニホヒスミレとオレンジ
- 椿と百合根と苹果

三月

盆花
- 紅梅と木蘭と春蘭
- 辛夷と金盞花と花サフラン
- 松と櫻

盛合
- ヒヤシントとフリージアと林檎
- 紅椿と支那蜜柑と土當歸

入つた器を床や机の上には上げぬといふ主義から來るのであつて、之は日本風の裝飾でも文人式の裝飾でも同じである、其處に至るとこの花果の盛合せはその嫌ひがない爲に用途が甚だ廣い、神佛の寶前にさへ捧げるのであるから如何なる場所に置いても少しも差支へぬ。

次に又瓶花を一つの室に二瓶以上の花を陳列するといふことは面白くない――勿論對瓶は別であるが――それは畢竟觀賞の中心點が散るといふことゝ、二瓶も花を陳べるのは先づ見た所で煩はしい感じがするからである、然るにこの花果の盛り合せは他に瓶花がある時にこれを陳列しても少しも目障りにならぬ、のみならず寧ろ一種の新しい趣味を瓶花に添へることもあう又瓶花との釣合を取つて裝飾上の美觀を倍加するやうなこともある。

盆花及び花果盛合一覽

一月

そして器物……この盛り盆もその色が中の花や果物の色や形と能く調和するものを撰ぶといふことが心要である、ダリヤやヒヤシントや薔薇の如うな洋種の麗い花に、林檎だの葡萄だのといふ果物の盛り合せをする時には銀色か金色の平皿が能く調和する、又水仙だの蘭だの松などといふやうなものに佛手柑とか靈芝とか天門冬の如うなものを盛り合せる場合には籠か古銅器の如きものが配合が可い。要するに器の深さ、淺さ、形狀、色澤は盛つた所の樣子に大なる關係を有つものであるから、この盛り合せを行るには取合せといふことが殊に大切である。

置き場所

文机の上、棚飾、床の間、食卓上など、如何なる場所にも飾つて差支へぬ、或る場合には瓶花の代用ともなり又或る時として盆栽の代りともなつて、加之も趣味は却てそれよりも高く——優美な所がある。

且つそれ許りでなく、盆栽は矢釜い裝飾家になると机の上や床の間には入れることを嫌ふ、それは不潔な肥料を用ひたものであるからといふのと、今一つは土の

其外、籠を使ふこともある、扁平な――淺い形の――然ういふ時には別に水を湛へることの出來る器を籠の中へ入れるのである。

器物

花果の盛合せに用ふる器は前にもいふ如く淺いものが可い、卽ち昔時用ひた華盤だとか平盃の類で、形は方形、圓形、長方形、楕圓形等如何んなものでも差支はない、又その種類を云ふと、金屬製でも陶器でも磁器でも竹籠でも、凡てその盛樣とそして盛るべき花と果物の形狀種類に相應するものであれば何を使つても可い、尙それればかりではなく、見立物……丁度花瓶に茶壺や水差しを應用する如うに他の器物を見立てゝ用ひたのも面白い、例之ば食皿だとか水盤だとか、菓子盃の類の使用し得らるゝものは何を使つても構はぬのである。

只一つ注意すべきことは、不潔なことに用ひた器物や用途不明のものを用ふることを避けることである、これは時として賓客に不快の感じを與へたり、又識者に笑はれることがあるからである。

趣味を幾許も現はすことが出來るのである。

又さねかづらの實に野菊と楓だとか、根引の小松に橘と藪柑子といふやうな組合せは、形の上から云つても、色の配合の上から見ても、優雅な純日本式であることは云ふまでもない。

水盆の盛り方

籠や盆の上にそのまゝ花果を組み合せて盛る爲方の外に、器物に水を湛へてそれへ枝や莖を浸けて、一寸脊の低い挿花を見るやうな盛方をすることもある、恁ういふ時には果物は枝につきたるまゝに挿すが可い、又果物のみならず花の方も草物などであれば矢張り根付で使ふこともある、俗に云ふ根洗ひと云つた調子の行り方である、それにしても器は水盤とか平皿の類の如うな淺いものであつて、花瓶は用ひないのである。

ば趣は更に加はつて來るだらう、その外銀盆……偏平い銀色の盆にコスモスかベコニアーの如うな洋種の草花を盛つて濱茄子の二つ三つも配つた狀は、ハイカラな趣味ではあるが又捨て難い風情である。

そめあへぬ枝かと見れば水鳥の鴨の青羽の交るなりけり、これは香川景樹が或る公卿から楓の枝に鴨を添へて貰つた時に詠んだ歌であつて其美しい狀が目の前に見えるやうである、眞紅に染めた楓の葉の間から鴨の羽の青い色の見えて居る所は如何んなに美しかつたことであらう、これは果物と花との盛合せではないが一寸色の取合せの例に云ふのである、先づ花果の盛合せは大體この式で行れば可いのである。

その趣味

これも亦前にいつたやうに佛手柑に椿の花だとか、コスモスにトマトを盛り合せると云ふ行り口は何となく優美な狀が乏しくて且つ洋趣味、唐趣味だといふ謗があるも知らぬ、が、彼の妻木に花を折り添へて、といふ狀に行れば日本風の優美な

好いものもある。

それに注意すべきことは色の調和である、赤い花に赤い果物では何分榮えない、

色の取合せ

のみならず平凡に流れて趣が締つて來ぬ、卽ち花が紅であれば果物は橙のやう黃色のものを持つて行くとか、さもなくば青い……未熟の果物を配ふといふやうにする、又花が白であれば柿とか林檎とか野木瓜のやうな眞赤な色のものを持つて行かなければ取合ひが惡い、又眞黃な……黃金色の柑橘類に椿の花、花は紅でも白でも皆能く調和する、卽ち黃と紅それに綠色の葉、といふ風に組み合せる、或は木犀に柹、これも決して惡くない色の調和である、木犀は金でも銀でも……金ならば赤味がゝつた、丁度十八金のやうな花に眞赤な柹の實、若しそれに野菊か龍膽の一もとも配へ

盛つても構はぬのである。

ダリヤの下から松の枝が出て居ても、梅の上に椿の花があつても、挿花と異つてもとより花にしても果物にしても、其れか其處に生えて居る狀を寫すといふのではなく、摘み入れたとか、折つて載せたとか、といふのがその狀趣……現實の狀態であるから、花の出生や花木の天性を云爲するの必要は少しもないのである。

形の取合せ

盛り方に法則は無いが、然し此の盆花なり果花の盛合せは先づ意匠を立てゝ面白みのある樣に、手際よく組み合せることが肝要であつて、それには最も花の形、花の枝ぶり、それに又果實の姿に依つての取合せといふことが大切である、花の姿、枝の狀に依つては大きい果實を配ふとか、圓い果物よりは楕圓か細長い形の果物を配ふとかいふやうにする、例之ば紅葉・眞紅や黃色い葉や、又その間に靑い・未だ染めて居ない一枝を挿んで組立てた下の所へ柑類か、柹の一つか二つを見せるといふ爲方にする、器は盆でも籠でも可い、或はものに依つては籠の方が調和の

盆花及び花果の盛り方

盛り方に法則なし

別に法則のある次第ではない、如何うでも面白く趣味のあるやうに盛りさへすれば可いのである、これは投入花が法則の羈束を受けぬよりも更に一段も二段も寛裕である、例之ば梅と椿とを盛つてそれに佛手柑を配ふといふやうな場合には……勿論椿や梅に彼んな實の生つて居るといふのでなく、唯面白く……極めて蕪雑なやうに組み合せるまでゝあつて、一寸その様子を云つて見れば田舎の百姓娘が果物を摘み入れた籠の上へ其邊に咲いて居る花を摘み採つてさし入れたといつたやうに、極めてその無作意に似たる作意のあることを行るのであつて、これも又投入花と同じく趣味は矢張り自然的でなくては不可ぬ、が之れは瓶花――挿花と異つて花の出生といふことにも全く沒交渉であるから更に其腕が振ひ好いのである、先づ一口に云ふと畫を描くやうな心地で自分の意匠次第で如何んな狀に

相應はしい、これらの花を成るべく莖短に摘み取つて盛るのである、然し小い輪の花でも趣味のないことはない、配合する果物の種類の如何に依つては是非小さい花を使ひたいこともある、卽ち盛り合せる果物の種類形狀の如何に依り、又大輪の花と交ぜて盛る如うな場合に必要なのである、然ういふ時には小さい輪の花は成るべく莖を長く――卽ち葉や枝を多く附けて置くとか根越しにして配ふとか、又さもなくば束ねて配ふといふやうな事もする。

木の花は大抵折枝であるから輪の小さい花でも又その枝だけでも既に一種の風致の備へて居るから何となく面白味がある、梅にしろ櫻にしろ、花は小さくても少からず風情があるのを見ても知れる、これは畢竟り草花の方で輪の小さい……纖細な花を根付きにしたり莖を長くして盛ればその根や莖の爲に一種別樣の雅致が現はれて來ると同じやうな理窟であらうと思ふ。

などゝいふがあるが、これはいづれも籠に盛るべき花を摘むことを詠んだものである、即ち昔は花を盛るといふことが一の流行物で、そして又其爲に花を摘みに出るといふことが一の行樂のやうに爲つて居たものであることが知られる。

日本では昔は花を花瓶に插して觀賞するといふことよりも、折り取つた花の枝を盆や臺の上に載せて眺めるとか、摘んだ花を皿や籠に盛つてそれを觀賞するといふ事の方が多かつたものと見える、然るに插花が流行し始めてからこの盛つた花を賞玩するといふことが殆んど廢つて了つたのは如何にも殘念な次第である、モウ花を賞すると云へば　　野山に咲いて居る花を見る所の　…　所謂花見の外には插花より外には——勿論盆栽、鉢植の花を賞するといふこともあるが、——先づ無いやうに思つて居るのは甚だ殘念である。

盛るべき花

これといつて定つた花はないが何れかといふと輪の小いものよりは大輪の花、例之ば草ものであれば百合花とか、甘草とか薔薇とか蓮とかいつた類の花の方が

日本では古い時代には果物は盛り合せないで、單に摘み取つた花ばかりを籠や皿の類の器に盛つたもので、その籠を花筐と云つて皿の方を華盤と呼んだものである、何れも根のない花を盛つたので、これは始めは供用……佛の供用の爲に爲たものであるが後には裝飾にも用ふるやうに爲つたものであるやうだ、江家次第の乞巧奠の條に、華盤一口などゝあり、又盛蓮十房とも見えて居る。

兎に角に昔は花を摘み取つて籠や盆の上に盛つたことは盛んに行はれたものと見えて古今集にも、やよひつもごりの日、花つみよりかへりける女ども、等とかゝれたるがあり、又六帖には

舟岡に花つむ人のつみはてゝ
　　さして行くらんかたやいづこぞ

といふがあり、躬恒の集には、

鶯やいたくなきそうつり香に
　　めでゝ我つむ花ならなくに

又裝飾の都合に依つてはいろ〳〵異つた盛り方のものを要求することであるから、決して何れを捨るといふことも出來ないのである。

根付きと折枝

この花果の盛り合せに用ふ花は折枝‥‥木の花であれば折枝、草の花なれば莖の所から摘み取つたものを使ふことがある、又根付のまゝなる些やかな草花、例之ば蘭とか、サフラン、水仙といつたやうな根の美しいもの‥‥水を注けて洗へば綺麗になるものや、木ものなれば小松‥‥根引松などを盛合せに用ふることがある。

何れもそれ〳〵に趣味がある、そして根ながら使ふものは多くは花が配ひになつて果物の方が主となり、折つた枝や摘み取つた花を使ふ時は花が主となつて果物の方が配ひのものになるやうな傾きがある、これは勢 さうしなければ趣 を爲さぬからであらうと思ふ。

根ながら花や木を使ふ行り方は、日本式のよりも洋風のよりも支那流の盛り合せの方に殊に多いやうである。

趣は千差萬別である、これは日本でも隨分古い時代に行はれたやうであるが、支那でも歐羅巴でも又盛にこれを行つたものである、現に南宗畫などには恁ういふ圖が幾許も描かれて居る、それから歐羅巴人は殊にこの花果の盛り合せの風情を賞玩して卓上の飾や棚上の裝飾物の一つと爲て居る、だから水彩畫にも油繪にも澤山これを描いて居る、只日本の古い時代に行はれたのと、支那流のそれと、又歐風のとはその趣味に於て多少の相違があることは無論である、即ち歐風のは華麗とか艶美とかいふやうな趣に富んで居るし、支那流のは磊落……淳雅といつた狀のものが多い、而して日本式のものは元花僊から來たものであるから優美又は高趣とかいふ點に於て充分にその特色を發輝して居るやうに思ふ。

それはめい〳〵に其特色があるのであるから、何れが可い何れが劣つて居るといふことは出來ぬ、即ち文人畫には文人畫の磊落な所に長所があり、洋畫にはその濃厚とした重渾のある所に特色があり、又日本畫には日本畫でその優麗な筆づかひに好い所のあると同じであるから、めい〳〵に其特色を觀賞しなければ不可ぬ、

附録

盆花及び花果の盛り合せ

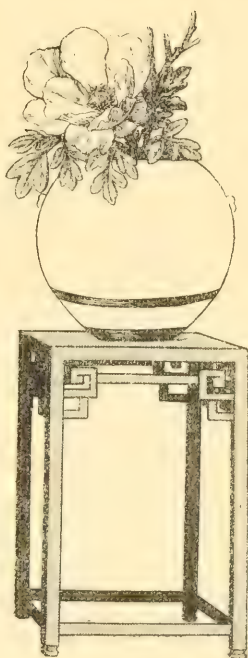
一種の盛り花

花果の盛合せ……花の枝と果物の盛り合せはその風體からいふと一種の盛り花である、籠なり皿なり又は盆なりに花の枝を盛りてそれに果實を配ふのであつて、如何にもその無作意の如うに見えて……唯何となく盛り上げた態は盛花よりも遙に風情がある。

巧く盛られたる花果の盛り合せは時として挿花よりも面白味のあるもので、若しそれを適當の場所に陳列する時は裝飾に無限の雅趣を添へ來るものである。

その趣味

盛り合せる花の種類と果物とに依つて趣味はいろ〳〵に異るから優麗だとか閑雅だとかとその趣味を極めていふことは出來ぬ、即ちその花と果實とに依つて

寒牡丹（十二月）

春咲の如き妖艶の態なきと雖も尚其濃かなる色は爐邊に一脈の春を添ふるの感あり、風姿を主態と觀ひとに分つの餘地を存せざる所に却つて能く當季の花の眞趣味を寫し得たりといふべし

水仙（十二月）

淸高輕楚なるがこの花木來の風情なれば技巧を用ひずその自然のまゝに……殆んど摑み挿にしたるかと見る迄に無作意に挿したる所に云ひ難き妙趣あるなりc

松と菊（十一月）

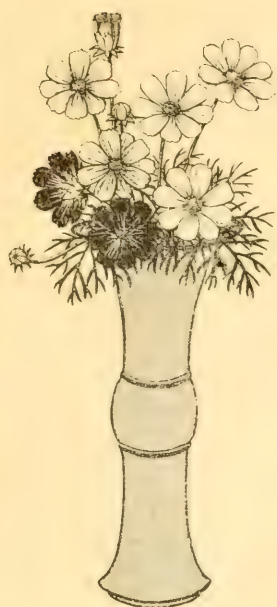
日本畫にも南畫にも屢く畫く圖なれども到底この瓶花の雅にして純なるには及ばざる事遠し、云ふまでもなく松が主體にして菊は配ひと知るべし

野菊と苅萱と龍膽（十一月）

この閑雅の草花を交錯して挿けたる風情は眞に晩秋初冬の間に於ける郊野の趣味を瓶裏に寫したるものと云ふべし、野菊と苅萱を主體として紺紫色の龍膽はその配ひとして能く瓶花の風致を整へたりといふべし

黄蜀葵と雁來紅と芒（十月）

黄蜀葵、雁來紅はこの瓶花の觀賞の中心點にして又實に一瓶の主體たるなり、芒は配合に過ぎざるも然も亦これに依つてその風情は倍加するを知らざる可らず、作意を用ひずして自然のまゝを寫したる所無限の雅趣を見る

コスモス（十月）

おのが心のまゝに右に左に靡き咲きたる状に挿みたるに最も能く彼れが天性を寫し得たりといふべく、淡紅の花、軟青の纖葉、美にして且つ閑なり、机上案上に好適の花なりといふべし

秋海棠（九月）

秋海棠其葉が何を片思ひと、云へる如くこの草は花の艶美なるは勿論、其葉に亦一種の情趣あり、即ち葉の組み合せに依りて主體と配ひとの風姿を現はすが肝要なるなり。

白桔梗とつはぶき、刈萱（九月）

白桔梗の幽靜なるは瀟晦なる苅萱を得て瓶頭に一段の寂味を加ふ、況んや濃綠の葉頭に黄花を着けたるつはぶきを其根〆に用ひたる所、晩秋の趣味は藏して一瓶の中に在りと云ふべし。

夜會草と桔梗と薄（八月）

夜會草と桔梗と一瓶の主人公としてこれに薄を配ひ挿したるなり、殊に夜會草の花輪濶大にして雪白の色清げなるはこの瓶中に於ける觀賞の中心點なるべく、但し薄の一もとに依て瓶花の美は愈々加ふるなり。

月見草と水引草（八月）

云ふまでもなく月見草こそ一瓶の主體なるべけれ、全體の風情優凄の内に閑寂の狀ありて新秋の涼味先づ瓶頭に動くを見る、殊に黃なる月見草と、紅顆を點したる如き水引草との色の調和は瓶花に一段の美趣を示す。

鷺草と山歸來（七月）

雪白にして輕楚なる花を着くる鷺草と野趣深き山歸來の兩々相交錯して谿流岸頭の風姿を表現す、何れを主體とも指して云ひ難きも、先づ花の賞すべき鷺草こそ瓶中の主人公なるべけんこ

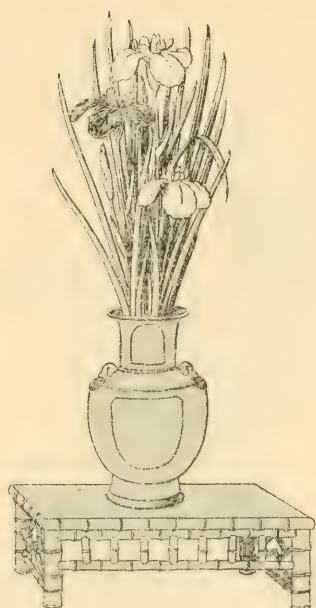
木槿（七月）

暗綠色の、菊の葉に似たる葉を少し配ひて底紅單瓣の花を高く底く無雜作に、且つ莖短かに挿したる風情は無限の情致あり、醉美人と呼ばるゝこの花の上に濺々たる打水のキラ〳〵状は目覺むる計りに美し、花瓶は却て澁味のあるものが取合ひよしこ

松と薊と撫子（六月）

松が主體にして薊と撫子は配ひなり、落々たる老松樹下に薊と撫子の相交れる狀は郊原の或る場所にて往々見受くる所の狀にして雄偉閑寂の風情瓶頭に動く、廣間の床、若くは文人趣味の机上飾に最も相應せる插花なり。

茶蘭（六月）

枝の參差たる間に自ら主體と配ひの形式を具備す、青黄の花、綠色濃き葉、全體の風姿の輕楚なる先づ坐間に一道の涼味の通ふを覺えしむ、中夏の茶花として眞に唯一無二の趣情なるべし。

繡毬花と豌豆（五月）

繡毬花が主體にして豌豆は配ひなり、豌豆は野菜なれども圖の如く挿ければ又一種捨て難き風情あり、繡毬の清楚なるに對して豌豆のしほらしき所配合最も妙なり、茶室などの瓶花に適す。

花菖蒲（五月）

葉と花の組合せに依つて主配の趣を作る、但し厭味なく素直に、殆んど摑み挿したかと見ゆる程に無作意に挿るべし、明星に三尺低し花菖蒲、一句能くこの花の趣狀を說破し盡せり。

薔薇（四月）

クリーム色、淡紅色の花を莖短かに無雑作なる如くに挿したる所殆んど主體と配ひの別なきが如きも、花の配置未開半開等の釣合に十二分の風情狀趣あり、殊に瓶前に散したる一花には無限の愛嬌あるを見るべし。

甘草（四月）

葉の長短と花の配置に依りて主體と配ひを見せたり、樺色の花、淺緑の葉、何となく當季の情趣を浮動せしむ、廣間にも小間にも相應すれ共、殊に好きは文人風の机上の瓶花としてなるべし。

櫻と松（三月）

彼岸櫻に松の一枝を配ひたるは嵐峽の美景の趣を偶したるものなり、或は翠簾を隔てゝ宮媛の盛裝せるを見るにも譬へんか、氣候の和暢となるに伴ひて插花の風情は陽艷の趣を示すべきはいふまでもなし。

勿忘草（三月）

一見主體と配ひの別なきが如きも、熟視すれば其間に自ら莖條の輕重ありて存す、唯斯の如き纖細可憐の草花に於ては極めて作意なきが如く無邪氣に插し入れたる所にその花の眞趣味の現はるゝを見る。

梅（二月）

枝の疎密輕重長短參差たる所に自ら主體と配ひの風體を現ず、然れど疎影横斜許二縱横一と云へる如く枝幹の相交錯せる状はこの木の眞面目なれは放縱自在の組立こそ此花を插むの第一の心得たるべけれ。

梅と椿（二月）

梅を主體として椿を配ひとなせる插花なり、清瘦鶴に似たる梅花に富麗にして閑雅なる寒椿を添へたるに依って配合は一段の雅趣を加ふるを覺ふ、冬籠りの坐邊には二なき瓶頭の觀賞たるべし。

松と梅（一月）

松を主體として之に梅を配ひたるものなれ共、所謂根〆にはあらず龍髯虬鬚長へに蒼古の色を罩めたる間に白玉の瓔珞を懸けたる古梅の交れる狀、兩〻相對して泰平の吉瑞を瓶頭に湛ふ、眞に新年唯一の插花なるべし。

せんりやう（一月）

主體も配ひも總てこの一種より組み立てらる、深緑の葉間に紅ゐの色濃き小珠を括りたる風姿は閑雅なる内に美はし味ありてその沈着せる趣別はこの季節に於ける有數の觀賞たるべし、廣間にも小間にも相應はし。

の一端を示すのである。

然れど屢々いふ如く元來投入花といふものは花の姿や型が極つて居るものでないからこれを見て投入花の型は恁ういふものであると誤解されないやうに注意を請はねばならぬ。

卽ち玆に圖錄せる所の瓶花は唯投入花の趣味が如何なるものであるかと云ふことの一斑を知らせるといふに止まることを知られたい。

その他神前には榊のみを挿して手向けるのも面白い、花としては……挿花としては兎に角、その淸らかでみづ〳〵しき緑の葉の常磐に淸らかな所を捧げるのであつて、生中の花よりは遙に氣高い趣がある。

挿花十二ヶ月

投入花は流儀花と異つて花に去嫌ひがない、又小面倒な法則がない、その趣味の領域は極めて廣濶である、随つて我等の眼には幽谷の無名草も野邊の蒲公英も、總てこの瓶花の材料として映るのである、即ち二十四番の花信の風に吹かれて開く花は悉く我が家の花瓶の美を飾るのである、だから瓶頭の美趣は眞に無盡藏である、で、他の流儀花のやうに一々これを圖に現はすといふことは如何にも困難であつて且つ煩はしい、況して挿花に花型といふものを掟てないで變化百端擒縦自在といふのであるから到底その總てを網羅して說くといふことは出來ない、だから玆にその時に會へる主なるもの數種を擧げてこれを圖錄し投入花の趣致面目

素より何の花といふ定めはない、只時の花を手向けるのである、が、然し素と美しく清らかな花を捧げるといふことは其唯一の目的であるから何んな花でも構はぬといふのは餘り無雜作に過ぎた云ひ分である、机上の小花瓶や棚飾りの一輪挿には時には路傍の蒲公英や岩蔭に咲いた龍膽のやうなものでも、隨分裝飾に無限の趣味を添へることもあるが、如何うも神や佛に捧ぐるには一向に名もない路傍の雜草や、下品な花では却つて不敬であらう、初穗を先づ神に供へるといふやうな意味から早咲の花を供へるといふ事などは面白からう、然うでないまでも兎も角も一廉の――花として世に賞玩されて居るものを挿すのが最も好い。

それから又色の上から云へば、成るならば白とか赤とかいふ正色のものが可いやうに思ふ、殊に神前の花に於て然りである、色の取合せの爲に葉色の美はしいものなども交ぜて挿すこともある、卽ち松、紅葉、錦木などで、これは何れも趣味がある、況して紅葉に至つては菅家の、紅葉のにしき神のまに〳〵といふ神詠さへある程であるから、之に菊などを取り合せて挿けたるは殊に趣味が深いやうに思はるゝ、

獻華の作法

神佛の獻華には一定の式作法がある、必ずしも其式に依らなければならぬといふことはないが然し、神佛の前へ手向くることであるから無雜作に持ち運んでそれる無雜と置て來る…といふやうな仕方は甚だ面白くない、貴人の前へ出ては貴人に對する禮儀作法があると同じく神佛の前に於ては矢張り神佛に對する作法を以てしなければならぬ所謂敬虔の心意を表して淑やかに　行儀正しく動作するといふことが肝要である、即ち獻華には特に式作法を必要とする譯で…素より定式と云つた所で必ずそれに依れと云ふのではないが、成る可くはこの主旨に依つて行りたいと思ふのである。

茲に著者が先代恪翁の定めて置いた獻華式といふものがある、素より花の插法には何等の關係のない事ではあるが、曾て北野の天滿宮に於ても此式に依つて獻華した事があつたやうに覺えて居る。

花の種類

あるから恁ういふ時には總て同じ姿の花でなくては不可らぬ、然し二瓶でも、三瓶でも、めい〳〵にその姿の異つたものを下向けるといふ事も絶無ではないが、然ういふ場合には對瓶とは稱へないのである。

二瓶對の時は左の方に置く花も右の方に置く花も、その枝振から花の種類、瓶花の丈、其他全體の樣子を總て相對にする、例へば一方が右へ靡いた姿のものであれば一方の瓶花は之れに對して左方へ靡いた狀に挿ける。

又三瓶對であれば、左右は前に云ふ對瓶と同じ姿にして中央の花を左右何れへも靡かない――中正の姿の花形とするといふ如うに、――丁度三幅對の掛物を掛けたやうな態にする、然し又さうでもなく中左右とも全然同じ姿形の……殆んど同じものを三つ並置したと見える態の花に挿けることもあるが、委しく仔細にこれを點檢したならばその瓶花の趣味の上にも風情の上にも、多少の輕重があつて、中はこれを左右の花と比較すれば幾分か重みもあり又沈着きもあるやうに挿け上げるものであることは云ふまでも無い。

に、すが〳〵しい感じを起させる、これが先づ以て神や佛の前に相應しく見えて却つて千金百金の珍器を用ひたよりは遙に立ち優つて見えるのである。

花の向け方

前にも云つたやうにこの神佛の獻華はその花の姿が四方正面であつて裏表がなく、何方を向けても同じ姿であるとは云ふもの丶、花器や花臺や　又姿にも多少その表と見るべき所を神佛の座の方へ向はしめるのである、普通の飾り花……佛前の飾り花では此方へ花の表面を向けて裝飾とする　卽ち此方から見た方を本位としてするのであるが、この獻華の方は然うでない、それは神なり佛なりに捧げて神佛の心を慰めるといふことが主旨であるから是非神佛の座のある方に向けるのが當然である。

二瓶一對・三瓶一對

普通は一瓶を捧ぐるやうであるが時としては二瓶對、三瓶對といふこともある、恁ういふ場合には大抵は瓶花の形も花の種類も一樣にする、卽ち對瓶といふので

が、折つた花をそのまゝ――花の生の姿で挿し上げるのである、これは一種でも二種三種の花卉を交ぜ挿しにする場合でも同じである、畢竟花を盆や臺の上へ載せて捧げるか、花瓶に挿して手向けるかの違ひがあるばかりであるから、其心得ご無頓着に……少しも作意を用ひないで挿すといふことが肝要なのである。

加之もこの瓶花は四方正面で何方から見ても同じ様に裏表のない姿に挿けなければならぬ。

花器と花臺

神佛に供うずる花は、殊に淸淨といふことを主とするのであるから花器も花臺も凡て新しいものが可いのである、然りとて銅器や磁器をその度毎に新調するといふことは、富豪の人か何かでなくては出來ないことであるし又急な時には間に合はぬ、だから大抵は花器は青竹の寸筒か、寸筒に白木の組足を附けたものを用ふる、臺は素木の三方とか、雲脚臺だとか、又神前などには八脚の案を使ふこともある、眞白の臺に青竹の花器といふものは其色の配合が非常に淸らかで、如何にも潔白

枝を矯めたり又は曲なことをするといふことは……巧く挿けたとか、上手に生け上げたといふやうな事をするのは絶對的に禁物である、唯モウ自然の儘の花の美はしみを神佛に手向けてその心を慰め奉るといふ趣旨で行るのが肝要である。之れは獨り手向の花に限ることでは無いが嫌に枝を枉げたり又強て面白味を見せようとする　假りにこれが人間であるとすれば巧言令色を行るやうなものであつて甚だ面白くない爲方である、こんな花は恐らくは神佛も受け給はぬであらう、古歌にも、折とらばたぶさにけがる立てながら三世の佛に花たてまつる、だとか、その他又、をらで手向けよ、などと詠んで居る程であるから、人工的の技巧を以て花神を汚すやうな行り方はこの神佛の獻華には如何しても避けなければ不可らぬ。

花の姿

然らば如何んな風に挿けたらば可いかといふに、前にも云ふ如く、唯スラ〳〵と自然のまゝに花瓶に突き挿した――突き挿したと云つては語弊があるか知らぬ

天満宮の獻華式などはそれである。

神佛……いふ内にも古來佛前には殆んど常式の如うに花を飾ることは誰もよく知つて居る所であるが然し、彼れは獻華ではなく一種の装飾である、元は兎も角今日では純然たる装飾である、然し獻華といふ方は全くこれと異つて花を神佛に手向け捧げるといふ意味である、で、普通に佛前や神前に飾る瓶花とは少し趣が違つて居ることを忘れては不可らぬ。

神佛前の手向けの花は、神式でいふと幣、佛家の方では供養の一つといふ主意であるから必ずしも之れを瓶に挿して手向くる許りでなく、その花の折枝を白木の盆や臺に載せて捧げることもある程だから普通の花……挿花とは餘程挿る心持も、亦その花の趣味も變へるといふことが大事のことである、それは花の姿は勿論、花器も臺も全く様子が變つて居ることに注意して挿けることである。

技巧を弄することを避けよ

これは此花には實に大切な事柄である、だから流儀花の方でするやうに、無理に

だから姿は専らその……枝振りと花の種類とに依るのであるから一概には云へぬが、例の文人挿けのやうに或る一方に靡いた……懸崖式のやうな挿方などにするのは面白くないのである、草もの……殊に女郎花にした所が尾花のやうなものにした所が、其他又春の花では燕子花、小田草、百合花など、總て素直に、生のまゝに挿した所に風情がある、卽ち臥した姿よりは立つた樣の方が好い、總體に臥した形の花は、……假令懸崖式といふ程でなくとも、一方が壁であるとか屛風であるとか、但しは又隅棚の上のやうな所だとか……如何してもその位置の片隅んだ場所でなくては相應せぬ。

神佛の獻華

裝飾の目的にあらず

神佛の寶前に獻華をするといふことは隨分古くから行はれ來つた儀式で、……神社に依つてはこれが年中行事の一つのやうに爲つて居る所もある、卽ち北野の

の枝ぶり木ぶりに任せて其自然の風情を賞玩すべく挿けるので、一口に云へば一輪挿の膨脹であるといつても可いのである、但し花の姿に表裏がなくて、四方正面……何れの方面から見ても一ふしの見所があるやうに挿けるといふことが肝心であつて、普通の挿花のやうに或る一方面の外は恰で繡物の裏面を見るやうな穢らしい狀では不可らぬのである。

然し斯ういつたからとて決して何の方面から見ても同じ姿に見えるやうに挿せと云ふのではない、只何の方面にも一ヶ所の見所即ち風情と雅致があつて……瓶花の裏面といふもののないやうに挿るといふことが必要だといふのである。

花の姿

高くも低くもその花の風情に依つて如何やうにも挿て構はぬ、然し何れかといへば丈の高い素直な花形の方が好い、丁度小供などが何の心もなくたゞ摑み挿しにさしたかと見えるやうな風に、些も技巧や作意を用ひたと見えぬやうに、眞に天眞爛漫な態に挿けるのがこの座右の花の特色で、そして又面白味のある所である。

る、即ち梅を挿けては疎影横斜月黄昏といふ詩趣が動いて見え、女郎花を生けた時にはその身が秋の野邊にでも在るやうに、何處となく蟲の聲さへ聞えさうな感じが起る程に趣味が誠實である、床の間の花などは装飾の爲に飾つたといふ跡が歴歴と見えて奥が極めて淺い、然るに之れは花を賞玩する……深く深く花を愛賞する爲にこれを座間に挿して眺めるといふ趣があつて、花を愛するといふ心持に非常な相違がある、加之もその挿けた花は生きて居る、花に生命がある、

生きた挿花といふのは恐くはこの座右の花などのことだらうと思ふ。

一輪挿の膨脹

瓶花の姿などは如何挿しても可い、決して之れといつて定まつた風體姿狀はないのである、即ち眞、行、草、何れの狀に挿けても構はぬ、姿は千變萬化であつて只花木

要であらう。

座間の花

絶好の裝飾品

花は床の間に置くものに限ると思つて居る人には到底も爲し得ない所の破格な行り方の瓶花である、が然し、その裝飾上の風情に至つては眞に趣味津々たるもので、その餘裕のあること、又情致の寛濶な狀に至つては到底も床の間の花や机上の花のそれとは比較にはならぬ、卽ち行り口が窮窟にない、これも裝飾には相違ないが床の間の花のやうに態と飾り立てたと云ふ點が微塵もないから如何にも潤いて寛つたりとした、所がある、若し床の間の花が小學生徒の手本の書とすれば、これは禪僧の一行幅の文字にも譬へたい、卽ちそれは先づ座右　座間に一つの花瓶を置いて夫れに無雜作な……極めて自然的で、作意を用ひない挿方の花を挿すのであるから、梅を挿しても女郎花を挿しても、その自然の趣味が座間に溢れて居る

花の種類

無論時花即ちその時に會へる花を挿けて可い、けれども五十回忌とか百回忌と云ふやうな遠忌の花は兎に角、先づ百ヶ日とか一週忌など、歿後時日を多く經ない場合には白色の花を一種挿けるのが昔からの定法に爲つて居るが、これは是非然うありたいのである。

假令又遠忌でなくとも、元來忌日は其人を偲ぶといふ、所謂涙に袖のぬれる日であるから和洋の草花を挿し交ぜた美しい挿方の　食卓飾の盛花や、春の花壇を見るが如き心を浮き立てるやうな花は絶對に好ましくない、何んとなく謹愼の意を表して居るやうな、大人しい花を選ぶことが大切であらう。

花器と花臺

餘り姿の奇矯に過ぎた花瓶や見立物は相應しくない　場合に相應せぬ、矢張花と同じく眞面目なものを選ぶべきは當然である、臺は花瓶と花の姿に應じた・・餘り姿の懸け離れぬもので、相互の調和の好いのを取り合せるといふことが肝

ひ、前の佛前の花といふのは寺院の本堂とか持佛堂の裝飾の瓶花をいふのであるから、自然趣味にも風情にも多少の相違が出來て來るのは當然であらう。

玆に佛事の花と云ふのは卽ち在俗の家の床に――佛事や忌日などの折に客を請ずる座敷の床の間に挿ける花のことであつて、別に佛間とか佛壇とかの前の瓶花ではないが、然し尚幾分か佛事の意味を罩めるかその心持を偶して挿すといふことが一種の意匠である。

卽ち花は如何なる種類のものでも、時の花を挿すのであるが、成るべくは故人が……その手向を受くべき人が生前に愛した花であるとか、その人の性行を代表するとかいふやうな意味に於て、或る何かの意匠を考へて挿けるといふことも亦非常に面白い事であらうと思ふ。

花の姿は眞、行、草の何れの風體に挿すも隨意ではあるが然し、忌日なれば、百ヶ日までは成るべくは眞體の瓶花で且つ一體の風情がしをらし味のある……卽ち技巧を用ひたり矯奇な姿の花などは避けた方が可いのである。

るからである、で、其上更に臺を用ふるといふのは所謂屋上屋を造るといつたやうに餘計なものを添加することになつて如何にも醜い、然れど必ずしも佛前の花には臺を避けよとの意ではない、唯裝飾の調子の上からその必要を認めないといふのみである、で、若し強てこれを用ふるとすれば厚板か章魚臺の如うな花瓶の附屬品とも見らるる簡故な臺で充分である。

佛事の花

その趣味と花の姿

趣味は佛前の花に似て更に稍眞面目にありたいのである、一種挿、交ぜ挿、それはその時と場合に依つて隨意であるが何れかと云へば同じ交ぜ挿しといふ内にも餘り派手に過ぎないそして穩かな狀の方が可い。

佛事の花――理窟を云つたらば如何うなるか知らぬが先づ普通には年忌だとか忌日だといふやうな折にめいめいの家、卽ち在家や俗家の床の間に挿す花を云

ない、枝や葉の使ひ方に省略を用ひないで圓滿具足した正しい挿し方が好ましいと云ふの意に外ならぬ。

花瓶と花臺

花瓶は何でも可い、又獻華の時のやうに決して新しい器をも望まぬ、寧ろ古色蒼然たる古銅瓶などの方が却て外の裝飾と能く調和するやうに思ふ、竹器、籠花器、陶磁器などは裝飾の調和といふ上からは遙に銅器に劣つて見える。

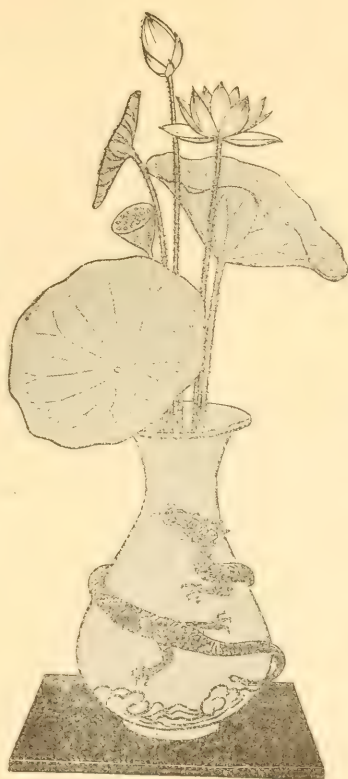
花器の姿は花の姿と調和するやうなものでなくては不可らぬ、そして廣口や水盤や其他流儀花で使用ふ薄端といつたやうな花器は總體に面白味がない、花が…瓶花の姿が既にモウ曲のないスラリとした眞の體であるから花器は如何うしても方形式とか四方形とか、然もなくば皷形、熨斗形のやうな眞面目な形の、そして少し丈の高い器が能く調和するやうに思ふ。

花臺は三つ具足飾、五具足飾の何れたるに拘らず總て佛前の花には大抵は特に臺を使用ふ必要がない、それは佛前には大抵一定した檀か若くは高案が置いてあ

の趣味は實にこの兼好の一句に盡くして居る。

對瓶の時

對瓶も一瓶もあるが併し若し眞の五具足飾りなどの折には花瓶は二つであるから、花の姿も對瓶に挿すが正しい行り方であり又對瓶でなくては裝飾上の調和を得ない、卽ち草の花でも、木の花でも、單に一種挿す場合は勿論、多種類の花を交ぜ挿にする時に於ても花の種類、花の丈幷に花の姿を左右同樣にするのである、但し對瓶でも一瓶でも花の姿は丈の高い眞體の花に挿したのが樣子が可い、投入花は如何に自然を主とするものであるとは云ふものゝ、懸崖の松を見るやうに倒れ掛かつたやうな花……小間の床の間の花か文人飾りの机上の花の如き態に挿けることはこれを避けねばならぬ、それは場所に依つて挿花の風體を變へるといふことが必要な次第であつて、例之ば大禮服を着用しなければならぬ場合に着流し姿や兵兒帶の略裝をして出ることを避けると同じやうなものだからの事である、但し眞體に挿せと云つても彼の流儀花で云ふ形式の上の眞の形の意味では決して

のあるので、紅紫絢爛などいふ盛花を見るやうな瓶花は佛前の趣味を現表するものとは申されぬ、詩宗廣瀬淡窓の詩に、花點二佛身一といふ句があるが如何にもその古い禪寺などの物寂て幽靜な狀を見るやうな心地がする、佛前の花は如何うしても恁うでなくては面白くない、

だから佛前の花は飾りとは云ふものゝ美麗といふ意味に於ての飾りではなくて、靜かな、沈着いた、淋しみを表はすべき裝飾用といふ心掛で挿ることが肝要である、卽ち曲や技巧は努めて之を避けて只素直に、しほらしいといふ狀にありたいのである、これは樒や松の折枝を挿す時ばかりでなく、花物を挿けるにしてもだ、菊紅葉を折りちらしたる、と兼好が書いたのは誠によく佛前の挿花の情味を寫したので如何にも物寂た佛寺の趣が動いて見える、佛前の瓶花

施したる室に、閑寂な花を挿さうとする場合の外は籠花器は相應しくないやうである。

佛前の花

純然たる裝飾的の花なり

前にも云ふ如うに佛前の飾り花はその起源は兎に角、今ではモウ純然たる裝飾の爲にするものと爲つて居るからこれを挿すにも其心持でしなければならぬ、だから一種挿、例之ば松、蓮などを何となく挿したるも好い、が、然し又三種四種の木の花草の花を無作意に交ぜ挿しにして佛前の莊嚴を添へたのは佛前の花としては最も可いやうに思ふ。

その趣味と花の姿

佛の前……形容しては七寶莊嚴だとか、天花雨り、紫雲靉靆くなどと云つて如何にも華麗な狀に思はるゝが、何れかといふと物靜かな幽寂な狀なるが佛前の趣味

然し最も上品で、そして打ち上つて見えるのは相生眞と稱へて二本の松を眞としてこれに菊か梅かを插け添へてそれに熊笹でも配つたのは姿も風情も豐富りとして非常に床し味がある。

花瓶と花臺

花瓶は花に相應するものでなくては不可らぬことは勿論であるが、茶席だとか小座敷の如きは別として、賀儀を行ふ廣間や書院などでは古銅器、磁器、陶器等の端正な姿の花瓶が取合が可い、その他季節に依つては……若し夏季などであれば古銅製か何かの砂鉢や大水盤の類を用ひたのも却々に風情がある。

花臺……大抵は之を用ひる、成るべく寛濶りとして正格な形のものを、但し水盤だとか又非常に丈の低い花瓶を用ふる場合には臺は低くなくては取合が悪い、棚……棚は違ひ棚でも飾り棚でも又、卓、文机などの上の瓶花には臺は用ひない方が可いのである。

茶席や小座敷であつて極めて淡雅……淡雅といふよりは寂といふ方の裝飾を

には　例之ば金婚銀婚などの筵席の床には高砂の尉と姥だと、か蓬萊だとかいふ愛たい意味の畫や歌や詩の掛物を掛けて島臺でも飾るといふ行り方の裝飾を施す……所謂眞の裝飾を施すが普通であるから、花も行や草のそれよりは、端正な眞體の方が能く相應するのである。

花の種類

時の花を三種も五種も美はしく賑やかに交ぜ挿しにする、それも純粹の日本の草花のみでなく、洋種の花も品の可いものであれば外の花と挿し合せに使ひたい、だからこれらも更に去り嫌ひなどはしないのである。

又お定まりのやうではあるが、春季であれば松竹梅……少し眞面目に成るやうではあるが却々惡くない、若し又秋季であれば老松に菊を配ふとか、或は菊慈童の故事の意味を取つて山路菊を澤山に挿けたのも面白からう、その他老松に薔薇を添へて不老長春の意を偶した文人風の挿入れ花なども裝飾の模樣に依つては非常に趣味があるやうに思ふ。

までもない。

金婚式・銀婚式その他賀筵の花

花の姿

絶對に眞體の花でなくては不可ぬといふ譯ではないが何れかといへば眞體の美はしく賑やかな瓶花が挿けたいのである。

婚禮の時程には莊重端正の花を要求する次第ではないが、先づ恁ういふ席には眞面目な挿法を用ゐたいのである、卽ち端正な内に自ら溫味があつて加之も麗はしいといふ趣味の花を可とするので、卽ち端正華麗といつた調子に挿し上げるのを主旨とする。

勿論床の間の花であれば掛物や置物やその他裝飾全體の模樣に依つて配合の好いものを、又棚や卓上の花にしても置合せの器物の取合せや調和の有樣を考へ合せて工風もし技巧もすることであるから一樣には云はれぬが大抵恁ういふ席

ある、畢竟これは花を挿す人の働き……巧者といふものである。

花の種類

季節に依ることであるから送別には偲ういふ花といつて定めることは出來ぬ、兎に角何の花に限らず時の花の美はしき、而て榮ある花を選びたい、木の花にもせよ、草の花にもせよ、その一種挿けと交ぜ挿けとは隨意である、但し四時に通じて可いのは松である、だから如何な花でも構はない、時の花を……瓶花の姿を補ふべく配ひ添へるといふことも面白からう、然れどこれも其の花の姿と風情とに依つて調和するものとしないものとがあるから、それは花に依つて考へ合せなければならぬ、松が可いからとて調和の適否を考へないで、如何なる花にも松を使へと云ふやうな、例の柱に膠するの愚を行つてならぬ。

花瓶

定まりたる形狀は素よりない、花と他の裝飾に調和の良いものを用ふるが肝要である、但し投入花の方では彼の俗氣紛々たる流儀花風の花瓶を嫌ふことは云ふ

ことはありたく思ふ……勿論それは挿方やその姿の上のことでは無い　唯聊かなりとも其人と別れるのを惜むとか、又はその首途を祝福するとか、早く歸り來れとかいふやうな意味を表はす……所謂一種の意匠に屬することである、例之ば綰柳の故事に思ひよせて、挿した柳の枝を綰ねるとか、行末を祝つて松でも……勢の宜い松などを挿けるとかする、松はその祝意を表はす外に尚ほ例の行平朝臣の、松としきかばの古歌の意を偶して居るので、留別の席上の花としては却々に面白味がある、かういふ事は送別の花にばかり限る事ではない、婚禮にしても、新築祝ひの花でも、又壽筵の花にしてもたゞ多少その場合に相當の意味を表示すべき……趣味のある意匠に依つて表示することが必要で

花器

これも別にこれと定まつたものはない、花の種類と花の姿に相應はしい器で、そして出來ることならば眞面目な端正な姿のものが好ましいのである。

花臺

無論花瓶の姿に依るのではあるが、餘り形の大きくないもので、且つ花の姿に似附はしいものを用ふるのが可い、花瓶が古銅であれば臺は唐木製か、螺鈿、蒔繪、桑など何れも可ならざるはなしである、然し流儀花の方で使ふやうな赤塗や金縁のものは俗氣があつて如何うも面白くない。

送別の席上の花

花の姿

眞、行、草、何れの體といふ定法は勿論ない、然れど單に花を花瓶に無雜と挿した許りでは餘りに働きが無い、だから少しは餞の意味を何處かに含ませると云ふ位の

花の種類

松竹梅——無論可い、松に梅、紅白の梅の交ぜ挿し、若し又秋なれば菊一色か松に菊、或は萬年青等が凡て斯ういふ折に相應はしい花である、唯だ忌むべきは紫色の花、これは色の褪め易いといふことから來たのである、その外にも散り易い花例之ば芥子のやうなものも面白くない、兎に角何を挿し合はせるにしても松は何よりも可い、松を主體にしても又配ひ使つても、昔から相生の松とか常盤の色とか云つていろ／＼とこの木を愛でたき例に云ひ立てゝ居るから、例令若松の一枝でも構はぬ、これを配ふといふことは最も面白いやうに思はるゝ。

からの事である。

婚禮の花

花の姿

その陳列する場所にも依り又外の装飾の模樣にも依る事であるから一概に婚禮の花は斯ういふ姿にと云つてそれを極めていふことは出來ない、然し床の間に三幅對だとか二幅對だとか、然うでなくとも狩野派などの眞面目な眞の描き方の掛物を掛けるといふのが普通恁ういふ際の極りのやうに爲つて居るから、如何うしても床の間の花だけは眞體の花が可いやうである、けれどもそれは眞の體……花の風體のことで決して姿ではない　投入れの方では花の趣にこそ眞、行、草の三體を立てるやうなものゝ、姿は例の千變萬化で、一定の法則といふものを設けないで、花の形や姿は四邊の装飾と釣合ふやうに挿せば可いのである、決して昔の流儀花でいふ所の眞、行、草の定つた姿に拘泥するやうな愚を學んではならぬ。

慣で松竹梅――無論それは時節に依ることで、梅のない時分には松竹梅が如何に好いからと云つてもそれを求めることは不可能であるから他の花を選ばなければならぬ、卽ちその他のものと云へば松に菊、萬年青、若し春ならば福壽草などのやうな名が愛たくて祝福の意味を含みたるものなどを挿けたいのである、但し古い習慣で婚禮に紫色を嫌ふとか、佛事には白の花を選ぶといふやうなことも、極端に守る程のことではない、然れどもさういふ事も注意するの必要はあらう、若し他人に依賴されて花を挿す場合に自分では然ういふ御幣擔ぎはつまらぬ事だと思つても、依賴した人は存外それを氣に懸けるといふやうな事もないとも限らぬ

これといつて花の姿に定りはないが何れかと云へば上品で勢の良い花を挿したいのである、枯れ枝を用ひたり、色の褪せた花や葉を使つたりして、冬空に寒林を見る如うな痩枯の狀や、木枯の後の梢を眺めるやうな寂し味のある姿の瓶花は避けなければならぬ、唯生々の氣が滿ちて何となく家の繁榮を祝福して居る如き狀の花が好ましいのである。

花器

既に花の姿に如何うといふ一定の定りが無い程であるから隨つて花器にも無論定つた形はない、唯花と釣合の好い器を用ふれば可いのである、卽ち金器、磁器、竹器、籠花器……縱令花器でなく見立物でもそれが花と能く調和するものでさへあれば可い、成るべく花の姿、花の種類に取合の可いものを選ぶのが肝要である。

花の種類

これも別に極りは無い、只美はしい時花を用ふれば可い、且つ三種、五種、二種、何れも床や、その他の裝飾の樣子と折り合ひの可い花を選ぶのである、但し昔からの習

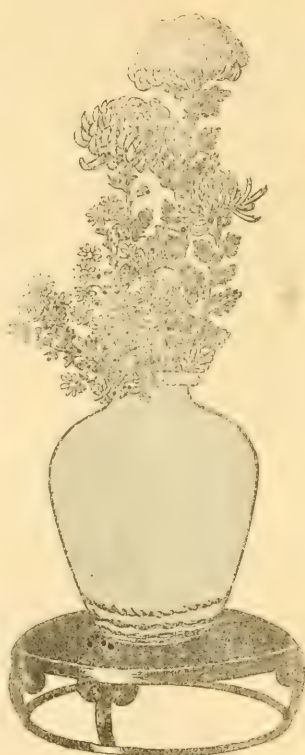
花瓶と花臺

無論これも花の姿と釣合はねばならぬが眞の裝飾を施された床の間などには式の定た方形圓形さま〴〵の花瓶を用ゆるが可い、銅器も陶器も磁器も又場所に依つては金銀瓶、七寶燒なども惡くはない、籠は少し如何うかと思ふ、それも小間か茶室などであれば少しも構はぬ、却つて眞面目な花瓶よりは趣味がある樣に思ふ。

又卓上、文机などの花には餘り丈の高くない――胴の張つた――ズングリとした花瓶が能く調和する、盛花なれば定つた盛花器か平皿のやうな姿のものを用ふるも面白からう、花臺は床の間の花なれば相應に雄偉りした姿の臺か又時としては薄板、花盤の類を用ふるも妙である、但し卓上、文机、棚上の瓶花には一切臺は省略した方が可いやうである。

新築祝の花

花の姿に定法なし

松は老松でも若松でも可い、老松には千年の緑だとか千代も變らぬ常盤の色の愛き意味を含み、又若松には行末の榮えを見るといふ心持も表はれて居るから共に愛さの限りを盡すとの意味で用ふるのである、それに菊はこの佳節の立物とも見るべき唯一の花であるから如何うしてもこれは使はねば不可ぬ、その外にも紅葉のやうなものも色どりの上からその一枝を加へて瓶頭に美しみを加へたいのである。

若し食卓上の花や客間の高卓の花――例令歐風の盛花でなくて普通の瓶花であつても、少し麗はしく賑かに挿し上げようといふ時には四季咲の燕子花、錦木その他薔薇、トレニヤ、カンナ、ベラコニユムの如き洋種の花物、此外八朔梅、澤みづき、などを、五種も七種も挿し交ぜて成るべく賑やかに美しく挿し上げるのも好い。

和しない爲である。

花の姿の高い低いと云ふことも、枝數を多く用ふるのも、用ひないのも、それは挿ける所の花の種類に依ることであつて一概には云へぬ、が、先づ普通はタツプリとした……花の數も種類も思ひざま多く使つて、幅もあり奥もあり又高さもあるといふ花が好ましい、然し机上や食卓上の盛花や一輪挿などには必ずしも大い寛濶りとした瓶花のみが可いとは限らない、盛花は別として一輪挿の小花瓶の花などは眞、行、草の各體を通じて上品で且つ優い花が好ましいのである。

花の種類

大體菊の節句の瓶花と同じやうな心持で選べば好い、が、然しこの佳節の花としては菊ばかりでなく少しは外の花、——即ち木の花も草の花——花物ではないが特に松の一枝を加へたい、これは君が大御代の彌榮えに榮え給はんとを祝し奉るの意味で、この愛い常盤木を……如何なる祝賀の場合にも用ひられぬ事のない松の一もとを使ひたいといふのである。

花瓶と花臺

花瓶は如何んな式のものでも能く調和する、壺でも方形式の瓶でも、その他籠、水盤、一輪挿の小花瓶、見立物のいろ〳〵、總て菊花を挿すには能く調和する、唯その形は花の姿に依つて取捨することが肝要である。

花臺も大抵はこれを用ひないで、薄板か章魚足臺の方が能く釣合ふ、けれども眞の裝飾を施した床の間の花などには唐木製の丈の低いものか、桑に金蒔繪でも施したものなどを用ひた方が品もよく又調子も好いやうである。

天長節の花

花の姿

正式に裝飾を施した客室、祝宴でも開くべき座敷には瓶花の姿も眞の體か然もなくばセメテ行體に美はしく品能く挿したいのである、それは草體となると花の風情が何となく破格洒落の風體になるから、如何うしても正格な眞の裝飾とは調

た狀は眞に無限の幽韻がある、それに好いのは山路菊、アノ眞白な品の好い花……全く世間の塵に汚れない氣高い花を、株挿けのやうに、　少し花の數を多くして煤けた籠などに挿した狀である、黄菊白菊その外の名はなくもがなと古人は歌つて居るが、この潔白な山路菊の色を見ては、黄菊も矢張俗氣があるやうな感がある、モウこの純白で輕素な山路菊の一種挿に優る風情はあるまいと思はるゝ。

若し菊ばかり挿けるならば……一寸眞體のやうな風に無雜とさしたるも面白い、この挿し方は一番菊花の眞趣を表はして居る、その他には今いふ山路菊、これは丈を低く、靡いたやうな態に籠花生に挿すか、さもなくば廣口の瓶か大水盤に、矢張莖短にポチ〳〵と株挿けのやうな工合に挿すのであつて、これも却々に趣味が深くて如何にも菊花らしい所が見える。

若し又交ぜ挿けであれば行體か草體に挿けて、それに紅葉を根〆に一本か二本を添へるのである、これも悪くは無いが到底も單純な菊一色の氣高くて且つ上品な態には及ばないやうに思ふ。

花の姿

花の姿はその挿ける花に依つて異るから一樣に云ふことは出來ない、が、この節句は一に菊の節句といふ程であるから觀賞の中心は・・・・挿花として最も賞觀され又重陽の故事にも因緣のある菊花が好い、だから重陽の花には是非菊の一本を瓶頭に挿けたいのである、假令三種五種の交ぜ生け花にしても、その內に一輪でも可いから菊花がなくてはこの節句らしくないのである。

花の種類

挿し交ぜも惡くはないが同じことならば菊一色の方がこの日の瓶花としては遙かに風情がある、黄菊に白菊半開、莟、滿開のいろ／＼を取り交ぜて高く低く、少しの作意も用ひないやうな狀に、古銅の方形式か何かの花瓶に挿し

花瓶は矢張り細長くて形の締つたのが能く調和する、廣口の瓶や水盤に挿したのも悪くはないがそれは床の間の飾裝の調子、卽ち掛物の形や置物などの様子に依ることで、一概に恁うと云つて極めていふことは出來ぬ。

籠も七草を挿るには却々風情がある、挿すべき花が既に柔かみのある　優しい感じを與へるものが多いから花器にザングリとした籠花入を使へば更に取合せが好い、丈は籠花器であれば餘り丈の高くない　何れかといへば偏平い姿のものが能く調和するかと思ふ。

花臺は用ひても用ひなくとも、其場所――花を置くべき場所と、花瓶の形と、それに花の姿とに依つて取捨しなければならぬ、が、籠花器には姿の如何に拘らず臺は用ひない方が風情がある、用ふるにしても四方が圓形の薄板位で充分である、厚板ではモウ何だか重苦しいやうで俗つほい心持がする。

重陽の花

七草はいろ〳〵あるが昔から云ひ來つて居るのは、女郎花、尾花、撫子、苅かや、藤ばかま、葛花の七種である、或は朝顏――朝顏は今いふ朝顏のことではない桔梗であるが……それに萩を加へて葛か撫子の內を除いた七草もある。

萬葉集には秋野爾咲有花乎指折可伎數者七種花芽之花乎花葛花瞿麥之花姬部志又藤袴朝皃之花と詠んである、又近頃物好の人が選んだ新七草といふがあつてそれは蓼だの龍膽だの、水引草だのといふ極々侘びたものゝ許りを集めたので、所謂澁い趣味の七草であつて、これは茶室などの花としては實に絕好の風情がある。

卽ち七草といふのは恁ういふ風に人々の好みに任せて風情の似付かしいものを選ぶのであるから、何れをそれと極めるにも及ばぬ、秋の野に生ふる七種の草花を選めば可い、又必ずしも七種の草花を揃へなくとも可い、只秋の野邊の態――趣味を表はすべき、代表花を二三種選んでそれを挿しても充分に面白味はあるやうに思ふ。

花器と花臺

籠花器……殊に置花器などに丈短に挿す茶席の花などは別として、床の間の花、座右の置花などは、丈を高く無作意に挿けて、……眞に秋の野邊にでも行つたかと云ふ感じの起るやうな態に、スラ〳〵と挿さなければならぬ。

花の種類

七夕會の裝飾を特に施されたる座敷であれば勿論、然なくても此日に茶事を催すとか歌の會などを催すとか、その他七と夕會いふ主意の下に人を請ずるやうな場合の瓶花は如何うしても七草が好い、七草の外にも當季に觀賞すべき花は荻、木槿、それに芙蓉、高良薑など尙いろ〳〵のものもあるが然し何となくなつかしい感じのあるのは矢張り七草である。

の瓶花には一切之れを用ゐない方が趣味があるやうである。

七夕の花

花の姿

當季の觀賞花はいろ〳〵ある内に於ても先づ第一に數へられるのは秋の七草である、だから七夕の花にも大抵は七種の插し交ぜといふのが普通であり又一番趣味があつて、そのなよ〳〵と秋の初風に靡く艶いた狀は七夕會の趣味にも又その裝飾にも殊に能く調和するやうに思ふ。

花の風體は眞、行、草、何れの體に插すも隨意ではあるが、兎に角全體の風姿があはあはとして優し味のある、そしてその自然の情趣が表はれるやうに插けるといふことが肝要である、で、行體に插けるにしても眞體に插けるにしても、フウワリとして殆んど夢の如うな……淡い狀に插けるといふことが大切なので、苟りにも骨々しい態や武張つた樣子などは微塵も見せてはならぬ。

蒲菖がこの節句の大立物……挿花としての立物であることは無論であるが、この外にも當季に相應しいものは花橘、卯の花など、この五月といふ月には歌にも詩にも俳句にも歌はれて深き因のある花であるから惡くもなからう、その他交ぜ挿しの花にも單種の挿花にも用ふるのは、百合、玫瑰花、鐵線、綉線花などである、若し文人風の裝飾を施した座敷の或る場所などに老松を挿けて、それに菖蒲の少しも配つた狀は却々に捨て難い趣がある。

花瓶及び花臺

菖蒲のみを挿ける時には花瓶は丈の高い四方形の……締つた式の花瓶が調和が可い、然ういふ姿の花瓶であれば古銅でも、磁器でも凡て能く取り合ふやうである、單に、菖蒲ばかりを、挿けないまでも、菖蒲を一瓶の主體として挿ける場合は總て然うである。

花臺は床の間に置く時か、座右の置花……態とらしくなく、無作意に座間に置く瓶花には、臺……成るべく丈の低いものか薄板を用ひ、飾板や違ひ棚や歐風の卓上

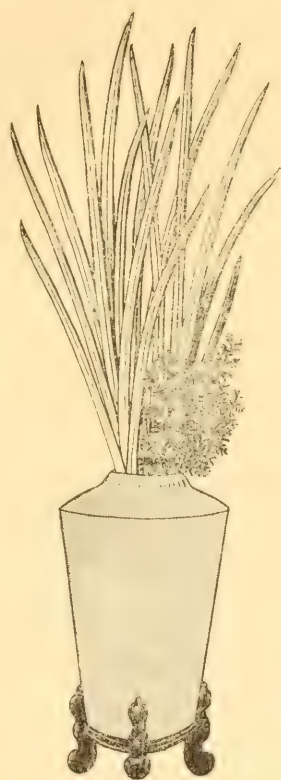
のを交ぜ挿にするにしても、花菖蒲の一もとが無くては此節句の納まりが付かぬやうな感じがする。

歐風の卓上の花だとか、暖爐上の飾り花だとか云ふものにはいろ〳〵の時花を交ぜ挿すのも可いが、日本風の床の間の花でも、又床の間以外の瓶花、例令ば文机の上とか座右に無作意に配置する花でも、この菖蒲ばかりは外の花を交ぜて挿すよりは單に菖蒲のみを……その白なり紫なりを只何んとなく無作意に摑み挿しにしたやうに挿けたのが趣味も風情もあるやうに思ふ、卽ちその花の姿のスラリとして嫌味のない……男らしい所がこの花の觀賞點であつて、之を花瓶に挿すには矢張その態をそのまゝに瓶頭に寫すといふことが肝要なのである。

然し他の花を……例令ば盛花などであつて、百合だの、牡丹だの、罌粟だとのやうな多くの草物を挿し合せる場合には瓶花の姿もいろ〳〵に變るのは免れない、それは畢竟菖蒲のみが觀賞の主體とならないからの事である。

花の種類

當季の主なる觀賞は菖蒲である、だから花は眞、行、草の何れの體に挿すにしても總てスラリとした曲のない花型となるが當然である。

菖蒲は此頃に盛に開花するから端午の節句に之れを挿けるのみでなく、そのしやうぶと云ふ名が尙武と國音の相通ずる所から男兒の祝ひ日たるこの節句にこれを挿けるのである。

花菖蒲ばかりでなく、薰菖蒲‥‥彼の昔から歌にあやめ刈り葺くと詠まれて軒に葺く菖蒲などもそれに蓬を配つて花瓶に挿す程で、例の流儀花の方では花のないものは花瓶に挿ないと云ふ程の規則があるにも拘らずこの五月の節句には薰菖蒲と云つて蓬と共に葉ばかりの菖蒲を花瓶に挿ける位であるから、兎に角この節句には菖蒲を唯一の觀賞花とする、一種挿でも又他のも

花瓶と花臺

桃一色の場合には花瓶の形は成るべくスラリとして……形の締つた細長い式の器が能く調和する、それから床の間……眞の床飾りの時の花や雛壇の花の外の花、卽ち茶室や小間に挿ける場合には偏平い器でも又見立物でも、籠花器などでも決して惡くはない、又棚上の花、机上の飾り花などには古銅器、水晶瓶、陶磁製の小花瓶が調和が可いやうに思ふ。

花臺は床の間の花には方形式、長方形式の、餘り丈の高くないのが能く似合ふが、雛壇は勿論、棚でも食卓でも、文机の上の花でも、大抵は花臺を用ひない方が可いやうである、但し茶席の花には場合に依つては薄板を用ふることもあるが、それも床の間が板床であれば用ふるに及ばない。

端午の節句の花

花の姿

桃花とを取合せた所には何となく都大路を見渡した如うな美しい樣があつて優美な雛壇の裝飾には何所となく調和もよく、又場合にも相應しいやうにも見える。然れども食卓上の花、棚上の花の如きもので、その置くべき位置の如何に依ては桃一色では調子の惡いこともあるから然ういふ時には種々の木の花も草の花も挿し交ぜる、卽ち前に云つた辛夷や木蘭は勿論、棣棠も金絲梅も、椿も、――その他胡蝶花、菫、それにクローカース、ヒヤシント、フリージア、オキザリスなどの如き洋種の草花を挿し交ぜるといふこともする、然し桃だけは假令一枝でも二枝でも可いから是非その美しい薄紅色の花を他の花の間に點綴して瓶頭に優しみを加へたいのである。

あるからと云ふ譯でなく、元來桃の花それ自身が曲折がなくてそのスラリとしたるが本來の性質……所謂出生であるから、自然の性情に則つて、その風情を表はすのである、これが卽ち投入花の本領で、所謂自然の規則に隨ふといふものである、勿論それは單に桃のみを一種挿にする場合を云ふのであるが、外の花、……例令ば連翹とか木蘭とか、辛夷、柳などを挿し交へる場合には、桃ばかりは素直に挿すとしても、他の花――卽ち挿し交ぜの花の樣子に依つては花の形――總體の花の形の種に變化することは云ふまでもないことである。

花の種類

この節句は一に桃の節句といふ程であるから總ての裝飾も桃に因んで施設する、だから花も成るべくは桃一色の方が可いのである、若し挿し交ぜるとするにしても柳か連翹位のものである、黃色い連翹と薄紅色の桃の花とは餘り配色が面白くない、それよりは芽出しの柳――嫩黃色の新芽を吐いて居る柳の方が遙に優しみもあり又配色も好い、柳綠花紅といふ樣も見え、且つはその黃ばんだ綠の若芽と

花瓶と花臺

花の姿にも依り又その置き所にも依ることであるが、花瓶は成るべく型の正しい……古銅器か陶磁器などが好い、但し茶室や小間や書齋などの床の間には竹の寸筒か籠も風情がある、卓上……特に食卓上の花には形の定りたる小形の花瓶でなくては面白くないのである、臺は床の間の花には花瓶に相應する形のものを用ふるが又場合に依つては薄板位を用ひて花臺を略することもある、卓上、棚、カーヘル上などには總て花臺は用ひない方が可いのである。

雛の節句の花

花の姿

これも、眞、行、草、何れの體に挿しても隨意であることは無論であるが、桃を挿せばその風體の如何に拘はらず成る可くスラリとした姿に……所謂桃の特性を表はすやうに挿すといふ事が肝要である、これは雛壇のやうな特別の場所に置く花で

花の種類

此の季節の花としては先づ梅、椿、柳などの木物の外に、草の花では、少し遅いが水仙はまだ／＼配ひの花に用ふに充分用に立つ、若し又卓上の盛花、棚飾の小花瓶用のものとしてはヒヤシント、フリージア、三色菫、香ひ菫、その他室咲の洋種の草物、薔薇などは殊に瓶頭に美しみを添ふるものである、松は老松でも若松でも構はぬが恁ういふ時の花の主體として出來ることならば一枝でも可いから挿みたいのである、それはその麗はしい常盤の葉色に限りなき皇國の榮えを壽ぐの心を偶し、又葉毎にこもれる千年の數に御代の長久を祈り奉るといふ祝福の意味が能く現はれるからである。

用ひぬ方が可い、使ふにしても薄板位で充分である、廣間には花瓶相應な――確りとした唐木製か蒔繪か、然もなくば桑などの臺を用ふるが可い。

紀元節の花

花の姿

眞、行、草、その風體は隨意であるが、祝日の中でも特に記念すべき大切な佳節であつて、座敷の裝飾も自ら眞面目に施設はれ、配列の器具調度類も何處となく祝意を含んだ端正な形のものが多い上に、時は二月で、季節も自然引き締つて居る頃であるから、挿花も矢張りそれに伴れて、この時候と此の佳節に調和すべき威儀のある挿花を要求する、何うかと云へば神々しいまでに莊嚴な趣が瓶頭に漾つて見ゆると云ふ瓶花が好ましいのである、而してその内に自然と平和な、……美し味の見えるといふ態に挿して、この芽出度き佳節に當つて君が代を千代と壽ぐといふの意味を表はすべき意匠を罩めることが必要である。

に椿、柳に椿、梅に寒菊、松に椿、その他、梅、松などに水仙、寒菊、葉牡丹、福壽草などを配ふといふ類の瓶花である、然もなくばそれ等の花の一種挿である。

新年の花の中で最も莊嚴でそして品格のあるは若松の一本挿であらう。

花器と花臺

其の形は成る可く端正なものを選びたい、見立物も惡くはないが何れかと云へば矢張花瓶として造られたものゝ方が可い、但し茶室や、その他の極めて手狹な小座敷などでは見立物の花器や一寸した籠などを用ふるも惡くない、竹器、銅器、陶磁器など、凡て花に調和の可いものは何を用つても差支へぬ。

小間などで草體の花を——極めて洒落な花を籠花器に挿した場合には花臺は

何れかと云へば端正で上品な、そして權威ある花が好ましいのである、それは新年――年の始めに方つて一年を祝福するといふ意味がある所から座敷の裝飾も一體に品格のある施設をして主人も主婦も又訪問の賀客も禮裝をするといふ程に眞面目で、氣分まで何となく改まる時であるから挿花も矢張り眞面目な上品な姿でなくては調和せぬのである、卽ち眞體の花、若し花の種類や枝振りに依つては行體に品良く挿けるのである、裝飾の樣子にも依ることだが草體の花は調和が惡いやうに思ふ、然しそれは正式の客座敷とか、廣間などに眞の裝飾を施した場合のことである又同じ客を招請する室でも茶室だとか小間だとか、その他書齋などには草體に挿けたのも隨分風情がある、梅に水仙、せんりやう、寒菊に蠟梅といふやうなものゝ交ぜ挿じを――極く無雜作に投げ挿しにするの類である、棚上、違ひ棚、卓上の瓶花なども又眞の花でない方が却て趣味があるやうに思ふ。

花の種類

一月の花、殊に新年の花で、昔から先づ第一番に數へられるのは松竹梅、次には梅

もそれに調和するやうな美い花――いろ〳〵の木の花、草の花をタップリと挿し交ぜて、目の覺める程に華やかに挿けたいのである、然し花さへ美麗であれば必ずしも種々の花を用ふるには及ばぬ、薔薇一色、燕子花、菊、その他梅にしても椿にしても、その一種のみを挿すこともないではない、要するに華麗といふ趣味が此瓶花の第一の目的であるから茶室の花の如うに侘だの、寂だのといふ澁味のある花を挿けないやうにすることが肝要である。

花臺は用ふ可らず

暖爐上の花も卓上の花と同じで、既に其の場所――暖爐の上が一つの臺と見做すべきものであるから、別に臺といふ程のものは用ひないのが可い、但し花瓶に附屬して居る小形の敷板程度のものなれば用ひても差支へはない。

新年の花

花の姿

左右に燭、又その外部に花一對を飾るのである、だから如何うしても對瓶でなくてはならぬ。

然し時としては、花一瓶、燭一個、それに何か置時計か動物か偶像のやうな置物を飾ることも無いではない、斯ういふ場合には對瓶でなくても可いが大抵は先づ華は一對にするが普通である。

花の姿は眞の形が好し

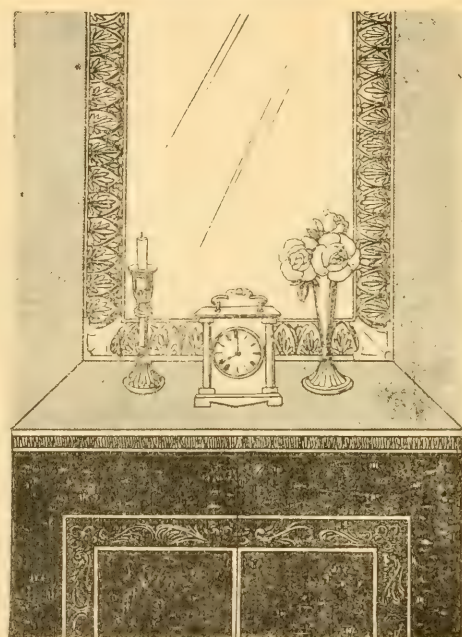
行體の花も惡くはないが成るべくは眞の姿の方が能く、調和する、加之も成るべくスラリとした挿方の花が對瓶の場合には好いのである、けれども必ずしもそれに拘るには及ばない、暖爐の上といふ元々狹い場所に置物だの燭臺だの花だのと、さまぐ\のものを陳列するのであるから、花の姿は横に狹く丈に延びた形のものが取合が好いやうに思ふ。

花は紅紫爛熳なるがよし

元來歐風の裝飾は一體に華やかで麗し味のあるのがその特色であるから瓶花

が可い、それは卓が既に一種の臺であるから、若し更に花臺を用ふるとすれば結局二重の臺に爲る譯で、極めて無恰好な體裁になるからである。

暖爐上の花

對瓶が可し

暖爐上にも花を飾ることがある、これは丁度日本の古式の五具足飾、三つ具足飾の如うに香爐一つ、燭一對、花一對と云ふのが普通であつて――勿論香爐を飾らなければ置時計とか寫眞架といふやうな他の裝飾品を置くのであるが兎に角正式の飾りには中央に何か一つの陳列品を置いて、その次に

なれば座布團でこれを圍ませるのであるから、何れから見るもその表に向ふやうに挿すのが普通である、隨つて右や左へ傾いた花は面白くない、如何うしても眞體の圓滿な姿に生けなければならぬ。

花の丈は高からぬがよし

卓上の花はその高さを低く挿けるといふことを忘れてはならぬ、それは花の爲に對座して居る人の面が見えないと云ふことは甚だ好ましくないからの事であつて、普通着座をして相對する人の顏面を見るに邪魔にならぬ程度に生け上ることが肝要である、勿論少しの小枝や葉先が高く延びて居たからとてそんな事は差支へないが、大體の高さは着座せる人の胸部の邊までに止むるのが好いのである。

花臺は用ふ可らず

卓上の花には花臺は不用である、若し使用ふとしても薄板か、然もなくばしやうご臺などのやうな、殆んど在るか無いか解らぬ程の――花臺といふ程の物でなく、花瓶に附屬した小形の薄平らなものに限るのであるが、それも大抵は用ひない方

れる花であるから最も人の眼を惹く所の晴れ〴〵しい花である、で、能く挿けらるれば大變に賓主の心を慰めて裝飾を引き立たせるが、若し拙であれば見るのも嫌な感じがする、下等な洋食店の卓上の挿花のやうな感じがして却て無い方が遙かに優るのである、然れど程能く挿け上げた嫌味のない花であつて、それが卓被の色彩と程好い調和を得ればそれこそ眞に錦上の花と云ふ華麗い感じがするのである。

花の姿は四方正面

卓上の花は客が大抵四方からこれを眺めるのであるから何方から見ても裏表のないやうに挿さなければならぬ、然れど卓を座敷の壁付きに据ゑたる時か、さうなくともその室の何れかの隅の方に倚せて据ゑた場合には二方正面か三方正面でも構はぬ、然し卓は大抵その座敷の中央に据ゑるもので、歐風の裝飾なれば椅子、日本風の裝飾

花瓶

花瓶は銅器、磁器、籠、何れも惡くはないが、唯竹の寸筒は斯ういふ花には配合はぬ、又同じ銅鐵器でも薄端のやうな專ら流儀花を挿ける花器や、細長い形の瓶花はどうも取合ひが惡い、これは案が既に高いのに、其上丈の長い花瓶を据ゑては全然その調和を缺くからのことである。

卓上の花

最も榮えある花

床の間の花、高案上の花、飾り棚の花、床脇の違ひ棚の花、いろ〳〵その挿花の置き場所があり又その瓶花もそれ〳〵に特殊の趣味を備へて居るものであるが最も榮えある挿花はこの卓上の花であらう。

坐禮の時に用ふる――座敷の中央に据ゑる大机でも又椅子を圍ませるテーブルでも、客がその卓を圍んで着座するので、モウ客の目の前――眞の正面に据ゑら

座敷の一隅——床の間の對角の隅などに据ゑたるが尤も風情があり又位置を得たもので、大抵はその後を二枚折の屏風などで以て圍ふのである、又時には六枚折の屏風を立てゝその中央か左右何れかの一方へ倚せて案を据ることもある、要するにそれは裝飾上の釣合であつて豫め何所とそれを定むべきものではない、又定めることも出來ないのである。

案の高低

案は普通の高脚——丈の高いのが風情があり又取合も可い、然し日本風の座敷である時は多少低い案を用ひても惡くはない。

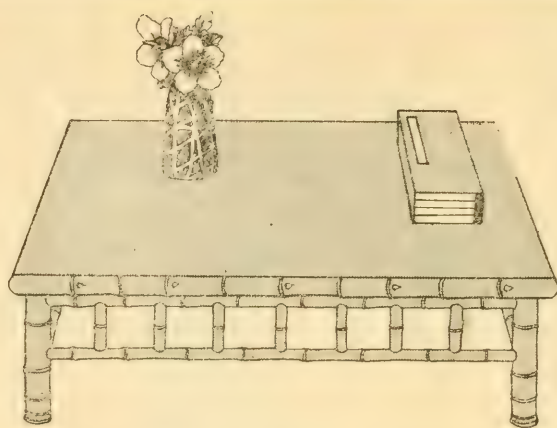
古式な日本風の裝飾には餘り多く行らぬが文人式に飾つた座敷にはこれまでも隨分行はれて居る挿花である、此花は歐風の裝飾に能く調和し、日本式の裝飾にも亦惡くはないが、殊に椅子、テーブルを配置した室にはその家の建築が純歐洲式であると日本建とに拘らず最も能く相應する、同じ日本座敷でも床の間の無い室に瓶花を置くには如何してもこの高案でなくては面白くない。

装飾中の覇者

案上の花は一輪挿のさゝやかなるものと異つて花を豊富りと、加之も大抵は種の花を三種も五種も交へて挿る、草ものばかりを挿けることもあれば木ものに草ものを配ふことも、木の花ばかりを挿すこともあつて、床の間の花としては分量から云つてもその立場から云つても、先づ室内装飾中の覇者と云ふ位置に立つものである。

花の姿

眞、行、草随意の體を用ふる、それは専ら花の枝振と他の装飾との釣合に依ることとであつて、この花の狀を一口に云へば紅紫絢爛とでも云ふので、孤寂な樣の花よりも華麗な狀に挿けた方が能く相應ふやうである。

案の置き所

装飾を主とする机であつて、一方に書冊とか巻物とか、或は香爐などを置いてそれに花瓶を配ふといふやうな時には花瓶も相應に大形のものを用ふる、そして花も可なりタップりと挿けて——マア普通の投入れ位の花に挿し上げることも無いではない。

花の姿

普通の一輪挿なれば花を手前へ向けて——斜に手前へ靡びかせて生けるのであるが、若し装飾を專らとする机などであつて普通の花器に普通の姿の花を挿すやうな時には花の體は眞行草の如何に拘らず一方に傾斜したやうな風に——置合せの調度のある方へ靡びいた姿に生けたが面白い。

高案上の花

瓶でなく外の花器――偏平い形のものか何かゞ能く調和るやうに思ふ。

机上の花

花は何にてもよし

文机上の花は云ふまでなく一輪挿の小花瓶式のものであつて、花は何でも構はぬ、和種洋種あるに任せてホンの一輪か二輪を無造作に挿すので、これも何れかと云ふと木の花よりは草の花の方が面白いやうである、野菊、撫子、薔薇、木芙蓉、向日葵などは總て好い、若し裝飾――實用の文机でなく、眞の裝飾の爲の文机であれば玉碗……翡翠とか紅玉のやうな美しい小碗に水を湛へて一二輪の時花を浮かせたのも却々に好い情趣である。

花瓶

銅、鐵、金、銀瓶も惡くない、磁瓶も亦妙である、但其の姿が極めて細長い　加之も形の締つた、硯などの邊に於て取合ひの好いものを選びたいのである、然しこれも

に依つては却つて四輪も五輪も挿した方が面白く感ずることもある、但し斯ういふ時には花の莖の短い方が好い、長くては普通の生花らしく成つて釣合が惡い、斯うなつては一輪挿の趣味を失つて了ふ。

花瓶も例の如く水晶、青磁、白高麗、染付、古銅器、その他硝子瓶、和蘭燒などは總て能く調和するやうである。

場所は棚の上の段に置くこともあり、又中段に置くこともあるが、それは他の裝飾品との置き合せの工合に依るのである、然し下段に之れを置くといふことは先づ絶無といつて可い、それは如何うも調和が能くないからである。

棚も御厨子、黑棚などの正式の飾には花を置かぬが、然し若し現時のやうに御厨子や黑棚を洋館に飾るとか、洋館でなくとも座敷に椅子、テーブルを据てその一方に此棚を置く場合には、矢張花を飾つても構はぬ、そういふ時は矢張書棚の挿花と同樣の狀に生けるのである、歐風の三角隅棚なども亦一輪挿か、然もなくば盛花風に種々の花を交ぜて挿したのが面白い、然し然ういふ時には花瓶は一輪挿の小花

も矢張一種の挿花で――流儀花の方から見ては如何うか知らぬが我が投入花の方では然ういふ窮屈なことは云はぬ、斯ういふ所までも手を延して居るのである。

書棚の花

書棚の花も却々に風情のあるものである、文人飾りには昔から遣つて居る、書冊、巻物、香爐などゝ置き合せるのであるから無論これも小花瓶に一輪挿といふ洒落な挿し方にしなければ面白味がない、漢書、畫卷、文房具などの如き文人趣味の裝飾の時には蘭、木犀、牡丹などの如きものが能く似付く、寫眞帖、時計といふやうな洋風の飾りを施した場合には矢張洋種の草花などが可いやうに思ふ。

一輪挿とは云ふものゝ必ずしも一輪に限るといふ譯ではない、莟、半開、いろ〳〵打ち交ぜて、三輪も四輪も挿して構はぬ、特に洋風の飾りか何かであつて薔薇の如うなものを挿す時には莖短に四五輪挿したるも却々に好風情である。

一輪挿でも芙蓉だの、ダリヤだの、向日葵草のやうな非常に花の大きいものは一輪――僅の一輪か多くて二輪に止めたが可い、が、その他の花は場所と裝飾の模樣

場合には随分籠を棚の上に置いてそれに果物などを飾つたのが雅致のあるのを見ても知らるゝ、只挿花用の籠——花を挿すとなると如何ういふものか籠では調和しないのである。

違ひ棚の下に挿す花

昔は書院飾りの際にはその違ひ棚の下に砂物と云つて大廣口の花瓶——水盤のやうなものに丈の低い立華を挿したものである、これも一寸趣味のないことも無い、然し投入れ花の方では古銅器、籠、水盤、陶瓶などの姿の偏平いのにザングリとした行、草體の花を澤山に——成るべくは三種か五種も挿す、或は又夏季から初秋へ掛けては大水盤に藻の花でも浮せて一寸葦の一莖か二莖も配つたのも面白いであらう。

若し又河骨の花許りを摘み取つてそれを三輪か五輪水面に浮かせ、それへ葉を——これも莖を去つてその二三枚も浮かせた洒落な風情に至つては眞に絶好の趣味である、挿花でないといふ議論があるかも知れぬ、然し決して然うでない、これ

味があり且つ何所となくおつとりとして調和が可いやうに思ふ、そして裝飾が純日本式である時、例之ば料紙文庫だとか料紙硯だとか、卷物盆、香爐といふやうなものが置き合せられたる場合なれば同じ草花でも、春なれば水仙だとか甘草だとか又極々く花瓶が小ければ福壽草なども可い、又夏であれば百合、撫子、燕子花の如きもの、秋なれば桔梗、龍膽、かにひ、木芙蓉、菊の類、冬であれば寒菊、石蕗などの如き日本趣味のものが能く調和する、然し若し裝飾が和洋折衷式に出來て居るとか、然うでなくとも歐洲式の置時計だとか寫眞帖などの類の器物と取合せて置くやうな場合には薔薇などが無論能く調和する、その外にもスミレ草、ベコニヤー、ダリヤなどのやうな洋種の花も面白い、又文人式の飾りであれば春蘭、秋蘭は最も宜しく、海棠、梨花、その他佛手柑のやうな實物も——若し花瓶さへ確りとして居れば却々に雅致のあるものである。

棚の花も亦其の花瓶は中央卓の挿花と同じく籠や竹筒は如何うも調和しないやうに思ふ、これは籠が棚に調和せぬといふのではない、其の證據には文人飾りの

云ふやうな、花が細くて澤山附いて居るものはこの挿方の花には——何れかと云ふと調和が惡いやうに思はれる。

花器は銅、鐵器、陶磁器、水晶、翡翠などの小花瓶は何れも能く似合ふ、但し籠、竹筒などは如何いふものか此の中央卓の花に調和しないのである。

棚の花

違ひ棚の花

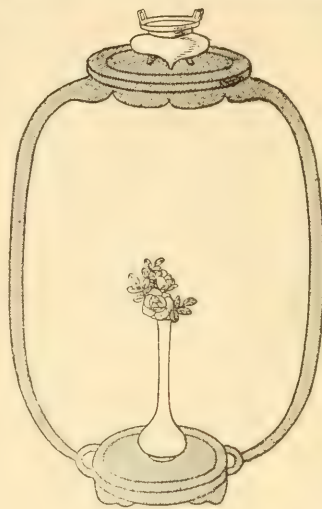
裝飾上の取合せで床脇の違ひ棚にも往々花を置くことがある、これは床の間に挿花のある時でも無い時でも爲ることで、若し適當に釣合よく挿けられた時は非常に一體の裝飾に美はし味を添へるものである。

花は矢張り一輪挿式で、花瓶は云ふまでもなく小形のものでなくては調和せぬ、例之ば水晶瓶、古銅瓶、青磁瓶などの、形の締つたものに時の花をホンの一輪挿す、木もの草もの總て佳ならざるはなしであるが然し、木の花よりは草の花の方が優し

云つて可いのである、例の流儀花の方でも流石にこの中央卓の花のみは古來投入式に挿けて居る。そしてその椿の一輪挿などは傳授物だの何のと云つて大層矢釜しく扱つて居るのは畢竟その挿し方が自然的で、窮屈な規則の拘束を受けないから規則一點張りの流俗者流の眼には格外に難かしいやうに思はるゝからの事であらう。

然れど俗流の――卑俗な流儀花に慣れた眼にもこの花の好く觀えるといふのは全くその狀が天然であつて人工を加へない所に面白い所があるからのことで、その嫌味のない而て無作意な樣を非常に喧しく云つて賞玩し來つたものである、これを見ても如何に天然を主として人爲の技巧を弄ばぬ投入花の風情が徐の花に立ち優つて居るかと云ふことが知られるであらう。

この花は今いふやうに、さゝやかな一輪挿式のものであるから、如何んなものでも能く調和する、特に椿、水仙、薔薇、牡丹、燕子花、萱草など、凡て其物々の風情が現はれる、が、比較的輪の大きい花の方が調子が好いやうに思ふ、卯の花だとか、萩だとかと

もので、形も姿も種々あつて、四脚形三脚形若くは二脚形の、高さが凡そ一尺四五寸から二尺まで位の簡雅な案である、中央卓といふのは床の中央に据るから呼ばれた名であつて、卽ち其の名稱の通り床の正中に据ゑて、上に香爐を据ゑ、下の段に小花瓶を置いてそれへ花を挿す、趣味は極めて高尙である、懷紙か何かの横幅を展け、前にこの卓を据ゑて白玉椿の一輪も挿した樣は如何にも氣高い、座敷が整んと締つて見える、小間にも調和するが廣間にも能く調和する、特に書院飾り——眞の書院飾などする場合には恰好の装飾品である。

花は無論一輪挿である、木物でも草物でも、莖短にその一枝を、蕾一つ、開き一つと云つた調子に大人しく且つ極めて無作意に挿けた所に趣が在るのであつてこれらは實に投入花の——草體の投入花の眞面目を十二分に現はして居るものと

も角もこの釣生けも床の間の挿花の一つで花の分量、姿の繁簡、趣味等は先づ胴釘の花と床柱の掛花との中間に位すると見れば間違ひはない、然しそれは大體のことを云ふので、花にも依り、花の姿にも依り、又趣味の如何にも依るから一概には申されぬことである。

花の姿は行體か草體が相應しい、そしてその枝や葉の數も多いよりは何れかといへば寡い方に趣がある、趣味は矢張り小間に適するやうに思ふ。

この花を挿ける花器は普通には船――釣舟か或は殘月と稱へる半月形の花器が普通最も多く用ひられて居る、が、斯ういふ所に釣つて風情のあるものでさへあれば何を用ひても可いのである――卽ち見立物を使ふのは自由である、何か手のある水瓶――扁平形のものに薔薇か萱草のやうなものを一枝か二枝さして斯ういふ所に釣つた樣は却々に捨て難き風情である。

中央卓の花

中央卓、これはもと支那の卓の或るものを見立てゝ花と香爐を飾る案に用ひた

はぬことはない、が、何方かと云へば先づ四疊半以下の――所謂小間の趣味に適する瓶花であると云ひたいのである。

この挿花は――元來柱掛花といふものゝ趣味が小間式のものであるから花器は隨つて簡單な――極ザッとしたものか然もなくば見立物の方が面白い、例之ば一寸した筒の花入か、竹の寸筒、根竹、尺八形その他、瓢、經筒といつた風のものが能く取合ふやうである。

花も矢張り蔓物や、垂れ物が能く取り合ふ、若し其の外のものを挿けるとすれば枝を短く――可成莖短に――一寸一輪挿と云つた風に挿すのが可い、大體は壁釘の掛花と大同小異と心得れば間違ひはない。

釣花

床天井の蛭釘から鎖を垂れてそれに極手輕な花器を釣つて花を挿すことがある、茶家の方では床の框に釘を打つて――それは元來花器を掛ける爲の釘ではなく冠を掛ける釘であるが、それへ鎖をかけて花器を釣るやうになつたのである、兎

といふことは我が投入花の方では絶對に云はない、水仙でも牡丹でも、又木物の方では梅、櫻、椿など何でも構はぬ、裝飾の模樣と花の風情とを考へ合せて配合の好いものでさへあれば決して彼れの此れのと云つて忌嫌はしないのである、況して花形の大小や其姿は一に花卉草木の風情に依るものであるといふことを知つて挿けることが肝要である。

床柱に掛ける花

これは隨分省略した簡故な裝飾に配合せしむべき場合に行る――謂はゞ先づ草の裝飾の材料の一つとしてする所の挿花であつて床柱に打ちたる柱釘に花器を掛けて簡潔な姿の花を生ける、で、矢張り花の姿も草體の方が能く相應する、然し行體の花だからとて挿られぬことは無い、が、胴釘の花に比べては更に簡略なものであるから如何しても草體の花の方が配合が可いやうに思はれる。

花は一種、二種、三種、何程挿しても可い、けれども枝の數も花の姿も成るべく簡やかなのが好ましいのである、花さへタップリとして緩やかに挿せば廣間にも似合

流儀花の方では茶家の花よりは花形も大きいし又花の分量も多い、そして花もいろいろのものを挿けるが多くは垂れもの例令ば山吹や萩などのやうな者か、蔓物卽ち梅づる、藤、忍冬といふやうなものを挿る、無論胴釘に花器を掛る場合には掛物

はなくて單に花ばかりを飾るのであつて、洞床や小間の床などには殊に配合が好い、胴釘に掛ける花器は籠、竹筒、が可い、金器や陶磁器は配合がよくない、然し金器や陶器は用ひて不可らぬといふ掟は無い、若しそれらの花器に取合の好い花を挿す場合にはこれを用つたとても少しも差支へぬ、彼れは不可けぬ、これは不可けぬといつて種々の傳授や規則を立てるといふことは例の舊式な——古風の掟に縛られる流儀花の方で行ることである。

花器のみではない花も亦然うで、必ずしも垂物に限るの蔓物でなくてはならぬ

とは無論出來ない。

挿花を裝飾の主眼とする場合は別として掛物や他の置物などの案配の調子に依つて花を裝飾の一つとして飾らうといふ場合には先花を中左右――床の何れの位置に置くべきかと云ふことを――何方に置かなければ裝飾の釣合を得ぬかと云ふことを考へて、そして花の姿を定めるのである、が、これも前にも云ふ如に花の枝は決して此方で思ふ如うな木振枝振りのあるものでないから大體は花の枝の据わりに依つてその姿を整へるのであることはいふまでもない、若し出來得る場合には裝飾の模様や掛物の畫の様子や又書幅なればその書込の工合を考へ合せて釣合を得るやうに花の位置を定めることを爲たいのである。

壁釘に掛ける花

床の壁釘即ち胴釘に花器を掛けて花を挿すことも又一寸氣の利いたもので、昔から茶室やその他草體の裝飾を施した場合には屢々これを行ることがある。

この壁釘の花は茶家では極めて些さやかな――極く分量の寡い花を入れるが、

珍花だとか名花だとかであるといふ時には正中に据ゑる事もある。

然し假令花が左右の何れへか靡いて居るにも拘らず正中に置くこともある、それは他の陳列品や裝飾の模樣の如何に依るとで、如何なる場合にはと、それを指し定めることは一寸難い、それに今一つ挿花の位置に就いて參酌すべきことは、掛物の落款の有り場所である、即ち掛物の落款を瓶花で隱さないやうに注意するのであつて――絶對にと云ふのではないが成る可くは落款の有る方には花瓶を置きたくないのである、が、假令落款は左右何れに在つても瓶花の爲にその落款が遮られて見えないと云ふやうな事さへなくば無論何方に置いても構はぬのである、即ち掛物が小展物だとか横物――即ち懷紙、色紙類、消息文の表裝されたるもの、又普通の半截ものなどの如き細長い形のものでも床の間が廣くて花を左右何れに置いても少しも落款を見るに妨げとならないやうな場合などである、然しその右に置くのも左に置くのも、大體は瓶花の枝振りと姿の如何に依ることで、如何に右に置きたいと思つても枝の都合や花の姿狀に依つては決して規則で以て定めるこ

ではないので、床の間に置く方のは例の流儀花であつて、床以外に置くのは投げ入れ風の――法則に拘はらぬ自然的のものである爲かも知れぬ。

で若し床の間の花でも不自然な――窮窟な規則で縛られた花でさへなければ其趣味は棚上の花や机上の小瓶花のそれと少しも異りは無いのである、畢竟花の――挿花の趣味の多少は姿の大小や置き場所の如何に依るものでなくて、その風情の自然的なる所にあることは云ふまでもない。

中と左右

同じ床の花でも其の花を飾る場所はいろ〳〵で中央に置くのもあれば又右か左か――そのうちの何れかの一方に片寄せて置くこともある、それは花の方を主として――裝飾が挿花本位の場合には花の姿に依つて右なり左なりの何れかに置く、卽ち花の姿が左へ靡いて居るものは床の左に、又花が右へ靡いて居る場合には右の方に据るのが普通である。

若し花が右にも左にも靡かないで、左右平等に枝をさし交はして居るとか、或は

ふのである。

挿花の風情と挿花を置く場所

床の間の挿花

昔は生花と云へば大抵床の間に置くものとのみ思つて居たものである、稀には机の上や棚の上に一寸した一輪挿の花を飾ることもないではない、が然し、挿け花と云へば先づ床の間に置くに限るやうになつて居たのである、即ち棚上の花や机上の小さな花はそれを挿花としては見なかつた位である。

けれどもそれは大なる誤解であつて棚の上の小花瓶でも机上の一輪挿でも、苟りにも花の枝を花瓶にさす上は矢張りそれは挿花である、そしてその趣味の上から見れば却てこのさゝやかな――数の内に入れられなかつた挿花の方が立ち優つて居る場合が多いこともある。

それは床の間に置くから趣味が寡いの棚や机の上に置くから多いのといふ譯

く……假令枝は何れ程長くてもその枝先が細く瘦せたものとか、又は枯れ枝でゝもあるとか、枯れて居ないまでも葉が疎であるとか花の着き方が寡い、と云ふやうなものはその枝の長短は重心を計量する標準にはならぬ、が、然し又それと同時に枝は短くとも花が澤山に着いて居るとか、葉が茂つて居るとか、或は又柘榴のやうなもので大なる實を結んで居るといふ場合にはその中心點が其子實を結んで居る場所に近く倚つて居ると考へなければならぬ、然しこの重心は必ずしも理學者が者の重心を測る時のやうに尺度で量つたり秤にかけて見る如うな究窟なものではない、唯モウ目で見た所で測定して釣合を取れば充分である、が、然しさうして目分量で量つたものでも大體の釣合は決して誤らぬものである、それは勿論眼で見た所であつて——眞に一眼睨んだのであつて、若しこれを尺度で量つたり目方にかけて測つたならば或はその中心を失つて居るかは知らぬ、が、目に見て不釣合といふ感じさへ起らなければそれで可い、丁度畫家が畫を描くと同じやうなもので要之り花瓶と花とを一つものと見て、それで全體の釣合さへ取れゝば可いとい

陰の方になつて居る、卽ち葉表は上に向くか、然もなくば斜に陽方に向ふもので、又枝のさし樣でも總てこの規則に漏れないのであるから葉を俯けに用ひたり又、上に向つて立ち上る枝を横狀に使つたりすることは矢張り其据りを得ないものと爲なければならぬ、で、横枝を立てゝ使ひ、垂れ枝を眞直に用ふるやうな不自然なる遣り口は絶對に之を避けて全く花葉枝幹の自然の狀態の位置を見定めて、挿したる枝や花がこの天然の規則に背ひて居はしないか否かを改めることが大切であるといふのである。

中心點を見定むること

次には挿花は……枝の中心點を見定むることが必要である、一本の草にも一枝の花にもその中心點といふがあつてこの中心を得なければ假令葉の据わりや花の据わりは何程整つてもその挿花は姿の整つて居ないのである、――畢竟花瓶と花とを一つものと見て其重心の中點を失はないやうに爲るのである。

重心點といふのは云ふまでもなく其木や枝の長さや大きさから云ふのではな

の据りを見ることが肝要である、何程花全體の姿は良くとも花が据らなかつたり葉の据りが違つて居ては一瓶の花は支離滅裂で姿をなさぬからである、卽ち一枚の葉でも一つの莟でも、整然んと据つてそれが全く自然のやうに――自然にその花瓶で咲き、その場所で以て發育した如くに、葉向きや位置が整つて居なければ面白くない、面白くないばかりでなくテンデ挿花に成つて居ないからである。

花の据らぬと云ふのは――元來花は莟にせよ、開花にせよ、必ず上に向つて咲くといふのが自然の位置卽ち据りである、勿論稀には俯いて咲く或る種類の百合の花や、日のさす方に向ふ向日葵草などのやうな例外が無いでもない、が、然しそれは却つて彼等の自然であつて、その俯いて咲き日に向つて廻り咲く――いろ〳〵に方向を轉ずる所が彼の花の据りであることを知らねばならぬ。

兎に角大抵の花は上に向つて開く、それを俯けに使ふのは不自然である、卽ち花が据らぬのである。

それから葉や枝も然うで、葉は何んなもので陽方に對つて葉の表を見せ葉裏は

投入花の挿け方

摑み挿にすべからず

花は前に云ふ如うに初めにその大體の姿を整へて花盆の上に載せてあるから先づ花瓶に花止を嵌める、斯くて挿すべき準備が出來上りたる時は膝を花瓶の前に推し進めて右の手に花の枝を把つて一枝か二枝づゝ瓶中に挿し入れる、決して花の全體を摑み挿しなどにしてはならぬ、一枝挿しては其枝や花の据わりや位置を能く眺め、而して次の枝を挿し入れるやうにする。

斯の如くして二枝でも三枝でも順次に挿し斯して花の總てを挿し了るのである、これは丁度畫家が一枝を描き一幹を造りては其位置描法を査め、次第に一樹一幹を描き了ると同じやうな工合に挿し上ぐるのである。

花葉枝幹の据りを見よ

一本の枝を挿すにも一朶の花を生けるにも、先づ第一に其花なり葉なり枝なり

花が全く死物と爲つて了つて居る。

然るにこの投入れ花の方では假りにその局部の名稱を體とか受とかと分つにしても、枝の長短や高低は決して一定して居らぬ、即ち或る花には受が心より長いこともあれば又控が受より短いこともある、即ち流儀花のやうに心が最も重く添は心に次ぎ、最も輕いのが止といつたやうな事はなくて、凡て重いも輕いも其風情と場合――花の枝振に依つて定める――定めるのではなく定まるのである。

要之り體と配ひと云ふこの二つの實質は決して動かないものであるが、姿は千變萬化で必ずしも一樣のものではないと云ふことを主義とするのである、即ち實質は不易であるが姿は流行のものと云ふやうにも解釋して差支ぬ、而うして其生命とする所はとり／＼なる花の趣致風情である、即ちこの天然の方則はモウ決して動かない、……動かすことの出來ぬ斯道の大法なのである、茲に於て投入花には生命があり趣味があつて、それに千態萬狀虛實さま／＼の變化が現はれて趣味は實に豊富であるといふことが出來るのである。

ばそれで可いので、若し規則はと云へばその自然に從つて花の趣味を瓶頭に寫すと云ふに過ぎないのである、が、若し强て其花の姿を作成るべき要部即ち局部の名稱でもあるかと云へば、それは體と、配ひの二つの實質の外には何物もないと云つて可いのである、卽ち一瓶の主眼たるべき體と、そしてその體の風情を補ひ助くる所の配ひのみである、これは花は二種でも三種でも、將五種七種幾許あつても凡て同樣と心得て可いのである。

然しそれでは餘り分け方が漠つとして初心の人に解り難いと云へば、眞、體、受、添、根〆の五つ位に分けても差支はないが、恁ういふことをするのは却て風情を壞す基となるものである。

昔の花――流儀花の方では瓶花の姿を天地人に分けたり、眞、添、體、止などに分けて居るが、何れも眞は一瓶の內で一番丈が高く、それから添、次に止といふやうにその長短さへ一定の規則を立てゝこれを掟て居る、だから花の姿も形も何時も千編一律で變化といふものが少しもない――何の花を見ても皆同じ花形であるから

卉草木を殺すやうなことは絶對に避けるのである。

恁ういふ不自然な事をするから葉面を出すべき所へ葉裏が見えたり又陰方の枝や葉が陽方に指し出でたりして表裏顚倒とも何とも云ひやうない殺風景な挿花が出來る、從つて花に趣味が無く爲つて了ふ、趣味が亡なつて了ふから活氣や生命などの有らう筈は勿論ないので、モウ見るから厭な感じがする。

折角立派な掛物をかけたり高趣な置物などを陳べて氣高い趣味の裝飾が出來て居てもこの嫌味な挿花一つの爲に全體の風情を打ち壞して了ふ、兼好法師の云ひ種ぢやないが、この木なからましかば、と云つたやうな沒趣味なことに陷るのである、これが卽ち我等が不自然でそして沒趣味な流儀花を排して趣味津々たる投入挿花を以て室內裝飾に錦上の花を添へようとしてこゝに投入花を推奬せんとする次第である。

投入花の各部分の名稱

前に云ふやうに投入花には素より法則も何もない、唯花そのものゝ風情を寫せ

花それ自らが師匠であり又規則を示して居るのである、例の昔の流儀花の如うに免許を受るの傳授を受るのといふ馬鹿氣た事をする必要は少しも無いのである。

自然の狀を寫せ

若し夫れ投入れ花に法則が有るとすればそれは唯自然の態に從ふといふに過ぎぬ、即ち梅は梅らしく櫻は櫻らしく、その花が天然に備へて居る趣味と情致とを失はぬやうにすることゝ、それから今一つは草木の榮枯の自然の狀を失はぬやうにするといふこと、例之ば陽方に向へる枝や葉や花は美はしきを用ひ、陰方に向へるは花であれば色の褪せたるもの又枝や葉は勢のない痩せたものを使ふ、それから立つた枝は立てゝ使ひ、偃したる枝や横枝は偃せて用ふる……といふやうに全く草木の天然の發育成長の自然に從ふといふ事の外にモウ規則も方則もないのである。

流儀花で行るやうに立つた枝を無理に矯めて横枝に使つたり曲つた幹を延して眞直に用ふるといふやうな不自然極まる無理でそして窮窟な手段を用ひて花

である、殊に漆器などは一層この注意が大切である。

花の組立

法則に泥む勿れ

投入花は流儀花のやうに其挿方に難い法則といふものがない、然しそれは從來の流儀花のやうな不自然な、そして人工的の窮窟な法則を立てぬと云ふのであつて、決して無規則亂雜な——握み挿しにせよと云ふのでは無い、草木花卉が有つて居る自然の大法といふものは飽くまでもこれを尊重することは云ふまでもない。で、若し矢釜しく嚴格な意味から云つたならば或は却つて流儀花の方よりも難しいかも知れない、然し其法則は天然自然の規則であるから唯花卉草木の自然さへ悟ることが出來れば——言葉を換へて云へば彼れ等の出生と情趣さへ會得することが出來ればそれで可いのである、これは人間が造つた規則でないから別に態々これを稽古するとか傳授を受けるといふやうな必要は些もないのである、即ち

つても可い。

配木のことを股張と云ひ、張り竹のことを一名向ふ張りとも云つて居る。

配木は大抵木槿の小枝か然なくば柳の枝が可い、これは股が素直である爲に花が止め良いからである。

花止の篏め方

先づ竹か又は股木を花瓶の咽喉の大きさに從つて切り、瓶口より五分乃至一寸程下に確と篏める、但し銅器や鐵器は力を入れても破損の心配がないが陶器や磁器や竹器は注意しないと器を破損することがあるから成るべく手柔かに爲なければならぬ、況して水晶とか翡翠とかその他の寶玉製の花瓶などに配木を篏めるには最も深き注意を要する、で時としては花止の木口に紙片の折りたるを當てゝ篏めることもある、これは器物に疵のつくのを防ぐの注意

方に退りて能く花の風體や姿を眺め、そして直すべき所があればこれを直し水次の水を花瓶に九分目程滿たし、斯くてそのおくべき位置に据ゑるのである。

花止の種類

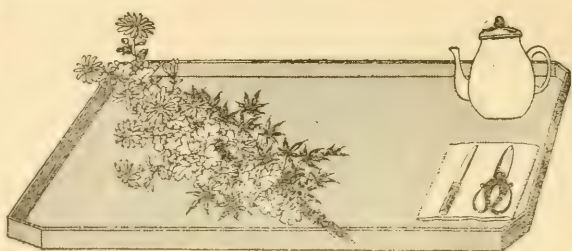
花止は一に配木とも云つて花を確と支持するものである、池の坊などでは木の枝かさも無くば竹の割つたのか、その外に水盤や廣口の花瓶などには鉛で造つた渦卷形のものを用ふる、又流儀に依つては蟹の形のものや碇の形のもの、その外さまぐ\の形のものを用ひて花を止めるのであるが、投入れ花の方では何でも構はぬ、木の小枝でも股木でも、又割竹でも――決してこれと云ふ定めは無いのである、又止木を用ひなくても一向差支ぬ、唯花さへ瓶中に動かぬやうに止めることが出來ればそれで可いので、必ず花止を用ひなければならぬと云ふことはいはぬ、然し若し之を用ふる場合には可成簡易なものが可いので、割竹を圖の如く一本か二本篏める、それも花の工合に依つて之を十字形にしても又二本並べても可いのである、或は又池坊流のやうに股木を用ひて別に張り竹と云ふ纖細な割竹を併せて使

交挿、瓶花の姿、幷にその高低などに依つて四邊の樣子に調和の好さゝうな花種を選んで、先づ大體の花の姿を枝ぶりに依つて定め、そして手の内で組立てを試みてのちそれを花盆に載せるのである。

花を花盆に載せること

花盆には別に大きさの制限はないが普通は横に長い——長方形の角切のものが多く用ゐられて居る、木地も神佛の獻華式などには用ふるが大抵は塗物を使ふ、之は水氣を防ぐ便利がある上に汚れが日に立たぬからである。

この花盆の上に打水をした花を斜に載せて右方の向ふ前の所に水を充たした水次と、そして其手前に花巾——木綿の花巾を四折りにしてその上に花鋏と小刀とを並べ載せて、花瓶の右方即ち挿人の左——膝前になるべき所に斜に置くのである。

斯うして準備の出來たのちに花を花瓶に挿すのである、挿し了りたる後少し後

く場合には丈の低い交ぜ挿しにするも面白からう、少しハイカラといふ嘲があるかも知れぬが場合に依つては歐風の盛花を置いても―外の裝飾の模樣に依つては却て面白味のあることもある、三つ具足飾を唯五具足飾の內の花と燭が一つ寡いので、趣味は何處までも五具足飾のやうに眞面目でなくては不可らぬと思ふのは裝飾の活用きといふことを知らぬ人の云ふことである。

挿けんとする時の準備

花の選

場所に依り時に依り又場合に依つて四邊の裝飾と取合ひの好いやうな花を選擇することが大切である、例之ばその花を挿けるのは婚禮の席であるとか新築祝の席であるとか云ふことや、又その季節は何時であるといふこと、それに瓶花を置くべき場所は如何なる所であるかと云ふこと、そして其の裝飾の樣子は如何なであるかと云ふことを能く考へて、それに相應するやうな花を選ぶのである、一種挿、

香爐とには殊に臺を使ひ、香爐のみは直にこれを床疊の上に置くとか、或は香爐と燭―極その形の小さいものであればこれを同じ案、たとへば春日卓のやうなもの丶上に据ゑ、花を大きく挿けて一方に飾るといふやうな行り口もある、で、一寸見た所では具足飾りでないやうに見え、能く見ると整然んとした三つ具足飾りに成つて居るといふのである、然ういふ變化が極めて自由であるから隨つて趣味が廣く又多いのである。

挿法も自由なり

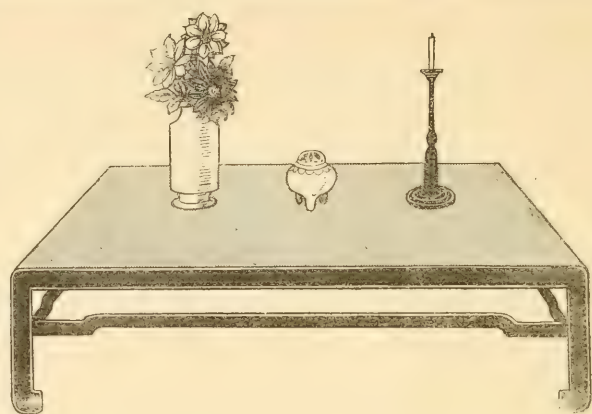
或は小花瓶に一寸した草花を一本挿すとか或は普通の花瓶に崩れたやうな姿に投げ挿にするといふことも爲る、その他宗全籠や魚籃などに―若し花を床疊の上に直に置

の飾りを施す場合には規丁面な五具足裝飾よりもこの三つ具足を‥加之も式の崩れた草體とでも云ふべき飾り方にしたのは非常に面白いやうに思ふ。

變化自在

三つ具足飾は五具足飾と違つて、華瓶にしても燭臺にしても對のものを用ひるといふことがない、卽ち華瓶一つ、燭一つといふのであるから、如何な姿形の華瓶や燭臺を取合せても差支ない、然し五具足の方では型物といつて姿の定つた器物を用ふる——眞面目な正格な姿の花瓶や燭臺や香爐を使ふのである、だから見立物卽ち他の器物を應用するといふことが出來ぬ、然るに三つ具足の方は今いふやうな譯であるから如何なるものを見立て使つても少しも差支ない、隨つて其置方や配列の爲やうも極めて自由で、所謂破格の法を用ふることが出來るのである。

例之ば之を飾るにも、机や案を省略して床の疊の上に直に置く、加之もその燭なり香爐なりを何れかの一方に片寄せて陳べ、華だけは少し離して他方に据ゑるといふことも出來る、又其內の或ものは臺を用ひ或る物は之を略する‥‥卽ち花と

づ五具足を省略したるものと見れば間違はない、その配置は中央に香爐、左右に燭

と花である、花と燭は左右何れに置いても構はぬ、花の姿に依つて位置の好いやうに配列するのである。

そしてこの三つ具足を臺の上や机の上に置かないで、直に床疊の上に置いた狀は——無論燭も花瓶も大形のものゝ時——却々に好趣味な飾である、若し五具足を眞の裝飾とすればこれは行の飾といひたいのである。

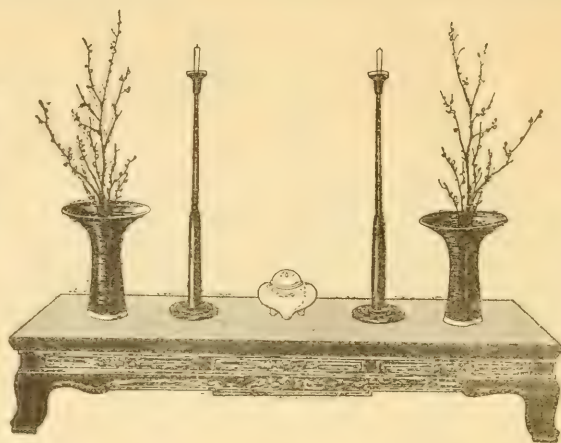
趣味は五具足飾より多し

莊嚴とか眞摯とかいふ方面から見れば、五具足は無論端正で且つ具足した完全な裝飾に相違ない、けれども趣味の上からは却てこの三つ具足の方が優れて居る、特に宮殿や寺院の如うな全體の裝飾が莊嚴な場所でなく、普通我々の住宅の床の間などに於て香、華、燭

有裝飾のやうに爲つて、世間の人も亦然う思ひ込んで居るが、然しそれは間違ひである、何時の時代であつたか能く記憶しないが或る寺院……門跡にこの宮殿の裝飾――卽ち五具足飾を賜つた事がある、それをその寺の佛殿にソックリと施設へて佛殿の壯嚴を添へたといふのが寺院でこの五具足飾をするやうに爲つた紀元なので、卽ち五具足の調度を賜ると同時にこの壯嚴な裝飾を施すことを許されたといつたやうな意味である、然るに今では田舍の貧乏寺までがそれに習つてこの五具足飾をして却つて宮殿やその外の場所では之を用ゐないやうに爲つたのである。

三つ具足飾

五具足飾の省略せるもの

三つ具足は香爐一つ、燭臺一つ、華一瓶で、五具足と同じやうな場合に用ふるのである、床の間にも又殿舍の中央にも、五具足飾の如うに机の上に載せて飾るので、先

香爐を中央に据ゑて、それから華瓶、次に燭といふ順序に一列に配置するのであるが、床の間に之れを飾ることもあり又室の中央に高卓を据ゑて其上に飾ることもある、そして床の間に飾る時は―時としては臺や卓を略して直に床疊の上に陳列することもある、斯ういふ行方は多く五具足の大きいもの即ち燭も花も丈の高いのを用ふる時であつて、普通は臺か机かを使ふのである、臺は佛前などの五具足飾りの如うな極り切つた場所の外は文机でも、その外何んなものでも好い、横長い型の見立物の臺や飾机などを使ふ、見立物で殊に趣味のあるは春日卓などである。

五具足飾の歴史

元宮殿の裝飾の一つで、所謂正式な―廉目立つた儀式を行はれる場合に用ふる所の裝飾である、然るに今では五具足飾といへば殆んど佛寺―寺院の本尊前の專

かに穩かに爲つて來るのである。

例之ば梅や松の一種挿を秋の七草の交ぜ挿とか又木の花にしても、松に松に連翹などの交ぜ挿しなどと比較すれば、一は氣高く潔い趣があり、一は和暢とか優艶とかいふ風情に富んで居る。隨つてこれらの花を飾るにも能くその場所と時とを考へ合せてその時と場所とに相應するやうな花を選擇するといふことが大切であると思ふ。

五具足飾の調度

燭臺一對、瓶花一對、香爐一つ、これが五具足飾の調度である、勿論その大小はいろいろあつて大きいのになると燭臺の高さが二尺から三尺位のものもある、花瓶の大きさもそれに相當して偉大りとしたものを用ふのである、又小さいのになると燭臺も花瓶も四五寸足らずの玩具のやうなのもある、調度は金、銀、銅の如き金屬製のものもあれば磁製のものものもある。

五具足の飾り方

ふまでもない。
丈も成るべく高くとは云ふものゝ、それは比較上の言葉で配列する燭臺や香爐や、それにこの五具足飾をする臺、又それを置く床の間の大小や恰好の如何に拘らずたゞ高く挿せといふのではない、今いふ他の關係を充分考へ合せてその調度、場所、陳列の模樣に釣合ふ程度に於て素直な花――その姿は丈の高い、スラリとした型に挿けるといふことが必要であるといふのである。

花は一種も好し二三種もよし

梅、松、櫻、その他の木の花でも草の花でも、其時と場合に應じて一種挿にしても又、木の花、木の花と草の花、草の花のみの交ぜ挿しにするといふことも差支ない、それは今いふ如く大體が場合に依ることであつて、何れかといふと壯嚴な裝飾には一種挿の方がその趣を得て居るかのやうに思はれる、一月に行る松竹梅の交ぜ挿しなどの場合は別として、同じ一月でも若松の一種挿、梅の一種挿の如きは如何にも其趣が端正高潔である、然しこれが交ぜ挿となると總體の風情が何となく和

何れかといふと素直で丈の高い花が調和が好いやうに思ふ、加之も成るべく技巧を避けて一寸見た所では無作意に唯何となく挿した、といふやうな態の花が能く似合ふのである。

古風な挿花―今から二百年も以前の五具足飾の花を見ると全くの投げ挿し花で、兒童が戯れに挿したかといふ程に極めて無雜作な自然的の挿し方がしてある、然しその自然でそして少しも規則や法式に拘らぬ所に天眞爛漫たる樣が見えて何とも云ふに云へぬ妙味がある。

下つて百年以前位からは稍や現時の流儀花風の、例の型の定つた窮窟な花型に爲りかゝつて、モー近く五七十年前になると全く俗惡な流儀花に成つて了つて居る、けれどもこの五具足飾の花は他の床の間の花などに比較て見るとまだ餘程自然に近い方であるやうに思ふ。

兎に角五具足飾といへば座敷飾の内でも極めて端正な、そして壯嚴な裝飾であるからそれに調和するやうな厭味のない素直な瓶花でなくては不可ぬことは云

器に能く調和する、又陶磁製の花瓶にしても素直な細長い形の花瓶には決して似合はぬことは無いやうに思ふ、兩方共に木地もあるが塗物の方が多い。

盆

花臺とも置き場所とも附かず、花瓶を置くに盆を用ふることがある、その風情は……巧く恰當した時は最も趣味のあるものである、盆は丸盆も用ひぬことは無いが多くは楕圓形とか長方形とか、尚その他にも葉盆即ち芭蕉や木の葉の形に造つたものを用ふる、前に云つた大机の上に花を置く時と同じやうに一方に香爐だとか書畫帖だとかといふやうな陳列品を置いて、それに對して花瓶を一方に据ゑたり或は他の陳列品を置くべき場所丈を殊更に空位にして花ばかりを一方に置くこともある、文人式の陳列を施す場合に多く行る爲方である。

五具足飾

花の姿

と同じく一個の置き場所と見るのである。

薄板、厚板

花臺を省略する場合には花瓶を薄板と云ふ長方形か圓形の二三分から四五分程の厚味のある板の上に据ゑることがある、矢張一種の花臺と見るべきものであつて花に依つてはこれが大層その趣味を添ふるものである。

厚板は其厚さが五分から一寸位あつて矢張薄板と同じやうな場合に使ふ、然し薄板よりは風情がないやうに思ふ、厚板は大抵角形

―長方形のものが多くて圓形なのは殆んどない。

薄板も厚板も花臺と同じで、如何なる花瓶にも相應するものであるが、殊に籠花

高い眞直に立つた花などには絶對に調和しない。

低い臺は低い花にも良く又高く眞直に立つた花にも適する、但し垂れ物とか——低く下へ垂れた枝——例令ば枝垂櫻、萩、山吹の如きものには如何も格好が悪いやうである。

大小

これも花瓶の大さにも花の形にも依ることである、押しならして云へば小さい花瓶を用ひた場合には小形の花臺、大い花瓶を据ゑるには大い花臺といふが普通である、然し花臺——花瓶臺でなく他の机なり卓なりの上に外の陳列品と一つに置く場合、例令ば卷物であるとか香爐であるとかいふやうなものと置き合せる時は小花瓶を大なる臺の上に置くこともある、或は外の器物は陳列しないにしても極めて大い机か臺の上に花瓶を一方に片寄せたり又中央に据ゑて他の調度器物を配列すべき場所を殊更に除けて置くやうなこともないではない、然もその狀は却々面白く趣味もまた深い、然しこれは其臺は花臺の意味ではなくて棚か床の間

ひて床の間などに置くやうに爲つたのかも知れぬ。
それは兎に角、あれでは何分花臺として隨分無格好なものである、臺の惡い譯でもなからうが何處となく調和しない、加之も大抵は朱塗や金線の俗臭紛々の物のみのやうに思ふ。

圓形には圓形の臺、方形には方形の臺が可い、絶對にとは斷言し兼ねるが先づ圓形の花瓶には臺も矢張圓形なるが良く、方形式の花瓶には方形の臺が能く似合ふ、それは前にも云ふ如く花瓶の一部とか附屬物といふ意味に於て、圓い花瓶には圓い形の臺といふ方が相應しく見える、勿論極めて小形の臺であれば方形の臺を斜に……角のある方を正面に向けて置いたのも一寸面白味はある。

高低

高低は花瓶の大小にも依り花の挿方にも依つていろ／＼に取捨しなければならぬ、高い臺は瓶花の姿を靡いたやうな狀に挿けた時とか、壓し潰した如に挫けた狀の瓶花とか、それに垂れものでも挿けた時、懸崖式に挿した花の場合に相應する、

上に載せたとか或は他のもの卽ち机や案の上に据ゑたと見えてその調和を缺くものは如何も投入花の花臺としては面白くない場合が多い。

勿論時としては花瓶の形や大きさの如何に拘らず、全く趣味も異り形式も一致しない大きい臺の上に置くこともないではないが、それは花臺として見ないで一個の場所――花の置き場として、床の間や棚や机と同じやうな心持で見るのである、而して然ういふ場合には更に別に小さい――花瓶に相應する臺を用ふることが多い、斯ういふ場合にこれを使はないのは丁度洋服を着てカラを用ひないと同じて如何にも不完全な樣になるからである

流儀花の方では極めて大い臺を用ふる、殆んど花瓶の臺とは見えぬ程の、形も大抵は横長の方形な　一種の案とも云ふべき臺を使つて居る、無論花臺には相違ないが如何にも花瓶とも瓶花とも調和を得ない無格好なものである、或はそれは裝飾の目的で花を插ける場合の臺ではなく、會席――花の會の折に殊に瓶花を置く案であつたのが何時となく花瓶の臺のやうに爲つて、花會でない場合にもそれを用

に使用したもの、用途の不明なるもの、即ち何に使つたものか知れぬといふものは決して花瓶には見立てぬものである、これに就ては隨分世間には滑稽な事や人に笑はれたといふ話が幾許もあることであるから見立物をする時には充分こゝに注意して貰ひたいのである。

花臺

花瓶との關係

花臺の形は第一に花瓶と調和してその趣味が一致するものであるといふ事が肝要である、花瓶と花臺の趣味が別々に成つて見えるのは甚だ面白くない。

それは投入花の方でいふ花臺は花瓶の臺といふやうな意味であるから、花瓶と花臺が殆んど連續した一つものと見える程に趣味から恰好までが一致したのが好ましい、更に委しく云へば花瓶の附屬物と見ゆるものであつて、一見した所では花瓶の下部とも見ることの出來るものでなくては調和しないのである、或る臺の

は到底投入花に相應はぬものであるから總てを省略してこれを述ぶるの煩を避けて置く。

見立物.

見立物といふのは花器ならぬものを……本來は他の器であるが、その形が花を挿すに相應するとか或は花との調和が好いといふ爲に花器に用ふるのである、これには隨分いろ〳〵のものを使ふ、素より他の器物を活用するのであるから、如何いふ物を花器に利用するといふことを定めていふことは出來ないが、然し大抵のものは……花を挿してその姿の調和するものは使ふことが出來る、前に云つた魚籃や茶籠の如きものも元は矢張見立物であつたのである。

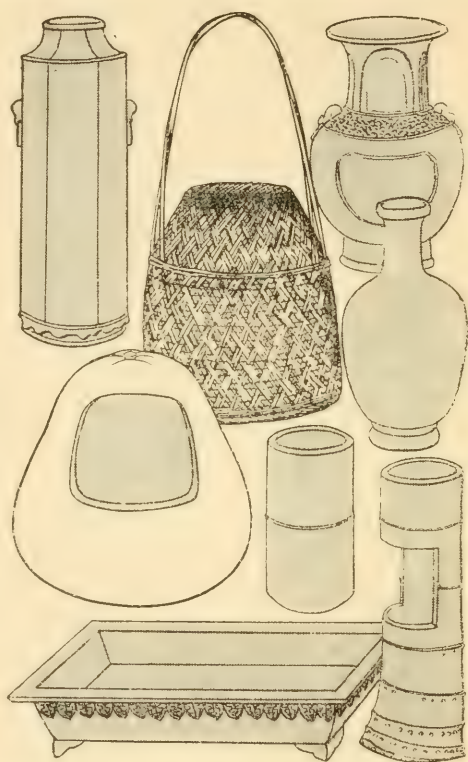
世間で多く目に觸れる見立物は茶壺、酒壺、水次、瓢、德利、その他唐漢時代の酒器、食器、祭具、尙その他にも南蠻など稱へて南洋の土人の用ゐた酒器なども茶人の方では非常に賞翫されて居る。

見立物――他の器物を花瓶に見立てるに就て注意すべきことは不潔不淨のこと

かに趣味が深く見ゆることもある、而して籠には竹のも籐のも藤蔓や蒲などで組んだのもあつて何れも相當に面白味がある、竹器は流儀花の方で二重だの三重だの、甚しいのになると五重七重などいふ恰で杓子挿かと思ふ程に厭な形のものもあるが、押並らして流儀花の方で使つて居るのは花器までが俗氣紛々で、兎ても使途にならぬのが多い、然しそれは形が厭味な爲で、竹器その物は却々に趣味がある、根竹の掛花器や青竹で切つた―春使ひの細い獅子口などは決して惡くない、一尺四五寸位の細い獅子口に椿の一輪も挿した所は―殊に白玉椿か何かでその眞白な花が青い花筒に反襯した狀は淸らかなとも氣高いとも云ひやうのない好い風情である。

流儀花の方で使ふ竹花器でも惡くないのは掛尺八、獅子口で、これは如何な花でもよく似合ふ。

前に云ふ種々の花器は投入花に能く調和する花器の大概を示したのであるが、此外にも流儀花の方で使ふ薄端だとか、玄猪だとか、いろ〳〵のものがあるが、これ

方形などさま〲あつて些かの足の附いて居るものもある。
此等の花瓶は銅器、鐵器、金銀器、七寶焼などが多い、その外に陶器や磁器のもある。

籠花器にはいろ〱の型がある、魚籃形と云つて、漁師の魚籠の形を取つて造つたものや、菜籠形といふ野菜籠の形に模して拵へたもの、その他に尚茶家の好みのものが隨分多種類で、宗全籠だの如心好だの、利休好の袋形だといふやうなものが何程もあつて何れも趣味がある、手附の牡丹籠といふのは牡丹を挿して殊に風情のある籠で、これは殊に花器として造つたものであるが總體に籠花器は花を挿した風情が優しく〱ザングリとして居る爲に、銅鐵の器や陶器製の花瓶よりは遙

方壺形といつて角型で胴の張つて口の所で締つたもの、太鼓胴と云ふ圓形の脹れたもの――それには丈の高いのも低いのもある――それから四方といふ四角で底部の締つて上の方の少し開いたもの、それには又いろ／＼の形があつて遊環の付いたものや頸が細く絞れて又口の所で少し開いたものなどもあつて形は實に樣々である。

その外にもまだ經筒形、德利形、水盤などないろ／＼のものがある、經筒形といふのは昔經卷を入れて地中に埋めたもの、形を取つたので、大さも僅に經卷を入れるに適する位のもので、大い形の器は無い、德利形は酒壺の形に模して下膨れで口と頸とが細長く締つた製のものである、水盤にも圓形、楕圓形、方形、長

も、何れもその趣味と趣味との一致を得るといふことが大切である。

例之ば金瓶、銀瓶、の如うな華麗な花器に櫻とか牡丹とか燕子花などを挿したるは華麗の調和で、古備前の壺や、南蠻の　芋頭とでも銘のありさうな古壺に、椿――わびすけとか寒菊とか、水仙とかいふ類の花を挿したのは幽寂でそして澁味のある調和である、然しこの間には又反對の調和といふこともあつて、華やかで派手な燕子花や牡丹を古備前の壺に挿けたり、煤け燻つた竹花器に山吹の二枝か三枝をさしたのも決して惡い趣味ではない、反對の調和とは云ふものゝ華やかな花を澁味のある花器に挿すのは能く調和するが美しい花瓶に侘びた花を挿したのは如何にも面白味が無い、澁味のある花器に美しい花を挿すのは對比の關係上、花の美を添ふる爲で、これは一層花が華麗に見えて趣味も加はつて來るが見立のない澁い淋しい花を華やかな花瓶に挿したのは花瓶の美が花の美を奪つて花が氣落されるから瓶花に見立が亡失なるのである。

花瓶の形式

奇な姿の花と奇な形の花瓶との調和も面白い、例之ば捩れたとか押し潰したとか云つた如うな形の籠花器に白玉椿と寒菊などを——極めて無作意に挿けるとか、秋海棠とか増獨の如き草の花の折れ反つたやうな奇形のものを、僅の二本か三本さしたといふ花瓶　モウ斯ういふ奇形な花器には如何うしてもこれでなくては納りが付かぬ、然し前に云つた瓢簞の花入の場合のやうに正格な花を斯ういふ花器に挿したのも決して惡くは無いのであるから一概には極めていふことは出來ぬ、所謂一奇一正、虚實の活きは挿す人の腕次第である。

趣味の調味

形以外に於て更に趣味の調和、卽ち花瓶の趣味と花の調和といふことも亦大切な事柄で、寧ろ花瓶との釣合の好いと惡いとは殆んどこの趣味の調和を得ると否とに依つて分れると云つて可い位であらう、これにも亦反對の調和と正對の調和とがあることは無論であるが、大抵は高尚な花器には高趣な花が調和し、磊落な花瓶は磊落な形の花と調和する、其他詭味のあるもの、華やかなるもの、幽玄なるもの

格な花瓶、卽ち奇形な花瓶には矢張奇形な花が能く似合ふといふものである、これを正整の對とか、正格の調和とか云ふ、これは最も端正な調和である。

變格の調和

これは正しい姿の花を奇形な花瓶に挿すとか、奇形な花を正しい形の花瓶に挿す場合を云ふのであつて、巧みに行れば實に面白い挿花となる、が、然しこれを拙く行つたのは見られた態でない、例之ば大瓢簞を刳り拔いた花瓶―勿論奇形な花瓶である、それに極く眞面目に、大人しく寒牡丹でも挿けたのは云ひ知らぬ好い風情である、又方壺式か何かの正格な形の銀瓶か古銅瓶に磊落な狀の―よく文人畫などにあるやうな姿の松と野菊などを傾斜した如な―懸崖の松とでも云ふべき奇狀の花を挿したのも實に絕好の趣味がある、然しこれは今いふやうに巧く行つた時……老練な人の手腕を待つて始めて見ることの出來る挿花である、然し大抵は平凡に了るか然もなくば醜怪な瓶花になるのが普通である。

奇形なる調和

だから花の姿も趣味も能く完備して居ても、若しそれが花瓶との調和を缺くやうでは丁度衣服が立派であつても帶だの穿物などが相當しないと同じで、花はどんなに巧く插つても、その花の美觀の幾分を減殺することがある、減殺する許りでなく時には不快の感じを起させるやうな事もある。

形の調和

花の姿と花瓶の形の調和するといふことは最も大切な事柄であつて、若し花の姿と花瓶の姿が釣合はぬ時――卽ち調和しない時は花と花瓶とが別々の物となるから……、俗に云ふお前は彼方へ行け、私は此方へ行くといつた風に離れ〳〵のものとなつて極めて恰好の惡いものとなつて了ふ、例之ば細長い形の花瓶に丈の高いよろ〳〵とした花を插すといふやうな――勿論一概には云へぬことであるが、先づ斯ういふのは釣合が惡いのである、德利形の丈の高い花瓶に紫苑や女郎花のやうなものを突つ插した態などは見られたものでない。

大體を云へば正しい形の花瓶には、眞面目で姿の完備した花が能く調和し、不正

で、若し一種挿を無地の紋服の氣品あるに譬へたならば、これは美人が裾模樣を着た華麗な態にも比すべきであらう、一種挿けと交ぜ挿けの違ひは先づ斯んなものである。

花瓶

花と調和するを要す

千金の價ある花瓶でも花と取合が惡くては半文の價値もない、花――と一口に云へば誰でも挿ける花の事のみを云ふやうであるが、如何にも單に花と云へば草木の花のことに相違ない、が、然しこの花道の方ではそれが一つの術語の如うに爲つて居て、花と云へば瓶花と云ふ意味に聞かなければならぬ、そして其花と云ふ詞の中には、只草や木の、挿けた花そのものの許りでなく、花瓶をも含まれて居るものと考へて――花と云へば挿した花の外に花瓶も含まれて、花瓶も亦花の一部分と見るので、花と花瓶と相依つて一瓶の花の姿の整つたものとしなければ面白くない。

ぜなどは同じやうな色のものや同じ形の花を挿し交ぜることもないではない、これは多種の花を要する爲に今いふ如き去り嫌ひを云つて居ることが出來ない爲であらう、然し恁ういふ場合には他の草や花をその間に交ぜて調和を圖るといふことをする、これは色や形の衝突を避け又緩和するといふやうな手段を取るのである、斯うすればその殺風景を轉じて風韻のある挿花とし、又無趣味を有趣味とすることが出來るからである。

が、然し普通の場合には多くの花を――餘り多種類の花を一器に挿すといふことは好ましくないことで、多くて二三種、モー五種挿となると煩はしくなる、袁中郎の花史の中にも挿花不可太繁、亦不可太痩、多不過二種三種、高低疎密如畫苑布置方妙、云々と云つて居る。

交ぜ挿は風情が華かで趣情は豐嬌である、だから裝飾用の瓶花としては却つて一種挿よりは優る場合も寡くない、けれどもこれを描く行ると目煩いものと爲ることがある、所謂注意一番を要する所であらう。

ずる爲に瓶花が派手にも爲り又華麗かにも爲つて來るのである。

兎も角も交ぜ挿けは派手である、だから裝飾の配合上又場合に依つては如何してても交ぜ挿しでなくては不可ぬことがある、卽ち華麗な裝飾を施されたる時の花、又歐風の裝飾の花、茶席のやうな寂味を主とする場所でも、或る場合に依つてはこの交ぜ挿けを要することもある、交ぜ挿け——二種でも三種でも、多くの花を挿し合せるには、その挿ける花なり木なりが調和するものを選ぶといふことが肝要である調和しないものゝ挿け合せは極めて面白味のない、殺風景なものとなる、これは色の上にも花や葉の形の上に於ても大いに工風を要する所であつて、同じやうな式のものでなくて、然もその趣味の一致するものを選ぶといふことが肝要である。

例之ば椿と山茶花、百合と萱草、といふ如き同じやうなものゝ挿け合せは實に面白くない、寧ろそれを一種挿にした方が何れ程好いかも知れぬ、同じ事ながら百合には糸すゝきを配ひ、椿は山茱萸か木蘭でも交ぜて挿せば趣味も風情も歷々と現はれて來る、然し歐風の卓上に置く盛花とか洋館の或る場所を飾る瓶花の挿し交

の可いこともある。

兎に角一種挿は花の如何に依らず押し並らして上品で、そして權威がある、その代り又淋しい　孤寂なといふやうな感じは免れぬ、然れどもそれが又場合に依つて非常に好趣味となつて四邊りの裝飾に良く調和することもある。

派手なる交ぜ挿し

同じ交ぜ挿しと云つてもその挿ける花の種類や交ぜ合せの枝に依つてはその趣味がいろ〳〵に異るから一口にはいふことは出來ぬ、が、兎に角交ぜ挿は一種挿よりも派手であつて賑やかなといふ趣のあることはいふまでもない、蓮に牡丹とか、椿に山吹とか、躑躅、木爪、連翹の交ぜ挿けの如きもの、華麗やかなことは勿論であるが、芒に雁來紅、それに水引といつた如うな淋しみのある秋草でもこれを單に芒、水引草、雁來紅の一種挿に較べると遙かに派手である。

これは單に一種の花を挿したよりもいろ〳〵の花を交ぜて挿す時は花と花との接觸や配合の爲に、單に或る花を單種で見たる以外に一種別樣の差はしみを生

あるからのことである。

一種挿の趣味は一體に上品である、嫌味が無い、一寸例へて云ふと無地の紋付を着たといふたやうな――品格の好い人が無地の紋服を着たといふ趣があつて華麗かとか派手なとかいふ點はないが然し又何處となく氣高く上品で一種いひ知らぬ奥床しい所がある、殊に梅……梅も白梅、青萼、その他水仙、椿、菊などの一種挿は一層この感じが深くて主人の心持までも偲ばれる、又松の一種挿に至つてはモー上品といふ點を通り越して莊嚴とか崇高とかいふ態で、所謂權威のある挿花といつて可い、今いふ如うな花の一種挿は如何しても日本趣味である、何んとなく日本人の性格を語つて居るやうな感じがある。

裝飾に依つては如何してもこの一種挿でなくては納まらぬ場合がある、眞の書院飾――例之ば大懷紙か狩野や雲谷派の眞の山水とか人物でも描いた大横物でも掛けた品格の好い飾りをした場合には如何しても花は一種挿けでなくてはならぬ、又文人式の磊落な裝飾の時にも却つてこの一種挿の方が交ぜ挿けよりも調和

餘計な事をした爲に瓶花が殺風景なものとなるのである。

これは藤と燕子花、松と蓮花のみでない、水陸の草木を一つに交ぜて挿す時は大抵ういふ嫌な樣に陷り易いものである、但し陸の花でも草ものであればこれを木の花と挿し交ぜた程には不調和ではない、時としては相當な好趣味の瓶花となることもある、これは一つは挿す人の意匠次第であつてその行り方に依つては却風情のある瓶花となることもあるから一概には排斥することは出來ぬ。

交挿と一種挿

品格よき一種挿

花の枝振りやその種類や、又裝飾の模樣などに依つては一種挿の可いこともあれば交挿の調和することもある、それは今いふやうな種々の事情に依ることとであるから一概に何方らが可いと云ふことは出來ぬ、卽ち交ぜ挿けも可いが一種挿けも可いので、これは兩方ともにその特色があり趣味があつて、めい〳〵に面白味が

要するに紅、黃、紫、白、とり〳〵の花を挿し交ゆる場合に同じ色の花の交るのは決して目障りにはならぬものであるが、二種なり三種なりの花を同じやうな色にするといふことは――同じでなく似寄つた色にすることでも面白くはないのである、恁ういふ行り方は花の美が如何も引つ立たぬ、花の風情がダレて見える、兎に角花の姿――挿花の姿に變化があつて面白味の出來るやうに、花の色にも變化があり又單調にもならないやうに取合をするといふ配色の工風が最も肝要であると思ふ。

水陸の草木

絶對に挿して面白くないとは限らぬが何れかといふと調和が惡い、勿論廣口の水盤などに水陸の草木を挿し交ぜたのも惡い趣味でないこともあるが普通の花瓶などには如何もその調和を缺いて見える、松と蓮花と交ぜ挿にしたり藤と燕子花を挿け合せたりして見た所で少しも面白くないのみならず趣味の調和を缺く爲に極めて俗惡となる、寧ろ恁ういふ花は挿さない方が可い程に嫌な感じがする、藤は藤、燕子花は燕子花でこれを別々に挿せば如何なに趣があるか知れぬものを

かくれ家や嫁菜の中にまじる菊

これが全く投入花の姿であるから投入花では木の花草の花の挿し方に矢釜しい規則などは一切これを設けないのである。

色の取合せ

赤と赤、若くは紅と赤といふやうな取合せは極めて面白くない、例之ば紅梅と赤椿との挿し交ぜのやうなもので、挿けて不可ぬといふ方則はないが然し斯ういふ色の取合せは見た所で先づ面白味がない、同じ事でもそれを白の椿に紅梅といふやうにすれば花も引つ立つて見えるし趣味も大變優れて來る。

白と白、これも場合に依つては是非拯ういふ色の取合せを必要とすることもある、が、これは配色の上からの必要ではなくて他の意匠の上から拯ういふ取合せを要求するのである、だから先づ何れかと云へば面白くない取合せだといはねばならぬ、けれどもこれは赤と赤などの配合と異つて時としては隨分氣高く潔い瓶花となることもある、例之ば白梅に水仙を交ぜ挿しにした場合などがそれである。

これも一應は道理で、形の上から見ても理窟の上から云つても至極同感ではある、然しそれは例の花型が極つて居る所の天地人とか三角形だとかいふ普通の流儀花を教へるには至極好い規則であらう、が、投入花のやうに花の姿の自由な投入れ式の瓶花では一概にこの規則を守るにも及ばぬ、又根〆とでも見るべき枝――場所に木の花を用ひ眞と見るべき場所に草ものを使はなければ面白くない場合もある、繰り返して云ふやうに投入花の姿は例之ば一寸一輪の花を挿さして――極めてこれを莖短に挿してその部分的の美を觀賞することもあれば又、種々の木の花や草の花を挿し交ぜて秋の野原や春の野邊の美を瓶頭に集めた狀を愛することもある、低いといふ場合には背の高い女郎花や萩なとの間に短く小松の一枝か二枝を挿し交ぜることもあるから一概に古風の挿花家のいふやうな掟に拘泥むことは出來ぬ、木の花は背の高いものであるから高く位置するやうに挿し草の花は丈の低いものであるから短く低く……ホッチリと挿すといふのは、モー理窟に縛られて變化滑脫の自由を失つて居る、嵐雪の

のとなることもある。

例之ば松と朝顔とを交ぜ挿にするとか、菖蒲と卯の花とを挿し合はすとかいふ類で、恁ういふ風の瓶花は如何にも不調和な殆んど木に竹を接合せたか、洋服を着て木履を穿いたとでも云ふやうに、奇怪千萬な姿になるものである、これは畢竟その花と花との趣味が衝突したり隔絶して居る爲である、で、同じ交ぜ挿でも松と菊とか、萩と薄だとか、又は梅と椿と寒菊といつたやうな趣味の同じやうなものを挿け合したならば瓶花は非常に趣が出來、又姿も何處となく調つて來るが、一々此花と彼の花といつて極めて示すことは煩はしい、のみならず畢竟斯ういふことは一つの意匠であるから極めない方が却て好い、それを極めないで挿す人の意匠に求めたが方遙かに趣味のある面白い瓶花が出來上るであらうと思ふ。

木の花と草の花

無論挿し合せても構はない、古風な挿花家は草の根〆に木を用ひぬとか、草の花と木の花とを挿し合す場合には必ず草の花を根〆に使ふのであると云つて居る、

な行口で以て、置合せの器物と瓶花との高低を現はすのである。

花の取合せ

趣味の調和が第一なり

二種三種乃至四種五種の花を一瓶に交ぜ挿しにする場合には、その花と花との趣味の調和が第一である、流儀花の方では何の花と何の花とは挿し合せては不可ぬとか、斯の木と此の草とは一つ花瓶には挿さぬものであるとかといふ矢釜しい法則がある、然もその方則や掟といふものが格別如何といふ程の理窟も何もない、誠につまらぬ事柄に理由を附會したやうな事が多い、投入花の方ではそれが誠に自由である、如何なる花を挿し合せても少しも去り嫌ひを爲ぬ、けれども花の調和といふことに就ては又充分に注意を拂ふのである、二種挿にしても三種挿にしても、その調和—趣味の調和を得ない時は一瓶の花に風情も趣も出て來ぬ、趣味が現はれぬ許りではなく時としてはその調和を缺く爲に瓶花が如何にも醜怪なも

らない、花の種類に依つては高く挿すことの出來るものもあれば、又低くなくては挿けることの出來ぬものもある、梅とか椿とか櫻とかいふものは丈を高くも低くも挿けられるが、山路菊、野菊、水引草、蘭、櫻草、百合花、撫子のやうなものは如何してもそれを高く挿すことは――丈高く挿けることは出來ない、然ういふ場合には假令花は低く――莖短に挿けても可い、高い花瓶を用ふるとか、然もなくば偏平い花瓶に挿けて高い臺の上に置くといふやうな事をして花を高く見せるのである

置物を高くする場合

高い置物、例之ば彫刻物だとか、丈の高い置時計だとかといふものを置く場合には花を低くして裝飾上の調和を取らなければ不可ぬ、卽ち花は成るべく丈の短いのを選んでそれを偏平い花瓶に挿け、極薄い臺か然もなくば薄板を敷いて其上に花瓶を据ゑる、然し花も低く置物も低いやうな場合には置物の方に高い臺を用ふるが可い、例之ば香爐を置合せに使ふといふ時、普通なれば薄い香爐臺か香盆の上に置くのを中央卓とか、その他丈の高い卓を据ゑて其上に香爐を置くといふやう

瓶花の高低と裝飾の關係

床の間の飾りにしても又棚の飾りにしても、瓶花を外の器物と置き合はする時にはその高さに注意することが肝要である、卽ち他の器物――置合せの調度と瓶花の高さとが同高さにならぬやうに注意するのである、茲に今一の床の間に裝飾を施すとするに、その裝飾用の調度は掛物の外に香爐一つ、瓶花一つといふ極めて單純な――數の少いもので以て巧く裝飾しようとするのである、然るに香爐と瓶花とが同じ高さ――全然同高でないまでも餘り懸隔のない高さのものを陳べては裝飾が平凡に成つて面白味も何もない、それは香爐の形の良否や物の好い惡いに依るのでなく、先づ見た所に變化といふものがないからのことである。

斯ういふ時にはその何れかの一方を思ひ切つて高くするのである、さうすると片方は高く片方は低く爲つて、所謂不調の調といふ一種の面白い配合が出來、隨つて茲に風情も趣味も現はれて來るのである。

而して花を高くするといふことは、必ずしも丈の高い花を挿けるばかりとは限

花と花瓶、花臺、この三つは離れることの出來ない一種の關係を有つもので、花の種類又花の姿の如何に依つて或は高い花臺を要することもあり、又低い花臺でなくては適はぬこともある、例之ば垂れもの……萩とか山吹と云つたやうな花を置き挿けにするには臺は高くなくては面白くない、又唐華とか蘆などのやうなものには低い臺でなくては取合はぬ、其外に又全く臺を用ひないで單に花瓶の下に罅足臺とか、薄板などを用ひねば似合ぬこともある、兎も角も花臺の取合せも、亦花の姿に大なる關係を有つといふことは云ふまでない。

手の內にて先づ其姿を整へよ

一種にても二種にても三種、五種、その挿むべき花を得たならば、先づ其枝振に依り花の長短を定め、草花の姿狀を考へて、花枝を手の內――左の手に握つて先づ大體その花の姿を整へ試むるのである、恁うして大體の形が整へられたらばそこで花卉の根元を切り揃へて花は又花盆の上に載せて置いて、花瓶に花止を挿み凡そ八分目程水を注ぎ入れて花を挿けるべき準備を整へるのである。

な風の花には如何やうな形の花瓶でなくては取合はぬかといふことを能く考定してそれに取合ふ如うな花瓶に挿けるのである、それには花瓶の形ばかりでなく、花瓶の色合と花の色との配合、又花の背丈の高低と花瓶の姿、それに花瓶の種類――種類といふのは籠とか金屬製とか、竹器だとか、然ういふ事まで充分に取合せを考へる、例之ば紅薔薇の一二輪でも挿さうといふには白高麗燒のやうなクッキリとした美しい色の、そして腰の締つた細長い華奢で小形な瓶が能く取合ふとか、又梅と椿などの交ぜ挿しにするには太鼓胴か、方形式の古銅瓶などが可いと云ふやうに、種々の方面から見て花と花瓶との調和を考へなければならぬ。

如何な花瓶でも構はず只花さへ挿さるれば可いといふものでは無い、花瓶と花との釣合は丁度顔貌と衣服との如な關係のものであるから、其取合せの好いと惡いとは大變に挿花の風情に影響する、卽ち挿花の美は花瓶と花との釣合に依つて非常に等差を生ずるものであると云ふことを知らなければならぬ。

花臺と花及び花瓶の調和

故に花を挿さうとする時は先づ花を得て而してのち其の花の木振、枝振と、それから其花の全體の風情とに依つて挿けようとする姿を定むるといふことが殊に肝要である、同じく梅と云ひ松と云ひ櫻と云つても、其樹の種類に依つて多少は風情の違ふことは免れぬものである、だから其生けようとして得た草なり木なりに依つて、又その風情と趣味に從つて、花の形を造らなければ花の趣情を殺して了ふやうに爲つて、可惜草花を形なしにすることになる。

要之り瓶花はその花の自然に從つて其趣をそのまゝに花木本來の情趣を失はないやうに挿すといふことが肝要である、卽ち花に依つて其姿を整ふるの意で、言葉を代へて云へば花の姿は花次第と云ふことを忘れぬやうにするのである。

花と花瓶の取合せ

今いふ如く花を得たらばその花の趣情に依つて如何な風にこれを挿けるかといふこと、卽ちこの花は如何なる姿形に挿けたらば、その天然を現はすことが出來るかといふ事を考へ定むる、其姿形を考へたる上は、次には花瓶の撰擇である、恁ん

装飾に依つて花の種類や花の姿を撰擇するといふ事は無論大切な事柄であるが、然し怎んな形の花が挿したいとか、彼樣いふ姿の花を生けたといつて先づ自分の心に理想を描いて、そして枝を求むるといふことは大なる誤りである、花は決して我が思ふやうな枝振木振のみのものがあるものでは無い、況して不自然な挿花法に適ふやうな姿の枝振のもの、在らう筈は無い、だから無理に枝を曲げたり矯めたりして自分の理想に適せしめようとするといふことに爲る、玆に於て花卉草木は全くその自然の趣情風姿を失つて生氣も精神もない嫌味なものに爲つて了ふので、世間に行はれて居る流儀花――何々流の挿花とか、何派の活花といふ俗氣紛紛たるものが出來上るのである。

例之ば梅を挿けたいとか、櫻を挿けたいとか、その挿けようと思ふ花を求むることは決して難事ではない、然しその花の姿形を豫め心に描くといふ事は――怎んな風の花が挿けたいと云つて、而て其れに適ふやうな枝ぶりの花を求むることは大抵は徒勞に屬するものである。

いふことは最も大切な事柄である、他の装飾と調和せぬ插花は全く無意味で：無意味に了るのみでなく、時としては他の装飾の全體を打ち壞して了ふやうな事もある、これを装飾の虐殺といつて斯る插花なれば却つて始めからこれを置かぬが優ることもある。

例之ば黄檗か大德寺ものゝ墨跡―寂びた一行の掛物をかけて青磁の香爐の一つも置いたといふ……禪味のある茶人趣味の装飾に歐風の食卓上に置くやうな美しい洋種の草花の盛花を飾つたり又、竹田とか山陽とかいふ文人風の長丈幅を展じて斑竹の盆か何かに盆物なとを飾つてある座敷に遠州流だの古流だのゝ態と枝を矯めたり葉を透したりした、全然で猿猿が手を伸したやうな嫌味な狀の花を置いては装飾は全然破壞されて了ふ、如何しても插花、装飾用の插花はその花の種類も形も他の装飾の様子と調和を得さするといふことが最も大切な事柄であることを忘れてはならぬ。

花の姿は花に任せよ

ふといふことは不自然であるから斯ういふ瓶花は先づ見た所で異様な感じを起させる、隨つて風情もなければ面白味もないことに爲る。

然し胴に開花を用ひよ、梢ち即ち眞の先に蕾を使へと云つた所で決して一概にそれに拘つてはならぬ、比較的多くを用ひよと云ふ意味に過ぎぬ、即ち滿開未開を參差として交錯せしむることが最も大切である。

花を挿すに當りて注意すべき事柄

挿花と装飾の調和

神佛の獻華は別として普通の挿花は尙且ら室內装飾の一分課であるから如何しても他の装飾との調和があつて其装飾を補ひ助け、而て装飾を完ふするといふことが肝要である、例へば恁んな掛物であるから斯ういふ風の花でなくては釣合が悪い、恁んな置物を陳列するに就ては花は恁んな形でなくては不可ぬ、といふやうに先づ全體の装飾の上から考へてそれに適當する花の姿、花の種類を定むると

然れども挿花は花の美なる風情──勿論眼で見た美麗のみを云ふのではないが──趣味ある狀を玩賞するのであるから、如何に三世の相といふことが事物通有の姿狀とは云ひながら、枯れた葉や萎れた花、卽ち過去に屬するものはこれを挿して見た所で詮のないことで、時としてはそれが爲に趣味の幾分を殺ぐやうなことも無いとは限らぬ、だから過去丈は除いて未來のある蕾と、そして現在咲き榮て居る開花、且つそれに相應した枝と葉とを以て挿花を組み立てたいと云ふのである。

蕾と開花

何れの位置に何れの花を使ふかと云ふことは極るべきことではないが、大抵のものは蕾を高く用ひ、開花を低く使ふ、勿論それも花の種類にも依り又性質にも依ることであつて一槪には定めることは出來ないが先づ大抵は恁う行るのが自然である。

そして花は──殊に滿開のものは胴の所に成るべく多く用ひたく思ふのである、稍や配ひに大輪の花や滿開の花を多く用ひて胴の部──觀賞の中心に蕾のみを使

現在と未來とは滿開の花と未開の花とを一瓶の中に插し交ふることで、これは最も大切なる事柄なのである、紅紫爛漫といふことは花の美しみを形容した言葉では有るが、然し瓶花の風情としては滿開の花や色艶の好い葉ばかりを使つたよりは、未開滿開相交錯して位置良くこれを案配した方が遙かに趣味に富み餘裕があつて、花として一挿花としての奥床し味が多い、即ち現在とは滿開の花を云ひ未來とは未開の花を云ふので、隨つてその枝にしても葉にしても、勢の可い色の艶艶したのは現在で、若芽や若枝は未來に屬するのである

流儀花の方でも過現未と云ふことを云はぬでも無いが、それは古に蓮を生ける時の傳であつて、餘の花には餘りこの事を矢釜しく云はぬ、勿論それも風情の上からの主張ではなくて、蓮華は佛事の花としてある爲に殊に佛説の過去、現世、未來といふ佛臭い理窟を附會したのである、然しそれも構はぬ、が、同じ事ならば蓮のみでなく、一般の花の上にもこれを適用したいのである、これは何んな花でも葉でもこの過、現、未の三つの相を備へて居ないものはないからである。

さうと云ふ場合には斯かる規則や名稱は全然放擲して自由の天地に逍遙するといふことが大切である

だから受が無いから眞が無いからと云つても決して挿花に成らぬと云ふものでは無い、机上の小花瓶に一輪の薔薇を插しても挿花は挿花である、寧ろ眞だの流しだのと、いろいろ名稱を附けられた枝を使つて挿けた花よりは何れ程その趣味は立ち優つて居るかも知れない。

要するに枝の區別や部分的の區別は寧ろ之を打ち破つて、劃然として際限を知らぬ自然界に足を踏み入れて花木をして其天然に從つて思ふまゝの姿を形づくらせるのを第一義とする、彼の直指人心見性成佛と說いたやうに語らぬ法則を捨て直に花神の風丰に接して……その自然に從ふことを必要とする。

前に述べた役枝の說明は畢竟指月の指、叩門の瓦であるから、語つた上は直にこれを打ち捨てなければならぬのである。

現在と未來

引つ張りつけて釣合を取るべき力となる部分である、普通の場合には眞よりは低く胴よりは高き位置に用ひたい。

卽ち瓶花の大體は下圖の如きもので、モー此外には何もない、若し他に幾許かの枝を使つたとしても、それは要之り配ひと云ふに過ぎない。

然し若し流儀花式に之を細かに區別したならば隨分種々に分ることも出來るだらうが、畢竟蛇足で、徒らに小難く勿體振つた名を附けて俗物を嚇すといふに過ぎぬのである。

前記は假に花を組み立てる上の參考までに一種の—全體とは云はぬ—標準を示したものであるが、これは要するに眞の假設的のものであつて、今實地に花を挿

は比較的短くとも、その龍幹に古色があり且雄偉りとした樣が見えて、曾ては老龍の天に上らんとしたる如き雄姿を偲ぶことの出來ると云ふことが現はれなくてはならぬ。

胴　瓶花の觀賞の中心點であつて材料も趣味も殊に豐富なる部分である、若し眞を脊骨とすれば、胴は胸腹の邊にでも當るであらう、花や葉それ自身は勿論、その挿し方扱ひ振までも何となく寛つたりとして殊に豐榮の狀の現はれて居る場所なのである。

一輪の花、一本の枝を挿けてその簡潔なる情味を觀賞する場合の外の――所謂枝數も花も多く生ける所の――タツプリとした花に於ては此部分に樣々の趣を備へさせたいのである、若しこれを山水畫で例へたならば、山もあり流れもあり、森も原野もあると云つた風に高低參差としていろ〳〵の變化を現はしたいのである

受　分量から云へば體よりは寡くて加之も横か然もなければ斜めにさし出でたる片枝であつて、眞の趣を受けてその風情を補ひ且つ眞の重心を或る一方に

匠とに依るので、決してこれ以上に法則を立つることは出來ないのであるが然し斯く云つて了つては初心の人々に解らぬから便宜上假りに部分的の名稱を設けて挿け方の標準を立てるとすれば先づ左の如きものであらう、然しこれは眞にその標準に過ぎないのであつて決して之れに拘泥してはならぬ、若し斯の如き法外に法を立つる如きことをして花を挿さうとする時は終には花の風情と趣致を破壞すると云ふ結果に陷ることを免れない。

眞　一瓶の幹髓でその挿花の幹線となる枝である、普通には　正格の挿方から云へば他の枝よりも丈が長く且つ太さも太い、けれども毎時も眞は斯の如きものと思ふのは誤りで、時としては短いものを用ふこともある、然し概して云へば細い時は長く、太い枝は短い、但し眞は一瓶中の幹線であつて元と長かるべきものであるから、假令中途で折れるとか枯れるとか云ふ爲に、枝が短くなつても何處となく其姿狀に長かるべき――若し折れて居なければ長い枝なり幹なりであるといふ勢の見ゆるといふことが肝要である、例之ば雷火に折られたる野中の一本松が其幹

るから、優艶なるも、纖細なるも、總てこの主體の組立方の如何に依ることである、卽ち花の風情も趣味も一切この主體に依つて表現さるゝのであるといつて可い。

配ひ　主體に風情を添へ、瓶花に趣味を與ふるものである、若し主體を骨格とすれば配ひは肉であらう、分量から云へば主體は配ひより多く、又輕重から見れば配ひは輕く主體は重い。

斯ういふ風に其實質に於て多少と輕重との違ひはあるが、然し決してその一を缺くことは出來ぬ、兩々相倚り相俟つて而して後に一瓶の風情も姿も整ふのである、で、若しその一方を缺くやうな事があれば、その瓶花は不具らしいものとなつて了ふ、言葉を換へて云へば主體は主で配ひは從である。

卽ち主體と配ひは瓶花の實質であつて動かぬものであるが、然し其姿情風趣は如何やうに挿しても可い――花卉草木の自然に負かない範圍に於て――卽ちその姿や花型は千態萬様我が意匠次第に如何やうにも挿すのである。

花の姿にいろ〳〵に變化のあるのは一にその挿けるべき花の自然の則と、我意

やうに窮窟な規則を守つては居ない、所謂變化百端である、だから到底兵隊の操典の如うに右へ向けとか左へ廻れとか、そんな命令通りには行くものでない、玆處は眞の居る場所だの、彼所には添がなくては規則に負くと云つた所で木や草は却々さう云ふことを聽て吳れるものではない、それを强て規則で以て掟ようとするから、瓶花は自ら不自然な姿となり窮窟なものとなつて、趣味も生氣も亡くなつて了ふのではあるまいか。

けれども斯う云つて了つては、得たる人には解るであらうが、初心の人や流儀花のみを挿花だと思つて居る人には全然で方角がつかぬだらう、で玆に强て局部的の名稱を――餘儀なき事ながら――付けて其準據する所を示すのである、然し決してそれに拘泥してはならぬのである。

體　一瓶の花の內に於ける骨格主腦であつて、花の大體はこの體の爲にその姿を形づくつて居るのである、卽ち一瓶の主體であつて、若しこれがなければ瓶花は成り立たぬのである、花の形が端正にして權威あるのも、落々として脫俗の雅致あ

役枝の說明

主體と配ひ

前にも云ふ如うに挿花の實質は大體の上から云ふと主體と配ひの二要素に過ぎない、卽ち一瓶の花は此の體と配ひの二つのものが寄つて出來て居るので、此外には實際何物もないのである、或は斯う云つては餘り漠つとして捕へ所が無いかも知れぬ——解り兼ぬるかもしれぬが、全くこの外には何物も無いのである。

若しこれを流儀花風に云つたならばこの體といふ內にも種々の役枝や部局の名稱が——眞だとか添だとか根〆だとか、或は又天地人だとか云ふ稱呼も付ければ付けられぬことは無いであらう、さういふ風に云へば實際まだいろ／＼の變化もあるからさま／＼の名も付けられるだらうが然しそれは姿の上の變化であるから決して法則で以て縛るべき——否縛り得べきものでないのである。

花卉草木の地上に生育して居るのを見るに、決して挿花家が獨りで極めて居る

の花である、だから決して一定して斯うと云ふことは出來ぬ、宗全籠にわびすけと臘梅の小枝とを交ぜ挿けたるは幽寂なる草體の花で、古銅瓶に一もとか二もとの水仙を投げ挿しに入れたのは高潔な趣味の草體の花と云はねばならぬ、だから同じ草體の花と云つても其の風姿は樣々であつて決して一樣に云ふとは出來ない以上眞行草の三體を假りに區別して說明をするものゝ、其眞の趣味に至つてはその實際に就かなければ迚も充分にこれを解することは出來ぬ。

が、要するにこの三體の區別は流儀花の如うに形の上の區別ではなくて趣味の上からの區別である、又それでなくては完全に眞、行、草の三體の面白味を知ることは出來ない、況して花の分量の多少や花形の大小、その他技巧の多いのが行の花であつてそれが寡いのが草の花だなどと云ふ形式に泥むが如きは決して挿花の眞趣を味ふもの、云ふべき議論ではなく、そして又然る窮窟な偏すれだ法則を立てて花を賞しようとしても到底花神の風采に接觸して造化の美妙を窺ふことは出來なからうと思ふ。

手な趣味に富んで、且つ和暢りとした緩やかな所のある花である、或は紅紫絢爛たる百花の園を見るが如きもの、或は千山萬岳相重疊して其間を江流が緩やかに繞り流れて居る山水畫を見るが如き狀の花體である、桃林もあれば原野もあり、牧童の牛背に眠りつゝ歸る所、鷄犬の聲が何處かに長閑に聞えさうな桃源に似たる村も見ゆると云つたやうに、材料も趣味もタツプリしたるが此行體の風情である

草體の花

其姿は簡潔で、其趣致風情は幽寂平靜である、從つて挿す枝も寡く、技巧も少くて所謂つゝまやかな挿方の花を云ふ、枯枝に鴉の止まりけり秋のくれと云つたやうな孤寂な樣もあれば又、よく見れば薺花さく垣根かなと云ふ如うな纖美なる趣、の所もある。

されど草の花だからと云つて必ずしも閑寂痩枯なるものゝみと思ふは誤りで、中には妖艶華麗な挿方の花も無いではない、彼の一朶の芙蓉を白高麗の小花瓶に無作意に挿したる如き、其趣は實に濃艶を極めては居るが、然し之は矢張り草體

情の花を云ふのであるから、時としては莊重森嚴と云つたやうな趣味もあれば又端正華麗というたやうな樣子の加はつて居ることもある、白砂銀の如き渚に端然と立つて居る一本の松の風姿も眞の型であるが、又掃き清めた殿舍の階下に美しく咲き誇つて居る櫻の一本も矢張りこの眞體の趣味と云つて可いのである。

若し例をひいて譬へて云へば、將軍が正裝して馬を控へて立てる狀、劍槍を把つて直立不動の姿勢をなせる所なとのやうに雄偉なる内に端然たる威容のある所は實にこの男性的の美を表現せる眞の趣味である、若しこれを女性的の方面に就て云へば十二單の盛裝をして翠簾の中に立てる宮媛を見るやうに、その艶でなる樣が亦實に優艶なる眞體の花の趣味であつて、投入花の方で云ふ眞の花と云ふは必竟これに外ならぬのである。

行體の花

眞體の花程に端正ではないが然りとて亦草體の如うに脫體破格ではない、即ち眞と草との間を行く中間的の花型で、即ちこの行體の挿花は最も美しいそして派

誤りである。

それは世間で云ふ花道一例の人爲の規則で以て無理に捉てた不自然な花道の方から云へば投入れ花は挿花の一種の態樣卽ち草體の花から知れぬが、我等の眼からは投入れ花といふのは挿花全體の上を被ふ名稱であつて、彼の流儀花の規則などは畢竟造り花を拵へ上る時の一種の規則といふに過ぎぬといつても可いのであつて眞の挿花の法とは云はれぬやうに思はれる、これは少し極端な云ひやうかは知らぬが實際さうである、だからこの投入花を一概に草體のものとのみ極めて了ふのは誤りだといふのである。

眞體の花

投出れ花の方では世間の流儀花のやうに窮窟な花型に依つて其の花の姿を捉てようとは爲ない、唯其の趣味風情の上から見て眞、行、草の花型を分つといふに過ぎないのである。

卽ち眞の挿花は其姿かたちが端正で、自ら威容が整つて居る、いはゞ上品な風

は又無法亂雜のものとなつて之れ亦自然に背くものである、禪宗で云ふ敎外無別法は花を挿す唯一の法規であつて挿花にはモー自然の外には少しの法の無いといふことを悟るといふのが大切である、一たび此の自然を悟り得たる時は、さゝやかなる撫子の一輪挿にも無限の情味が漾ひ幹枝纎に似たる梅花の投げ入れには暗香浮動月黄昏の淸趣が動くのである、だからいかに些やかな一莖の無名草にも、可憐の閑花にも、その大自然的微妙を表はして挿けることが出來るのである。

投入花の眞行草

道茲に出で千變萬化す

挿花の妙諦は造化の自然に出でて千變萬化その姿狀に極りがないとは云ふものゝ、要するに眞、行、草の三體に出でぬのである。

普通に考へると投出れ花それ自身が既に花道で云ふ所の草體の花であるから、其上に更に眞、草、行などの變化のあらう筈が無いやうであるが、然しそれは大なる

松は勿論奇相の木振りであるが、その根元、木蔭とも見るべき所から靡いたやうな狀に一本の芒を插す、この芒も矢張松の木蔭になつて居る爲に何となく不自然な狀―數奇な狀に生えて居るのである、然るにその一方に松の葉にも蔽はれないで、日光に照らされ、雨露の惠みに霑つた、極めて些やかな小菊―無論山路であらう、天性を完ふして咲いて居る自然のまゝの可憐の姿にその一株か二株かを插ける、……花瓶は廣口の水盤か砂鉢風の潤寛りした器を用つて……兎に角斯ういふ狀に插した花は所謂奇正相交つて居るのであつて、これを正とか奇とかの一方に偏した插花に較べて見ると趣味も姿も此方が遙に豐である、恁ういふ插け方は交ぜ插けにも一種插にもすることではあるが、何れかといふと交ぜ插けの方に多い花型である、そして又交ぜ插けの時にする方が爲易いやうである。

大自然の情致

規則は規則を破り、格法は却て格法を傷けて終に生花の自然を破壞するに至ることは世の流儀花に於てまゝ之を見る所である、然りとて全然格法を無視する時、

斯ういふ風に花の型は實に變化極まり無しであつて、殆ど一定の型といふものはないのである、が、瓶花は畢竟此奇と正との二つの相の外には出でないのである。

奇正相交はれる挿花

これは挿花の姿としては最も趣味も感興もある花型である、瓶花――投入花の多くは大抵この花型に依つて居ると云つて可い。

正と云ひ奇と云つてその一方に偏ずんだのも決して悪い花型ではない、その場合と四邊の裝飾の鹽梅に依つては如何しても正相の花でなくては不可ぬこともあり又奇峭な姿の挿花でなくては似付かぬこともある、が、然しこの奇正相交へて挿けた花には何處となく變化もあり虛實もあつて、丁度武藝の達人が相對して互にその隙をねらつて切り結んだ切つ先に一種の匂ひのあるといつたやうな調子のあるものであつて實に面白い、で、その挿し方の呼吸といふものにも全く云ふに云はれぬ面白味のあるものである。

一寸譬て言ふと、一本の曲りくねつた松を主幹卽ち眞髓として挿けるとするに、

は卽ち正相の插花であつて、枝の長短高低は勿論、花の形は如何あらうとも――流儀花の方で云へば眞の花型でなくて、一寸見た所では行體の花かと思はれるものでも、恁ういふ瓶花は矢張り正相の花といふのである。

數奇なる狀の花

風に吹き靡かされたとか、或は外の樹の蔭に生えた爲に枝が妙に曲りくねつて、不自然――一種の自然ではあるが――片枝にのみ花が着いて居るとか、葉が一方に靡いて居るとか、隨つて枝も幹も奇狀を爲して其處に一種の面白味のある姿となつて居る木や草を插けて奇趣――その草木の變態の趣味を瓶頭に寫すことがある、これは殊更に求めて爲ることでもなく、又求め得られるものでもないが、然し草木の性質に依つては恁ういふ花の姿にしか插けられぬことがある、これも亦却々に興あることで、これを數奇の插花、卽ち奇相の瓶花と云ふのである、斯ういふ花は時としては氣の利いた插花、洒落な插花となるもので、裝飾の工合に依つては是非斯ういふ風の插し方の花でなくては裝飾に調和しない場合もある。

る相といふのは一種の變體――その天性を或る事情の爲に……何か外のものゝ爲に妨げられて、其の天然の形相を變へて居る爲に一種の奇狀變態を現はすと云ふのである。例之ば能舞臺の鏡板に描いた松――高砂の松とでもいふのであらう、幹の据り工合から枝ざしの樣子、葉の着き方までその天性を少しも傷けないで成育したの渚の松は正相である。又同じ繪に描いた松でも文人畫などによく見る懸崖の松……千仞の絕壁から斜に幹がさし出でゝ谿間に瞰き込んだやうな狀の松が、風に吹かれ雨に打たれて樹幹の樣から枝や葉の態までが靡いたやうな狀に成つたのは所謂奇の相である、瓶花の奇正といふのも畢竟はこの間の消息に外ならぬ。

大體を圓滿に挿す

一種挿、交ぜ挿……例之ば松とか梅とかの一種の木ばかりを挿す時でも、又松に菊と芒を配ふとか、梅に松か椿のやうなものを添へて交ぜ挿しにする時でも、その松なり梅なりはた芒、菊、椿などがめい〳〵にその自然のまゝに圓滿な發育をした狀に挿し上げた瓶花は、その大體の瓶花の姿が矢張り圓滿にフツクリとしたの

を挿花にしたならばその趣味は却々に面白味がある、恁ういふ風にその姿は千姿萬樣であるから、決して恁ういふものだといつて型を定めることが出來ぬ、實際又定めることの出來るものでない、それだから草木の天然の風姿を寫すことが出來る‥‥否寫すのではない、花の天性をそのまゝに瓶頭に挿すのであつて、投入花の面白味は實にこゝにあるのである。

要は正と奇の二つのみ

花の姿は千變萬化で、花に依り木に依り又その枝ぶりに依つていろ〳〵に變化がある、だから其變化のまゝを少しも作意を用ゐずして挿すのである、故に十種の花があれば十種ながら‥‥瓶花の姿のいろ〳〵に變るのが當然である、が然し花の形は何程あつても大體の上から云ふと挿花の相といふものは畢竟正と奇との二つより外にはないのである。

正しき相といふのは花木の花にしても草の花にしても、それがその天性のまゝまに、少しも他の障害を受けないで自然のまゝに圓滿に成育した狀であつて、奇な

役枝は眞、副、止とか、天地人とかと云つてその役枝の長さから高さ、さては枝の姿狀までも整然んと極めて居る、卽ち眞は一瓶の主幹であつて最も丈が長く、副は之れに次ぎ、止が一番短いものだとか、花は恁ういふ規則に從つて挿けるものであるとかと云ふやうに敎へる、から既う花型といふものが極り切つて居る、百瓶挿けても千瓶挿けても凡てこの花型に當て篏めたもので、當て篏めるやうに枝を曲げたり延したりして、或る花型に適ふやうに作り上げるのである、然るに投入花の方では決して然うでない、瓶花は花の風情に從つてその姿を異へ、枝振り木ぶりの如何に依つてその型を變へる——卽ち少しも人爲的の——無理な技巧を加へない、隨つて花の型姿がいろ〳〵に變つて來るのである。

瓶花の或るものは主幹が短くて配ひの枝の長いこともあり、その或るものは主幹と配ひとが同じ長さに挿し上げなければ面白くないものもあらう、雷火に燒かれた野中の一本松——その幹は中途から折れて蘖の若枝が幹を凌いで却つて高くのびたものもある、それが又却々に好い風情で、若しこの狀を寫して——この風趣

投入花の姿

花の姿は千態萬狀なり

投入花の姿は千變萬化である、卽ち十瓶は十瓶、百瓶は百瓶悉くその姿形を別樣にして居る、それは花毎に風情が違ひ、枝毎に趣が變るからのことで、その風情趣致の異る毎に挿し上げる花の姿の異るは自然の勢であつて、彼の流儀花の方で如何な花を挿けても千遍一律で、花型の極つて居るのとは全然趣向を異にするのである、卽ち櫻と梅とはその風情を異にし、又同じ垂れ物の内でも萩と山吹とはその情趣の別樣なるばかりでなく、同じ萩を挿けても山吹を生けても、甲の花と乙の花とは決して同樣の姿には挿けることの出來るものではない、それは枝ぶり木振りは勿論、花の着き工合から時季に依つて花の風情が變つて來るものであるからのことで、到底それを同じ樣な狀に挿けるといふ事は出來るものではない

流儀花では――流派に依つて其部局名稱を異にして居るとは云ふもの、――大體

高潔な花として第一に指を屈するのは梅である、古鐵のやうに硬さうに見ゆる枝が、縦横に差し交したる所にクッキリと白い半開の花や蕾が點々と着いて居る狀は何とも云はれぬ高趣な狀である、それを其儘、些かも人工や技巧を加へないで、ソックリ瓶頭に投げ入れ風に挿した所は、彼の疎影横斜水清淺といふ詩趣そのまゝである、無論花瓶は古銅が最も能く似合ふであらう、若しこの好趣味のある所を忘れて枝が見切るとか花が重り合ふとかいつて矯めたり透したりしたり又は副の枝が眞より高いとか低いとか云つて強て例の流儀花風の花型に入れようとする人などには到底も挿花の話をすることは出來ぬ。

梅の外にも水仙花、白百合、白藤などはその趣が實に氣高い、然ういふ花をその花の自然を傷けないやうに、努めて作意を避けて適當な……相應しい花器に挿した狀は見るから心まで潔く氣高くなるやうな感じがする。

要之り投入花の趣味はその花の天性をそのまゝに寫す所にあるので、梅は梅らしく櫻は櫻らしく、所謂その天眞爛漫なる所に妙味のあることを知らねばならぬ。

は立ち上らせて人工を加へないやうに、又何の花も何の花も天地人だの眞副留だのといふ窮屈な規則や型に强て押し篏めようとすることを絶對に避けることが肝要である。

幽靜な花と云へば白玉椿の一輪挿、置籠に野菊と薄の挿し交ぜ、古銅の廣口瓶に玉簪花を挿したる狀などがそれである、殊に際立つて面白く思ふのは、白の花菖蒲を古銅の四方形か太鼓胴の花瓶に、花も葉も澤山に挿したのなどである。

隱逸なる趣味の瓶花

花の性質から云つて菊の隱逸なることは無論であるが、その外にも蘭、殊に秋の蘭、木槿、茶の花、わびすけ椿、水仙、寒菊、何れも其風情は隱逸である。

殊にこの種の花は成るべく華やかな體に挿すことを避けて挿方も省略したる草體の挿法を用ふる場合に一段その花の風情を發揮するやうに思はるゝ、隨つて花器も澁味のある銅器とか籠などのやうなものを用ひたいのである。

高潔なる趣味の瓶花

である、木の下は汁も膾も櫻かなと云へば如何にも櫻の美はしく華やかな狀が見えて心まで浮き浮きするかの感じがある、が、然し同じ櫻でも入合の鐘に花ぞ散りけると歌へば如何にも物淋しく聞えるやうなもので、同じ一つの花でも其扱ひ方に依つては非常に趣味に相違が出來て來ることを忘れてはならぬ。

これは一つは見る人の感想にも依ることであらうが、今いふ櫻の如きは華やかな方と淋しみのある方と、極端な兩面の性質を持つて居る爲もあらうが然しさはなくて飽くまでも其淋しみのある花や、寂の趣に富んだ花を麗はしく華やかに挿けるといふのは、全然その花の出生と風情とを誤つて居ると言はねばならぬ、然うなつてはモー花の風情はメチヤ／＼に爲つて了ふ、淋し味のある花は何處迄もその淋し味を助けるやうに……その天然の性情を十二分に發揮させるといふことが殊に必要である。

それには毎度いふ事であるが曲げたり矯めたりして花の天性を殺すやうなことを爲ないといふことが、先づ第一の心得で、次には垂れる枝は垂らし、立ち上る枝

然し纖美といつたからとて一概に小花瓶に一輪二輪の草花を挿したもの許とは限らぬ、要するに趣味が纖細であつてそして美麗といふ點があれば可いので、中には隨分大い型の花にも纖美な趣味の瓶花は幾許もあることを忘れてはならぬ。床柱の釘に掛尺八といふ尺八型の竹筒を掛けて、それに忍冬を長く垂らして挿けた狀も、大形な籠花器に小町草や花忍や剪秋羅のやうなものを思ひ切つて澤山に交ぜ挿しにしたのも、其花の多い寡いに拘らず趣味は飽くまでも纖美であらう。

よく見れば薺花さく垣根かな

纖美なる挿花の極致はこゝに盡きて居る。

幽静なる趣味の瓶花

もの靜かで沈着した挿花である、花の性質から云へば、萩、水引草、夏椿、一はつ、秋蘭などで、これらは何れも幽靜な趣味に富んで居る花である、然しそれも挿け方に依つては派手にも華やかにも見ゆるものであるから能く〳〵その草花が自然に有つて居る趣味と出生とを考へてその天性を失はぬやうに挿けるといふ事が肝要

持にさへ挿ければその花が持つて居る天然の美しさや艶やかな所は自ら瓶頭に生動して來るものである。

若し水晶瓶か古銅瓶に、紫の色濃かな燕子花の二三輪を、殆んど握み挿しにしたのかと思ふ程無邪氣に挿けた樣や、木芙蓉の一枝——花は少いが可い——それを眞んの一輪、それに莟の一つ二つもある小枝を藍短かに挿けて、その薄紅色の花の上にキラ〳〵とした打水の露の見えた風情といふものは實に濃艶の極であつて美しいとも綺麗とも云ひやうの無い艶な態である。

纖美なる趣味の瓶花

細かくて美しみのある所がその見所である、能く云ふ譬だが白魚を並べたやうな美しい指にダイヤのはいつた指輪を篏めたといつたやうに美しい挿し方の瓶花である、銀瓶に美人草か雛罌粟を一二輪挿したのや、水晶の小花瓶に、秋であれば萩の小枝を挿した狀などがそれである、若し之を文机か蒔繪の飾棚などの上に置いたならばその風情は如何なに纖美いであらう、

と挿けたとか、古銅の小花瓶に抹梨花か夏椿の一枝を無作意に投げ挿しにしたといふの類である、雪白な彼の花が淺緑色の葉の間に隱見するその風情は眞にゾッとする程に美しくて而して淸らかである、それは投入れ風に――全く些かの人工的の方則を外して生けて始めてこの氣高い趣が現はれるのであることを知らねばならぬ。

濃艶なる趣味の瓶花

牡丹、燕子花、木芙蓉、海棠、これは其花の色にしても又その樣子――花の着き工合にしても、全體の趣が既に濃艶で如何にも麗はしいものである、然し挿け方に依つては全くその特色を失つて美しくも何んともない、嫌な感じを起さする俗氣紛々たる花としか見られなくなる事もある、これは其花の本性を殺して了ふ爲で、人爲の挿花法に依つて彼等が天然の美を亡失すからである。

卽ちこれらの花を挿けるに少しも人工を加へないで、只その自然、彼等の天性のまゝを、極端に言へば子供が摘み取つた花をコップなどに無邪氣に挿すやうな心

従つて――その自然の姿情を損ぜぬやうに挿せばそれが自と自然の法則に適ふのである、だから何處となく其風情も趣味も表はれて來る、卽ち梅は梅、紅葉は紅葉と、その花毎に異つた趣味が出來るのである。

のみならず、同じく菊にしても桃にしても、その挿す枝の異る毎に又風情が變るものであるから何の花も何の花も同じものにはならぬ、丁度人が百人集れば百人ながら顔貌が異ふと同じでそれが又自然である、それを何の花も何の花も千遍一律に同じ花型に入れ同じやうな趣味に挿けようとして枝を矯めたり無理な枝を挿したり、花を使はうとするから瓶花が――挿し上げた花に生氣もなければ風情もなき極めて無味な――殆んど蠟を嚙むやうなものになるのは當然である、それが從來の挿花の行り方である。

淸らかな趣味の瓶花

一體の花の樣子が何となく淸々しい、世の中の汚れといふものを知らないのか知ら、といふ程に淸楚な趣に富んだ花をいふ、例之ば卯の花を籠花器にフトワリ

士が山を出でたといふやうな氣品の高い態である。

それも挿し方に依つては、流儀花で行るやうに姿も型も全然で判で押したやうな定式の挿方の花となつて、梅を挿けても、女郎花を生けても、モー型が極つて――然も不自然で窮窟な法則に拘束されて居るから、何の花も何の木も殆んど同型同態となつて變化といふものがなくなる、隨つて趣味に乏しい――乏しい所ではなく、全然無いと云つても可い位のものとなつて了ふ。

趣味さま〴〵

投入花には從來の挿花――所謂流儀花の如うに窮窟で而して不自然な規則を設けない、だから花の風情は實に千態萬樣である、十瓶挿ければ十瓶、百瓶挿せば百瓶が總てその趣を異にする、云はゞ花毎にその風情が變るのである、卽ち菊には菊の風情を見せ、櫻には櫻の風情を表はす、それも態と菊の風情は恁うであるから斯く生けなければ不可ぬとか、櫻の風情は斯ういふ風であるから、挿け方は恁うせねばならぬといふやうに、殊更に規則に依るのではない、只何事はなしに花の天然に

限られて優しく美しいものは雄偉りとした―豪宕とか遒勁とかいふ所の趣味が寡く、筆力雄健なものは纖細美麗な―綺麗で美しいといふ趣味が乏しい、恁ういふ風にめい〳〵に特色も長所もあるが、その代りに趣味は大抵或る方面に限局されて居るものが多い。

これは繪畫ばかりでは無く、音樂のやうなものでも、書法の如きものでも然うである、然るにこの投入花に至つてはその趣味は決して一つの方面に限られるといふことがない、或るものは纖細美麗の趣に富み、或るものは幽遠美妙の風情に優れて居る、穩健なるもの、清楚なるもの、幽寂にして隱逸の風姿あるもの、磊落にして雄健なるものなど、實にその趣味の多方面なる―殆んど無盡藏といつて可いのはこの投入花の特色である、

一輪挿の小花瓶などに牡丹か紅薔薇の一枝を挿したる狀―露のこぼれるやうな美しさは、浴後の美人とでも形容が出來るであらうし、又籠花生―煤けて黑ずんだ魚籃か何かに水仙か濱菊を株挿けにした風情の氣高く沈着いて居る樣子は高

である、投入花の内にまゝ此の種の面白味のあるのは全くこれに外ならぬのであらう、此の理窟から推して行けば理窟に合はないやうな投入花が極めて理窟に合つて見ゆる道理も能く解ることだと思ふ。

投入花の趣味

その趣味は無盡藏なり

投入花の趣味は千態萬樣で眞に無盡藏である、決して外の藝術の如うに恁ういふ趣味のものであると云つてそれを極めることが出來ない、一寸した例を引いて云へば彼の繪畫―畫界にはいろ〳〵の流派があつて狩野だとか土佐だとか、其外にも四條、圓山、浮世繪又近頃では新派といふが出來てその流派が違ふ毎にめい〳〵に特色と趣味といふものを具へて居る、或るものは畫樣が勁硬であつて其莊重な筆づかひに趣味があるとか、又ある者はその描法の優麗濃艶な所が見所であるとか、各流各派悉く其特色を具へて居る、が然しその趣味は大抵何れかの一方面に

惜しと兼好が云つたのは實に千古名言である、殊に花・・・挿花の趣味に於て然か思はれるのである。

不釣合なる釣合

投入花の姿は實に千態萬狀で殆んど窮極する所を知らぬ程であつて、中には思ひ切つて――傾き崩れて居るかと思ふ程に一方に枝を差し出して挿けた花もある、若し單に枝そのものゝみから云へば慥に重心は外れて居るだらう、然しそれが能く見て居ると少しも釣合を失つては居らぬ、のみならず却々に風情も姿も好く見える、これを不釣合の釣合と云つて一種の插し方であるが、その不釣合なる――枝のみに就ては重心の外れて居るかと見える挿花が、釣合を得て見ゆるのは實にその花瓶と花の枝との連絡がある爲に玆に一種の釣合を得るのである、丁度削り斷つたやうな千仞の絕壁に倒れかゝつたやうな樣に生えて居る孤松、あれが又限りなき一種の趣味を備へて見えると同じである、必竟あれは單に松それのみを見ないで、其生えて居る場所・・・・絕壁をも勘定に入れて眺める爲に釣合を得て見えるの

夜の花の美

月花影を寫して欄干に上るといふ淸高優美の狀は實に春の夜に千金の價のある所であつて、朝の花も夕の花も決して惡くはない、が、この夜花の美は又實に格別である、挿花でも花が燭光に映らされて――加之も紅白相交りたる花上に露のキラメク美しさといふものは恐らくはこれを形容すべき言葉がなからうと思ふ、況して火影に依つて寫し出されたるその淸楚な影――殆んど水墨畫を見るやうに氣高い生きた畫を床の壁に描かれたる狀は、又實に一種別樣の雅趣である、それを昔の挿花家は、むづかしき影の壁にうつるがわろしなど、云つて夜の花を嫌つたといふことは全く趣味の何物であるといふことを解せない俗物の言といつて可からう、李夫人滿窓の眞も月下に窓前の竹影を翫賞したのではないか。

總體何物に限らず夜はその美をますものであるといふ内にも、取り分け花は尙更である、古人が金燭を把て錦繡帳裡の花を照したといふのは、花の美は晝よりも夜の方が遙に麗はしいからの事である、夜に入りて物のはえなしといふ人、いと口

である、花瓣や葉尖にキラ〳〵と輝いて居る露の玉、恰も金剛石でも括り付けたやうに美しい狀は、能く形容詞に用ゐられる浴後の美人とでも云ふべき嬌婉嬋姸の美である、加之もその打水の餘瀝が、ポタリ〳〵と床の青疊の上へ滴ちる所は、世間にいろ〳〵美しいものもあるが恐らくはこの花を挿け上げた瞬間の美に優るものはあるまいと思ふ。

よく世間の挿花師や、挿花を習ふ人達は水揚といふことに苦心をして花を何日保たせたなど〻云つて誇るやうであるが、實にあれは俗中の俗であつて、花の自然美といふことを解することの出來ぬ人のすることである、假令或る方法で以て水揚をして三日五日を保たしたとて、花は何んとなく生氣が失せて葉の上や花瓣には塵埃が積つて來る、その汚らしい狀は四十五十の坂を越した婦人が濃厚な化粧をしたやうに如何にも厭味である……小氣味の惡い荒凉な態のものとなる、慈ういふものは決して花として賞翫する價値がない、挿し上げた瞬間は全く花の美の溢つて居る所で殊に又投入花に趣味の最も存する所であらう。

柳には柳らしい趣がある、それが梅の如うに爲つたり又松のやうに見えるのは全く草木の出生を誤つて居るのであつてそれこそ挿花とはいはれぬのである。これは時としては誤り易い事柄である、殊に投入花は姿型に定めがないと思つて松のやうな梅を挿けたり、桃に似た櫻を挿けるといふことを爲ないやうに心掛けることが大事である。

要之する出生は不變のものであるが、姿には變化がある、然りとて姿には一々必ず變化を作らなければならぬといふのではない、卽ち或る場合には似た形のものも同じ姿のものもあらう、只それが一定したり一律に極めるといふことの出來ぬものであるといふのみである、而してその出生は姿形の如何に依らず又變化や流行の如何に拘らず終始一定であつて、如何なる場合でも不變のものであるといふことを知らねばならぬ

瞬間の美

挿花の美――殊に投入花の美しさは實にその挿し上げて打水を爲た瞬間にあるの

に變へるのではないが木振り枝振りに依つていろ〳〵に變化して一定しないのは當然であると思ふ。

そればかりではない、風に吹かれて奇態に癖のついた枝、他の樹木の陰になつた爲に延びるべき枝が曲り撓つたものなどには、又それ〴〵一種のおかし味も風情もある、ナニモ殊更にそれを擬して眞直な枝を曲げたり、矯めたりして奇狀を作れといふのではないが、若し實際然ういふ枝を得た時は、それをその儘の風情に挿すのが可いのである、だから瓶花の姿形は勢ひさま〴〵に變化して決し一定の型に容れることの出來るものではない。

花の姿は恁ういふやうに千變萬化である、が然しその出生――草にしても木にしても、その天性に受け得た趣情性質は、松は松、梅は梅であつて、少しも變るものではない、なよ〳〵として靡き垂れたるは萩の出生であつて、素直に立つのは竹の出生である、如何に或る事情の爲に姿の上に變化があるとしても、この出生は決して變るものではない、一抱へあれど柳は柳かな、如何に樹幹は太く偉雄りとして居ても

ばならぬ、これはその姿や形の極らぬといふことは花木の自然であるからのことである、梅を挿けても松を挿けても同じ花型であるといふ流儀花式はテンデ話にならぬ、又同じく松を挿けるにしても梅を挿けるにしても、その花毎に‥‥即ち‥瓶ごとに姿形の變るといふのは天然の狀で、そして又挿花の面白味のある所ではないか。

試みに梅花に就いて見てもさうである、溪間や岩間に生えて居る梅と、畑の中や藪際に咲いて居る野梅とは全然その趣味姿狀を異にして居る、それから松にしても矢張り其通りで、場所とその位置とで大變に趣が異つて居る、寒流石上一株の松とでも云ひたいよろ〳〵松もあれば又松根に倚つて腰をすれば千年の緑手にみてりと謠にうたはれさうな松‥‥木陰に尉と姥とが熊手と箒を持つて佇んで居るやうな狀の松もある、恁ういふ風に木に依り、又草に依つて同じ木でありながら趣味も姿もいろ〳〵に變つて居るのが自然の狀である、して見ればその自然を移す瓶花——天然の趣味を賞翫する瓶花では花の姿の變はるのは‥‥決して殊更

それでは到底も完全なものゝ出來よう筈が無いのである、だから滑稽に陷らなければ俗惡なものとなるに過ぎぬ、それは丁度玆に一人の美人があるとする、所が眼が二つあるのは曲がないといつて一眼を潰したり、或は鼻筋の通つたのは風情が少いと云つて態と曲げたり削り取らうとするやうなもので、可惜美人を體無しの不具者にするのと殆んど異らぬ爲方である。

出生は不易姿は流行

投入花は變化自在である、だから態容百端で一定の姿狀がない、卽ち流儀花の如うに花型に極りが無い、態うふと或はそれは法則も何もない無茶苦茶なもので、挿花とは云へぬと云ふ人があるかも知れぬ、然しそれは投入花を見る所の眼を有たぬ人の云ひ草であつて、花神の眞面に接することの出來ない凡庸な見解である。

如何にも投入花は屢々いふやうに花型も定まらず、姿も無くて變態百出であるから、一寸見た所では法則も掟も無いやうであるが、然し實をいへばその姿や花型の極らぬ所が投入花の生命であつて其處に挿花の生きた所が有ることを知らね

も何れかの點に不自然でそして無理な所が出來て、加之も自由自在に差し交した自然の枝と違つて少しも面白味がない　所謂活潑々地の生氣に乏しいのである、又野菊の如うなものを插けても然うである、只これを自然のまゝ　―野邊に咲いたまゝの姿に插けたならば、そのいぢけたやうな・・靡いたやうな、如何にも可憐な優し味のある所に無限の趣味が溢れて、如何なる妙手の畫家が描いても到底まねの出來ない美妙な風情があるであらう。

然るにその立派な―殆んど一毫の人工をも加へる餘地のない天然の風情に、人間が考へた技巧―或は理想といへば理想かも知れぬが―拙劣な理想の枝振や姿に作り上げようとして苦心するのは愚とも拙とも譬へやうのないことである。

假りに一枝の造花を作るにしても、生花の天然の―風情や姿狀を模して作るでないか、それを既に天然の形の備はつて居る生花を插すに、態と人爲の法則を立てたり、又天然の姿以上に更に技巧を加へようとして作意を用ふるといふことは實に大膽な・　恐らくは痴けた行り方といつて可からうと思ふ。

曲なことをしたり、奇を弄するよりは如何程風情が優れ又面白味もあるか知れない、作意を用ゐて巧んだものは何處となく厭味がある、見て居る内に飽氣が來る、然るに自然のまゝに挿けた挿花――天然をそのまゝに移した瓶花は、一寸見た所では然程に面白くもないやうでも見れば見る程だん〳〵趣味が加はつて、幽玄なものは益々幽玄に、華麗なものは愈々華麗となつて、そこには云ふに云へぬ美妙な點が現はれて來るのである、卽ち素直なる花は素直なる所に面白味があり、曲折のあるものはその曲折のある所に云ひ知らぬ趣味があつて、これを人爲に曲げたり矯めたりしたものに比べて見ると、同じ巧技でもその間には霄壤の相違があることを知らねばならぬ。

例之ば一枝の梅でも然うで、挿花者流では無理にそれを曲げて曲折を作る、彼の疎影橫斜とも形容すべく枝を縱橫にさし交して極めて面白味のある、……梅の眞趣を見るべき所を、此枝が眞を見切るとか、添の枝に障るとか云つて斫つたり伸したりする、恁うして作つた枝――不自然な枝は何れ程自然に似たやうな狀に見えて

せて痩せたる態が自然であるのに、それを插花といへば毎時もゝ正格な眞面目な花型に插せといふから如何しても花が窮窟になり亦不自然にも爲つて俗意に陷るのである

で、一切の規則を捨て——人爲的の——杓子定木の索累を去つて、所謂無心所着の境に遊ぶといふことが大切である、恁うなると花は己れの心のまゝなる自然の姿狀を瓶頭に現はして縱橫無碍自由自在にその天眞を展ぶることが出來る、玆に於て小花瓶に插した一輪の花にも、一莖の草にも自然の美妙が備はつて、世の法規や索累に汚されない淸淨無垢なる自然の風情が現はれて、桃、櫻、松、梅は勿論、畑の瓜の花も、垣根の鷄頭花も、採つてこれを瓶花の材料とすることが出來る、芭蕉の所謂花おもしろく味噌面白しと云へるもので、插花の極意はモー玆に盡きて居るのである

技巧は自ら備はる

殊更に枝を矯めたり葉を透したりして技巧を求めなくともたゞ花の自然を瓶頭に寫すことが出來れば技巧は自然にその間に備はるものである、それは人工で

恁ういふことは一寸考へると花を愛するやうでもあるが、實は甚だしく花を虐待するもので、決して花を劬るといふものではない、殘花には殘花の趣味があり、蕾には蕾の風情がある、だから唯その風情を傷けないやうにするといふことは恐らくは挿花の第一義と云つて可からう、ものを憐むとは草木の霜にあひ、鳥獸の寒暑にくるしむ也、されば道に臥したる乞兒にむかひ、汚しとおもふ念起らば一句に結ぶこと能はずとは俳宗芭蕉翁の俳諧觀であるが、この言葉は直ちにこれを花道の上の教訓とすることの出來る金言であるやうにおもふ。

法の爲に挿花を俗化す

法といつても法に依ることであるから一概には云はれぬが、例の挿花者流のいふやうな變化百端姿狀窮まりなき草木が自然に樣々の變化を現はして居るのを、一定の定木で極めたり、又同じやうな花型に容れようとする所唯杓子定木法は、慥に挿花を俗了するものである、始中終風に吹かれて立てる磯邊の松は、枝も葉も靡いて一種の奇形を現し、木蔭の花は色が褪せて咲く、これはその靡いた姿、色艶の褪

かゝつた頃の　フックリとした蕾がちの内に僅に一二輪開き初めた暖かさうな感じのある時、彼の梅一輪一輪づゝのあたゝかさ、といつたやうな頃と又枝も梢も眞白に雪の如く繚亂として咲亂れた頃とは大變にその趣が違ふ、それは梅ばかりではない、總ての花が然うである、菊などでも蕾が堅く黄金色に輝つて大空の星かとも見える極走りの頃と、吹上げに立てる花ではないが、浪かと見紛ふ眞盛とはその趣味に非常な相違がある、又殘菊となつて霜に逢へる葉先が少しうら枯れて花の色が次第に變つて來る時分の侘しい狀とは、亦その風情に違ひがある、即ち盛りの美はしさも殘花の淋し味ある態も、何れもそれ〳〵趣味のあるものであるから其風情と趣味を損じないやうに憐み劬つてその趣狀を瓶頭に移すのが肝要である。

若しその趣味風情を考へないで何時も〳〵同じ心得で以て花を挿すことに成ると、恰も四十過ぎた婦人が厚化粧をしたり、少女が老婦人のやうな髮形に結んだと同じで不釣合とも滑稽とも厭味とも殆んど云ひやうのない挿花となつて了ふ。

虐待である、如何して之れが花を愛して瓶裏にまで移して觀賞するといふ心持であらう。

花を憐むといつても枝を惜んで伐らぬといふやうなことではない、花を愛しそれを觀賞するといふ心があつたならば惜氣なく伐つて之れを瓶裏のものとするも可い、唯その可憐な態――自然の風趣を傷けないやうに飾り憐むといふ事が大切であつて、この心を以て花を賞するならば假令伐つてこれを瓶中に移すも、又摘み採つて籠の中に盛るも、花は憶に成佛をする、佛說にいふ上品上生の臺に咲いたものと云つて少しも不可はないのである。

要するに花を飾るといふことは其天性を傷けないやうにすることであつて天性を傷けぬといふのは――挿花としては、その天然の趣味をそのまゝソツクリ瓶頭に移すといふことである。

而して其趣味はいろ〳〵で、花により時により又枝ぶりに依るから殆んど窮極する所を知らぬ程に多種多樣である、例へば同じ梅の花にしても未だ漸つと咲き

を少しも僞り飾らない處にその美妙が生動するのである、姿の如きは千變萬化で如何あらうとも只この一つの自然所謂僞らない所さへあれば技巧を弄ばなくとも面白い姿にも新しい心持にも挿けられる、―挿けるのではない自然に新しい心持が現はれて來るのである。

枝ぶりの日に／＼變る芙蓉かな　芭蕉

花を憐め

挿花の極意は花を憐むといふことが第一である、玆に花といふのは一般に渉つていふのであつて、必ずしも色の美しく咲き誇つて居る花ばかりでない、一條の枝でも一枚の葉でもである、それをいたはり憐むといふ心がなくては花は挿けられぬ、挿けた所で趣味のある挿花にはならぬ。

世間に行はれて居る挿花を見るに、中には花を觀賞して挿したのか虐待して居るのか殆んど解らないやうなものがある、無闇に枝を曲げる、葉を伐る、殆んど草木の自然の樣が失くなつて了ふ程に花を慘めな狀に使つて居るが、これは實に花の

が優に机上の美を添ふることが出來るのは投入花特有の妙味で、卽ち流儀花の方で去り嫌ひをして捨てた花も投入花の方では之を拾ひ愛しんでその自然の美を充分に發揮させて遣る、卽ち如何なる花でも草でも、悉くこれ投入花の材料たらぬものは無いのであつて閑花野草總て我家の瓶頭の客たりといふ胸腹の廣く大きい所が投入花の一特長である。

唯眞故に新なり

花の美は花自らが旣に有つて居る、だからそのまゝに之れを瓶頭に挿せばモー神韻漂渺の態はチャンと備はつて居るのである、然るを之に更に人爲的の技巧を加へようとして樣々の型に挿して見たり枝を曲げたりして却て草木が有つて居る自然美を傷くるといふのは何たる愚なことであらう。

斯ういふやうに自然の外に技巧を弄ぶから趣味が虛僞に陥る、卽ち挿法に誠がないといふことになる、誠のない挿花は不自然であつて且つ無理が出來る、恁んな挿花は見るからモー厭な感じがする、挿花は唯その自然的で誠實で、草木の性情

ある、横ぎる枝は伐り去るとか、花の形――挿花全體の形を半月形に爲なければならぬといふやうな、然ういふ窮窟な規則は一切これを設けないのである、で投入花の規則といふものは有つて無いやうなもので、先づ云つて見れば山吹や萩は垂れて挿け、菖蒲や女郎花は眞直に挿けるといふ位の、極々單純な事に過ぎない、これを洒落て云へば柳は綠、花は紅といふやうな事になるのである。

縱橫に濶歩す

流儀花が花の型に規則を立てたり天地人の三才に象つて組織的に行儀よく挿すやう組立てるのに反して、投入花の方は花型に一定の方則がなく、從つて枝の長短だとか高低だとかいふ事は少しも頓着しない、高低參差として枝ざし木ぶり又花の着きやうなどは極めて放縱自由である、だから挿花に生氣があつて風韻も趣味も瓶頭に溢れて居る。

花に去嫌なし

名も知らぬ野邊の草花も一たび投入花家の手に入ればその閑寂の態、可憐の樣

だから挿花が窮窟でそして餘韻だの風情だのといふものは殆んどないと云つても可い程に俗化されて了ふ、丁度田舍の花嫁が婚禮の席へ出たやうな態で、無理に首を据ゑたり肱を突つ張つたり、如何にも態とらしい所が見えてその不自然な樣子が歷々と見えて餘韻だの趣味だのといふやうな所は微塵もない、これでは折角花を挿しても少しも詮のないことに成る、然るに投入花の方では一枚の葉でも一輪の花でも、總てそのものゝ自然のまゝを挿すのであるから挿花に無理がなく隨つて餘裕がある、だから木の花を挿けても草の花を挿けても、實に趣味は津々として限なき面白味がある。

投入花に法則なし

投入花には法則といふものがない、然しそれは人爲の……人工的の……不自然でそして無理な法則を花を挿ける上に用ひないのである、だから花卉草木が天然に保つて居る趣を傷けぬ、卽ち規則とは花や葉そのものが天性稟け得て居る生ひ立ちや姿風情には飽くまで隨つて行くので、所謂天然の法則を守つて行くので

普通の流儀花のやうな姿の花も挿けられぬ事はないが、然し少くも二方面の花であるから要之觀賞の方面が廣い、これも亦兩者の相違する所の一つである。

投入花

投入花の本領は趣味にあり

花を挿るといふことは既にモー趣味の仕事である、理窟や勘定の外に超越して、これに對ふ者の心に美といふ感情を起させるといふことが大切である、見て厭な感じがしたり不快の心の起るやうなものは挿花といふ資格が無いといつて可いのである、要するに挿花の本領は何所までも趣味でなくては不可ぬ、餘韻でなくてはならぬ。

然るに世間の流儀花では型に重きを置いて、枝ぶりや花の使ひ樣などにまで一一矢釜しい方則を立てゝ居る、だから自然花の姿が定り又範圍が小くなつて……變化といふことが無くなつて、趣味の範圍が極めて狹いものになるのである。

挿花家の夢想も及ばない思ひ付きである、聞て見れば何でも無いやうであるが然し恁んな思ひ切つた離れた技は狹い規則の内に齷齪して居る人達には出來得ぬ事だらうと思はれる。

恁ういふ風に挿花といふものは範圍の極て廣いものである、それを流儀花の方では規則で以て挿し方を掟てたり、花の姿を極めようとするのであるからテンデその着眼點が異つて居るのである。

方面の多少

又流儀花の方では大抵は花を一方から見たまゝの姿で――即ち前の方からばかり見て恰好の好いやうに挿ける花が多い――殆んどそれである、だから左右や後方から見ては恰で縫ひ物の裏といつた態で、その穢るしい事は二目とは見られたものでない。

然るに投入花は二方面、三方面、四方面、何れから見ても見所があるやうに面白い姿に挿けることが出來る、勿論投入花でも正面から見る花、一方から見たのみの――

を挿すに就ての意匠の一つで、要之一種の機轉を利かせるのである。

これも亦花に依り木に依り又場合に依つて變化百端であるから斯く斯くの場合には恁うといつて豫め極めることは不可能である、所謂臨機應變でなくてはならぬ、名高い話であるが昔太閤秀吉が利休の女の機智を試さうとして銀製の大水盤に水をなみ／＼湛へて花止も股木も與へないで只一本の加之も枝には曲も風情もない――挿花家の方では手の附けられない桃の花を出してこれを挿けよと云つたのである、その時に彼女は暫らく考へて居たが淑やかに一禮して其枝を受け取つて床の間の前に進り寄つた、秀吉は彼女は如何するとかと思つて凝いつと見て居ると、彼女は桃の枝を倒にしてバラ／＼と花を水盤の内へ扱き入れて枝を持つて下座へ退つて不手際で、といつて辭儀をした、その蕾、開花、半開の美しい桃の花がバラリと白銀盤裏の水の面に浮んだ狀は如何なに美しかつたであらう、秀吉は手を打つてその機轉を賞したといふことである、これは挿花ではないが、兎に角一種の瓶花であつて、その意匠と働きといふことに至つては兎ても今日の俗流

の着きやうからその花木の趣味までも一々敎へて呉れる、又菊を挿さうとする時は菊が師となつてその姿や風情を敎へて呉れるで、挿花の先生は即ち草木であつてモーこれに優る好い先生はないのである、傳授料も要らなければ免許も要らぬ、唯此方の注意と熱心次第で如何な奥儀でも懇に敎へて呉れる、極端に云へば挿花には先生は要らぬのである。

注意は一つの意匠のみ

今いふやうに挿け方――枝や葉の使ひ方や花の風情は花が敎へて呉れる、即ちその敎に背かぬやうに、彼の示すまゝにその木の振りと花の有樣を傷けぬやうに挿ければそれが何よりも可いのである、が、唯こゝに一つの注意すべき事は挿けるに就ての意匠――働きである、働きといふのは、此花は恁ういふ風情の花であるから同じ事ながらも斯ういふ風に挿した方が可いとか、斯う行れば挿し方に働きがあつて花を活かして使ふことが出來るといふやうな事である、その他その花の使ひ方に依つては花瓶の選び方とか瓶花の置き場所の選定といふことなども矢張り花

ふ規則を立てるのである、然もその傳授をするといふ事がその花を挿す程の腕前が無いとか何とかいふことであれば兎も角も、金さへ流派の家元へ納むれば何時でも免許するのであるから實に抱腹絶倒であると云はねばならぬ、況して其傳授するといふことの內容は誠に小供欺しのやうな、如何にもつまらぬことであるに至つては挿花は美術だとか何だとかと云つて誇つて居る口上に對しても甚だ似合はしからぬことではあるまいか

それは素より然る師家なり家元なりに就て傳授を受け免許を得ようとするものも愚であるが、それを以て、師家だ家元だと云つて世に誇つて居るといふことは無論然ういふ營利一方を主とする家元は少いであらうが、若しあればそれは憐に美術を賊するの行爲である、無論斯の如き人は草木自然の美を味ふのなんのといふ事は出來ぬ人達で共に花道を談ることの出來ない人だと思ふのである。

然るに我投げ入花の方では決して然ういふことはない、草木の自然美を觀賞するのは既に彼そのものが師家であつて、梅を挿る時は梅が師となつて枝ぶりや花

のは全くこのことである。

範圍の廣狹

流儀花の方の行り口は如何にも氣の小さい……總てが規則的人工的であつて、この廣い花木の上に溢れ漲つて居る美妙を樂まうとは爲ない、趣味とか美とかいふことには殆んど沒交渉であるかと思ふ程に範圍が狹い、既に法則を立てゝ花型を極めたり又天然に備はつて居る草木の美――その自然美に人工の作意や技巧を加へようとする――それは畢竟作意を加ふるのではなくて、それが爲に自然を不自然に爲ようと云ふのだからテンデ話に爲らぬ。

勿論限なく廣くて豐かな花木の自然美を小な眼で見た法則を以て掟てようとするのであるから、その趣味は恐らく萬分の一も味ふことは出來ぬのが當然のことである、だからこの花と彼の花は交ぜて插すことは爲ないとか、彼の花は插花に用ひないとか、その外まだ樣々に六ケしい規則を立てる、尤も笑ふべきことは許し物と稱へ傳授物と云つて免状を受けないものはその花を插すことを許さぬとい

趣味があるであらう、何處に草木天然の風情が在るであらう、花を愛するのか虐げるのか我等にはそれが解せられない。

枝を矯めるのも葉を透すのも或る程度までは惡くもなからう、又それを爲るの必要もあらう、然し挿花といふものは草木を曲げたり延したりしてその自然の姿狀を忘失して人間が定めた不自然な型に容れようといふに至つては、これは實に花を虐殺するのである、亂暴である、若し花が口を利くものであらば如何にその無情と慘酷を訴へるかも知れぬ。

曲つた枝にはその曲つた所に風情があり、よろ〳〵と延びた草にはその延びた所に面白味が現はれて居る、これが彼等の天性で又實に自然である、それを無理に矯めたり延ばしたりして不法な技巧を加ふるのは丁度嬉々として無心に遊んで居る小兒や、漸と打ち笑んでよた〳〵と歩み始めたばかりの幼兒に小笠原流の行儀を以てその進退を律てようとするやうなもので、全く其の天然を傷けて了ふ、或はモツソツト手酷い行り方をするのと同じかも知れぬ、角を矯めて牛を殺すといふ

草のやうなものでも決してその天然の趣味を捨てないでその自然のまゝを花瓶に挿ける、即ち彼等の觀賞の主點はその可憐な所に在るのであるからそれを生かして使ふのである、如何なる名花でも又幽谷の無名草でも、各〻その天然の風姿趣情を觀賞の目的とするのであるから、その間には聊かの作意をも加へない所に面白味がある、然るに流儀花の方では何うも然うは行らぬ、それはモー花型に三角だとか半月だとかいふ一定の掟があつて、それを其花型に容れようと云ふには勢ひその趣狀の上にも作意を加へねばならぬことになる、又何とか人工を加へて拵つて見なければ挿花でないと云ふやうな氣がして終に花や草を其儘挿しては挿花にならぬなどゝいふ程に成り隨つて種々の技巧を弄するやうに成る。

枝を矯め葉を透かす

流儀花には枝を矯めたり葉を透したりしていろ〳〵の細工をするのだが、又然うしなければ或る花型にはまらないから盛にそれを行る、モー花は全くメチャメチャで、殆んど完膚なしと云ふ無慘な有様に成つて了ふ、斯う爲つては何處に花の

があつて、めい〳〵に其趣を異にして居る、即ち花に依り木に依つてそれ〴〵樣子も形も同じものでないのを、何の花も何の花も一つの花型に容れようとするのであるやうに見えて、その法則といふものが如何にも窮屈で、そして不自然であるやうに思はれてならぬ。

一本の女郎花を挿すにしても、一枝の梅を生けるにしても、それを其儘に……花の天性のまゝに插けたならば風情もあり面白味もあるものを、何故アンな窮屈なことをして加之も花を俗了させて了ふのであらう、のみならずそれを爲るのに非常な手數を費け苦心するのかと思ふとそれが不審でならぬ、先づこれが第一に投入花と流儀花と異ふ所である。

作意の有無

投入花は所謂大自然を主として花木の天眞を賞觀するといふを目的とするのである、だから努て花の天然を傷けないといふことに苦心をする、松や梅や櫻の如うな立派なものは云ふまでもなく、土堤の芝生に交つて咲いて居る蒲公英や蓮華

古遠州だとか、いろ〳〵世間にある何流何派といつて花を挿けるに法則を立てゝその法則通りに花を挿す所の一種の技術――技術といつては語弊があるか知らぬが……技巧に依つて生花を挿す流派の挿花――の方ではその挿方にいろ〳〵の六ケしい法則がある、のみならず先づ第一に花の型に一定の規則が設けられてある、必ずしも長さが何尺何寸で幅が何尺といふやうな……それほどまでには極つては居ないが然し、大抵は花の形は半月形に限るとか、眞と添と留といふものがあつて眞は添よりは長く挿け、添は又留よりも高く挿けなければならぬとか天地人の三才が如何の、五行が恁うのといつて喧しい……却々面倒な法則がある、喧しいのも面倒なのもそれが自然に適つて、それを行れば挿花に趣味が出來て來るといふものでゝもあれば構はぬが、吾等の眼からは如何も然うは見られない、或はそれを見る所の力……流儀花の趣味を解する力が無い爲でもあらうが、何分その法則といふものが不自然で、そして規則といふものにも無理があるやうに思はるゝ。

草にしても木にしても、その天然に稟け得た所の生命といふものがあり又姿狀

な花型に挿すといふことは不可能のことであるからである。

若しそれを強て行れば挿花は死物となつて生氣も精神もなく極めて乾燥無味のものとなつて見るから厭な感じのするものになつて了ふのである、例之ば今萩を挿けるとするに、その型は枝次第であつて姿に定りは無い、が、その枝のなよ〳〵として柔かいやうな緑の葉の間に薄紅色の優しい花の着いて居る所の極めて自然なる趣きを、天然の姿風情を傷けないやうに瓶頭に挿した所に趣味がある、……流儀花のやうに花形だの役枝だのと喧しくはいはないで、極々無雑作な挿し方をした所に秋の野の趣や疎の垣根に一もとの木萩の咲き出でた物閑かな庭の状を偲ばせて何處となく蟲の音などさへ聞えさうに思はるゝといふのが投入花の生命であつて、花の姿は半月形でなくては法に背けるとか、これでは三角法が缺けて居るから挿花に爲つて居ないなどゝいふ、いはゆる人爲的の法則で以て變化窮りなき天然を縛り付けるといふことを爲ないのである。

然るに流儀花――流儀花といふのは、池の坊を始めとして古流だとか遠州だとか

味に於て捧げるのであるから、これも亦花の自然の美はし味を失はぬやうにそのまゝに——成るべく作意を用ゐないやうに——花木の天性のまゝに插け努めて人間の作つた插花法を用ゐたり又花を窮窟な花型に容れようと思はないで、眞の花の美を手向けるといふことを第一義としなければならぬ。

花——插花には今いふ如くいろ〳〵の主意目的があつても要之その眼目とする所は今いふ所の三つに外ならぬ、隨つて花を插ける場合には其場合を考へてその目的に外れないやうに插すといふことが肝要である。

投入花と流儀花

一は趣味を主とし一は型を主とす

投入花の生命とする所は花木の趣味と風情であつて插花の姿形には重きを置かない、これは插花の形はその枝ぶり木ぶりに依つて、千變萬化にして決してそれを同じ型に容れるといふことは出來ないものである、又實際多くの花を同じやう

所といふものがあるが――これは緣前に置いても、客と對座して居る間に置いても、若し又極めて挿花が小さければ机の上とか一寸した盆などに載せて眺めても構はない。

殊にこれは花の純美の狀を愛づる爲であるのだから挿けやうも絕對に作意や方則を避けて、作り氣も飾り氣もなく、たゞ眞の握み挿しにしたといふ風に挿すのである、彼の盆花といつて盆の上に花の折枝を載せて賞玩することや花果の交ぜ盛、卽ち果物と花とを交ぜて飾るのと同じで、これも必竟それと同じ主旨で以て挿けるのである。

神佛に手向の挿花

裝飾の爲でもなく又主として花を賞玩する爲でもなく、神佛の寶前に手向けの目的を以て挿ける花がある、勿論花の美を賞するといふことに就ては變りは無いが然し、その花を賞するといふのは人が賞するのではなく、神や佛が賞する――神佛に花の美を手向けてその心を慰めるといふので、時には一種の幣といふやうな意

は美を一點に注集る譯であるから、美は愈く美となつて扮裝に一種の光輝を添へて來る、所謂畫龍の點睛で、室内の裝飾に生氣が出來て來るのである。

生花觀賞の爲の挿花

前に云ふ所は裝飾本位であつて、卽ち裝飾の爲に用ふる挿花を――花を裝飾の要素としての挿花であるが、其外に又單に生花の美を觀賞し愛玩するといふ意で以て花を挿すといふことがある。

裝飾的の挿花の方は花が四邊の裝飾と調和するやうに、置合せの器物との調和といふことを考へて――挿花が一體の裝飾と調和して飛び離れたものとならないやうにすることが必要であるが、然しこの觀賞的の挿花、卽ち專ら花そのもの〻美を賞玩し愛好する爲に挿ける瓶花の方は、裝飾との調和だの花瓶の置所だのといふことには殆んど沒交涉である――全然關係を爲ないといふのではないが、先づさういふことには深く拘るといふことを爲ないでも可いのである。

だから之れを坐右に於ても――普通の瓶花は床の間とか棚とか、大抵その置き場

これは花の美は人間が作意を用ひて拵へたものではなく、全くの自然美であつて少しも世間の汚れに染まぬからであらう。

この美しい花を以て居室を飾る　挿花を室内裝飾の要部に置くといふことは非常に面白い行り口であつて、然もその多くを用ひないでホンの二枝か三枝の花で全室に美觀を漲らしめるといふことが力である、又大なる意匠である。花で以て壁も天井も柱も、家の全面を包むだ如うに――殆んど花の裡に埋つて居る如く飾り立てたのも、美しいことは美しい、けれどもそれは金襴の着物に金襴の帶をしめて、襟も羽織も身體の全面を金襴づくめにしたやうなもので、美しいといへば美しいが然し時とすると――見る人に依つては俗惡な感じを持つこともあらう、必竟りこれは餘り御馳走づくめになるからである。

然るに若し地味な無地の衣物を着て帶留に金剛石でも嵌つた金物でも佩けたならば如何であらうか、勿論それは人々の好不好であるから決してそれを強ふるといふことも勸めることも出來ぬ、が、然し我等は如何しても第二の方を取る、これ

とがこの裝飾的挿花の大體の主意である。

一體美を愛するといふことは人類の自然の性であつて如何なる無趣味な人間でも櫻の花が雲のやうに咲き誇つて居る美しい景色を見ては無心の笑を漏すではないか、勿論美といふことには種々の階級もあり、趣味もあり、又方面も異ふものではあるが兎に角美しいものを見て厭な顔をするといふことは先づ普通の人間には無いことである。

今いふ如うに美には種々の方面の美があるが其内で花の美ほど美しく、そして心持の好いものは恐く他には無いであらう、櫻や梅や扨ては牡丹海棠の如うなものは云ふまでなく、土堤の芝草の間に交つて居る菫草や濱邊の小松の木陰にポチポチ咲て居る撫子のやうなものでも、其可愛らしい、そして無心な態は實に何とも云はれぬ美しみが溢れて居る、恰度嬰子が母の顔を見て無心の笑を漏した時のやうに、して見るとマア天地間に於て何が美しいと云つてこの花ほど美しいものはないと云つて可いだらう。

雅遊考にも、我國挿花の技藝は有根の樹を賞するに起りその濫觴する所は蓋し太古にあり云々とある。

兎も角も挿花を愛するといふことは漢土や印度の技術の傳はつたのではなくて日本の古來の習俗の發達しものであるのを、中古以來佛法流行の世となつた爲に何事にも佛說を附會することが始まつた爲に、この挿花の傳說の如きも矢張りこれに感化されて終にその起源に從來のやうな種々に佛說を附會し來つたものであるかと思ふ。

挿花の目的

裝飾の爲にする挿花

挿花にはいろ〳〵の目的があつて、それ〳〵其趣味も風情も異るのであるが、第一は裝飾の爲にするといふことで、これが先づその大部分を占めて居る、卽ち花を折つて瓶頭に挿すといふことは居室に美觀を添へ、精神の慰樂を求むるといふこ

の習俗で、彼の天香具山の眞榊を掘り取つて飾りにしたといふことは――殊にその美しくみづ〳〵しい緑の枝に五色の絹をかけるとか清々しい麻をバラリと掛けて飾りにするといふのは眞に優雅な意匠である、これは我等日本人種の清楚簡朴な氣象の表現ともいふべき事で、眞摯なる内に優みのある大和民族の特性を充分に現はして居るといつて可い。

だから今でも神を祭るに榊の枝を以て神座を飾るといふ習慣が殘つて居る、伊勢太神宮の八重榊の鳥居といふのは榊の枝に木綿をつけてそれを垣のやうに挿しはやすので、之れも矢張草木を以て‥‥美はしい生木で飾をした遺風である、然しこれは常磐木を以て飾つた例であるが、花を飾としたことも澤山ある、それは花の扇といふがあり花の八重垣といふがあつて、歌にも

つまこめに家居せし世の跡なれや
八雲にまかふ花の八重垣

など〻詠んであるが、これらは皆花を以て家居の裝飾とした證據である。

濫觴は古し

前にも云ふやうにその流派々々でめい〳〵に其傳統を附會していろ〳〵の妄說を構へて丁度成り上りの人が何の連の子孫だとか何の大臣の末葉だとか云つて昔の大人物や名家に系統を附會してその家の系統を作るやうに、いゝ加減の作り事で以て其流儀の傳統を假託して自慢をするのである、然しそんな吟味は如何でも可い、只花を挿けてこれを愛するといふことは、畢竟人類が以て生れた自然の性情であるから、既うズット古い時代から行はれて居たものと見るが穩當である、何流だの何派だのと云つて其挿け方に法規を立てたり、又花の姿に型を定めるといふことこそ爲なかつたらうが草木の枝や花で以て家の內外を飾るといふことは日本では極めて古い時代からの習慣風俗である、卽ち裝飾の目的を以て花木を挿して心を慰めたものであつて、恐くはこれが今日の挿花の濫觴となつたものであらうと思ふ。

日本人が草木の花や葉のみづ〳〵しく美しい狀を愛づることは實に上代から

茶席などの挿花としては非常に好い趣味のあるにも拘らず、多くの場合の挿花としては到底其要求に充たすことが出來ないのである。

それに例の流儀花が今日まで盛に行はれて居たのは畢竟その挿花が萬人向きであるのと、その曲折のある所が俗人連中の嗜好に適した爲でもあらう。

挿花法の革新時期に入る

恁ういふ有樣で挿花は今日まで行はれ來つたものであるが近年に至つて繪畫や文學やその他多くの美術や藝術の方面に革新の氣運が勃興した結果、趣味といふことには大分新しい傾向が出來て花道も亦この影響を受けてモウ昔風の流儀花は厭味があるとか何とかいつて世間で滿足しなくなつて來た、それに又洋館の挿花だとか洋館でなくとも卓上の飾花には何分昔風の挿花では納りが付かぬと云ふ所から流儀花でもなく茶花でもなく、加之も文人式の投入花や歐洲風の盛花を折衷したやうな一種の挿花を好むやうに爲つて來た、これは慥かに趣味の變化と裝飾上の必要から起つた新しい要求であると斷言して可いであらう。

唯挿花が益々派手に、そして益々曲折のある奇狀――寧ろ奇怪なものとなつたに過ぎぬのである。

茶人式の挿花始る

所謂流儀花といふものが曲折と奇巧を弄することの極端になつた反動で茶人式の挿花といふものが次第に頭を擡げて來た、これは流儀花と異つて極めて天然を主とする挿方であつて、殆んど投入花に近い、誠に生な挿方である、だから趣味は花型の小いのに反比例して極めて豐富である。

けれどもこれは亦例の茶人趣味で澁味があるとか寂びがあるといふ方面には充分風情があるが、華やかと麗はしいといふ方の趣味は極めて寡く、殆どこれを缺いて居ると云つても可い、それは其譯で、茶人式の花には努めて然ういふ華やかな趣味を避けて挿るからである。例之ば同じ椿を挿すにしても花の小い、淋しみのある、わびすけといふ種類の花を選ぶとか、又牡丹の如き華麗を生命とするものを挿けるにも成るたけ木の瘦せた輪の小いものを好んで使ふといふのであるから

ことを許可すとか、といふことも始まつて來て趣味は益々墮落して俗惡を極めたものに爲つて了つたのである、嬉遊笑覽にこのことを、そのわざは昔より巧になりしも、徒然草に爲兼大納言東寺の門前にて、かたわもの共を見て、曲折あるを愛でゝ植られたる鉢木ども皆掘り捨てられしとあり、其の鉢木どもゝ自然の形狀にはあらぬなるべし、と書いて笑つたのは能く今日の挿花の俗惡な有樣を穿つて居るのである。

諸流派益す起る

玆ういふ有樣で挿花の流行は愈々盛になるにつれて技巧を競ひ新奇を弄ぶことが流行つて少しその技に巧者な者はいろ／＼の名を附けて一派を創め、前に記したやうな種々の流儀が起り、挿花はそれに從つて愈々流行する、然し何れの流派も大同小異でこれといふ程の異つた點のあるでは無い、池坊流の花を少し取捨したとか、立華の或る部分を省略して縮めたといふやうな風のもの許りで、どの瓶花もどの瓶花も到底或る範圍を脱出するといふことを爲し得なかつたのである、

ふやうな事に重きを置いたのであるから規則や法式はあつても今の花のやうに俗氣が少かつたものらしい。

花道愈盛にして趣味愈墮落す

足利時代には獨り花道ばかりではなく香道、茶道、蹴鞠、謠曲などのいろ〳〵の遊技は非常に盛に行はれたもので、殊に花道は上雲上人より下は町家の子弟まで之れを學ぶやうに成つて實に隆盛を極めたものである、然うなると傳授や口傳を受けるには第一に金錢上の謝儀といふことが始まり免許だの皆傳だのといふことが出來て、この風雅な遊びが金錢を以て賣買されるやうに爲り隨つて技術の拙い人でも何でも金さへ出せば免許が得られる、そして其の免許を持つて居るといふことが此の社會の一つの誇りとなるやうに爲つて來たのである。

それは構はぬが、然うなつて來ると花といふこと…挿花といふことは花道の流行と反比例にだん〳〵趣味が俗惡に成つて花型に定りが出來たり、甚だしいのは免許のないものは然ういふ花臺が用ひられないとか、花を挿して床に幕を用ふる

て重きを措くのではなく去り嫌だとか出生などといふ方面に就て口傳といふことを矢釜しくいつたものらしい。

それは花の趣味により又風情によつて挿け合せの法則を定めたり、有職や古實や和歌の法則などから取つた意匠——その風流な一種の考案を傳授として門人に教へたものらしい、假令ば柳を挿ける習ひに悉ういふことがある、凡そ花を生けるといへば葉を生けぬ、葉のみのものを生けぬものであるが、柳ばかりは之を許すといふことがある、そして立華では十一月朔日から二月晦日まで生けるのであつて此時は別して葉も無い時に用ふるのであるがこれは定家が十二月の花鳥を究めた時に柳を第一番としたといふことに基いて今いふやうな傳を定めたものである、卽ちこれは優雅な和歌の方の意匠を取つたものらしい、又水仙は寒中……春季に爲るまではその白い莖皮——俗に袴といふ根元の皮を去らないで挿けるといふ傳がある、それは出生の研究から來て居るのである。

而て秘傳だの口傳だのといふことも大抵は型よりも出生や意匠上の去嫌とい

のといふものが世に行はれ始めて居る、そして毎年七月七日には二星の手迎けの爲といふので七夕會の花といふことが始まり禁中を始め將軍へも立華を奉るといふことが一つの恆例のやうに成つたもので大永五年の頃には雲上人の花の會――挿け花の會があつたのである。二水記に

大永五年三月六日午後參青蓮院門跡、小納言令同道、今日花御會也、池坊(六角堂修行也、茶之上手也)祇候十瓶餘有之、

といふことがある。卽ちこの頃には既う池坊は花道の專門家であつて雲上人にも門人が多分にあつたものらしい。

恁ういふ風に此頃は花道といふものが出來て、香道や茶道と共に專門家――その技術を敎へる專門の人が出來て盛に都鄙に流行したものであつたと見える、けれども前にも云つた如くまだまだこの時分の挿花は今日の花と違つて甚しく技巧を弄ばなかつた事は古い瓶花の圖やその外の書いたものを見ても能く解る、殆んど自然式のものであつて、口傳だの祕傳だのといつた所でそれは花の型に付

然し兎に角その傳統といふ上からいふと池の坊流が一番古いことは云ふまでもない、花を瓶に挿して賞玩する技術を始めたといふことに付ては――假令これを佛に供へる爲にせよ又座敷飾の爲に挿けるにもせよ――その花型が今日の池坊派の行つて居るやうなものであつたか如何かは分らぬが――兎も角も挿花といふことの工風を始めたのは池の坊であるやうに思ふ。極古いことは分らぬが専定時分の花の圖を見ても今日の花とは大層な相異である。更に少し溯つて二百五六十年前の花の圖を見ると殆んど今日の花とは流儀が異つて居るかと思ふ程で、昔の花は全くの草木の自然のまゝを挿けて居る、所謂投入れの體のものである、この頃の花にはモツ撓めたり透したりした痕跡は少しも無い、我等はそれを實に面白く見るのである、眞に天眞爛漫で、少しも作意といふものは用ひて居らぬ。

池の坊は恁ういふ花で以て、卽ち趣味のある挿花を以て花道の家元として世に立つて居たものであらう。花道の盛になつたのは足利時代である、この頃は立華といふものが既に一つの形式を以て世に現はれたものと見えて秘傳だの口傳だ

凡そ何事に依らずその淵源を後代に於て探らうとするものや又その一流一家の傳統を世に誇らんとするものがその系統に有難味を付け勿體を付けんとして強て臆說を附會することは一つの流弊である、是非虚實を看破するの識なき輩がこれに雷同附和して世に誤りを傳へることは極めて世間に多いことで、花道の如きも矢張この弊を免れぬのである。

或は花道は微笑捻華から起つたものであるから其起源は既に遠く釋迦の時代に始つたものだとか、或はまた聖德太子が非情の草木を有情の人の體に象つて合掌の姿を表して草木をして成佛せしめようとして法則を定め給ふたものだとか、或は又小野妹子が觀世音に花を供へる爲に挿花の工風を定めて之れを後代に傳へたのが即ち挿花の濫觴だとか、その他某の宮の御意匠に爲つたものだの、某の國師が考へ付いた流儀だのといつていろ／＼種々にその系統自慢をして居るのだが多くは彼の我佛尊しの流であつて牽強附會の虚構說たるに外ならぬ。

傳統は池坊流最も古し

でも專順法師や專定などの挿花圖に殘つて居るものと比べて見ると多少俗化して居はせぬかと思ふ所もある。

遠州流は小堀遠州――宗甫の名をかりたるものである、其起源は宗甫から起つたものだといつて居るが、これは全くの附會である、そのことは嬉遊笑覽などにも委しく辨じて居る、それは論より證據で遠州流の挿花を見ても解る、小堀宗甫とも云はれた――趣味の人、加之も茶道の名匠が如何して彼樣な厭味な俗氣滿々たる花を挿けやう、無論名だけを宗甫に借りたことは能く知れて居る。

又宏道流――これは例の袁中郎の瓶花史から思ひ付いたものらしいが、實は中郎の瓶史の意は殆んど失つて尙且厭味なものとなつて了つて居る、これも嬉遊笑覽に、多くは下輩の慰みとなり、神奈川の宵みやに假閣の觀物に立てるをはれとす、枝を撓め奇狀を造り出すは見る目もいとはしけれと云々とある通り雅致も風韻もない挿花である。

源流の自負

て居るのも面白い。

先づ池の坊流といふのは其家元は京都の六角堂である、小野妹子以來の名門といふことで今日も姓を小野といつて六角堂の觀音の住持をして傍ら花道の宗匠をして居る、道に流儀が古いだけに此家には昔から隨分斯道の名人を出して居る、中にも專順―これは花道ばかりでなく連歌の名匠で彼の名高い宗祇法師や牡丹花肖柏などと肩を並べた人で、挿花は却々に名人であつたことは誰も能く知つて居る、それから專定といふ人がある、これも挿花は上手であつたらしい、近くは專明といふ宗匠―それは近代の花道の名手といはれた人で、その花の圖などを見ると同じ池坊流でもこれを現代のものと比べて見ると餘程趣が變つて居て面白味が深いやうに思ふ。

兎に角池坊派は傳統が古いので代々この道に優れた人が出ていろ／＼挿方に工風を凝し又花道の方則なども出來て居るが然し、方則が出來たり挿方に規則とか約束といふものが出來た丈それ丈又昔の挿花―他流は暫くいはず同じ池の坊

獨習

投入挿花法

近藤正一著

挿花の由來

花道の諸流

挿し方は種々あるが大同小異で然ほど異つて居るとも思はれぬ、が兎に角流派はいろ／＼に分かれてめい／＼に優劣を爭つて居る　その内で最も起源の古いのは池の坊流で、それに續いて起つたのが遠州、石州、宏道、古遠州、松月、古流、庸軒流、それに近頃出來た東池の坊、悉うといふものまで數へたらば殆んど際限のない程に澤山な流派がある、それがめい／＼にその起源に勿體を付けて傳統を飾るに腐心し

百舌鳴くころ（つるもどき、蜀黍、野菊）

夕日さす背戸（冬瓜）

露ひぬ山路（松と山百合）

風かほる汀

（燕子花）

形の取合せ……二二八
色の取合せ……二二九
その趣味……二三〇
水盆の盛り方……二三一
器物……二三二
置き場所……二三三
盆花及び花果盛合せ一覧……二三四
挿花盆花季寄……二四一

目次終

技巧を弄することを避けよ……二〇〇
花の姿……二〇一
花器と花臺……二〇一
花の向け方……二〇二
二瓶一對三瓶一對……二〇三
獻華の作法……二〇四
花の種類……二〇五
挿花十二ケ月……二〇七

附録

盆花及び花果の盛り合せ……二二一
一種の盛り花……二二一
その趣味……二二二
根付きと折枝……二二三
盛るべき花……二二五
盆花及び花果の盛り方……二二七
盛り方に法則なし……二二七

花の姿……一八六
花の種類……一八七
花瓶と花臺……一八八
佛前の花……一八九
純然たる裝飾の花なり……一八九
その趣味と花の姿……一八九
對瓶の時……一九一
花瓶と花臺……一九二
佛事の花……一九三
その趣味と花の姿……一九三
花の種類……一九五
花器と花臺……一九五
坐間の花……一九六
絕好の裝飾品……一九六
花の姿……一九八
神佛の獻華……一九九
裝飾の目的に非ず……一九九

花の姿……一七五
花の種類……一七六
花瓶と花臺……一七七
新築祝ひの花……一七八
花の姿に定法なし……一七八
花器……一七九
花の種類……一七九
婚禮の花……一八一
花の姿……一八一
花の種類……一八二
花器……一八三
花臺……一八三
送別の席上の花……一八三
花の姿……一八三
花の種類……一八五
花瓶……一八五
金婚式、銀婚式その他賀筵の花……一八六

雛の節句の花……一六二
花の姿……一六二
花の種類……一六三
花瓶と花臺……一六五
端午の節句の花……一六五
花の姿……一六五
花の種類……一六七
花瓶及び花臺……一六八
七夕の花……一六九
花の姿……一六九
花の種類……一七一
花瓶と花臺……一七一
重陽の花……一七二
花の姿……一七三
花の種類……一七三
花瓶と花臺……一七五
天長節の花……一七五

最も榮えある花……一五二
花の姿は四方正面……一五三
花の丈は高からぬがよし……一五四
花臺は用ふ可らず……一五四

暖爐上の花……一五五
對瓶がよし……一五五
花の姿は眞の形が好し……一五六
花は紅紫爛熳なるがよし……一五六
花臺は用ふべからず……一五七

新年の花……一五七
花の姿……一五七
花の種類……一五八
花器と花臺……一五九

紀元節の花……一六〇
花の姿……一六〇
花の種類……一六一
花瓶と花臺……一六二

釣花……一三九
中央卓の花……一四〇
棚の花……一四三
違ひ棚い花……一四三
違ひ棚の下に挿す花……一四五
書棚の花……一四六
机上の花……一四八
花は何にてもよし……一四八
花瓶……一四八
花の姿……一四九
高案上の花……一四九
装飾中の覇者……一五〇
花の姿……一五〇
案の置き場所……一五〇
案の高低……一五一
花瓶……一五二
卓上の花……一五二

花の選擇……一二〇
花を花盆に載せること……一二一
花止の種類……一二二
花止の嵌め方……一二三

花の組立……一二四
法則に泥む勿れ……一二四
自然の狀を寫せ……一二五
投入花の各部分の名稱……一二六

投入花の挿け方……一二九
摑み挿にすべからず……一二九
花葉枝幹の据りを見よ……一二九
中心點を見定むること……一三一

挿花の風情と挿花を置く場所……一三三
床の間の挿花……一三三
中と左右……一三四
壁釘に掛ける花……一三六
床柱に掛ける花……一三八

花瓶との關係……一〇六
高低……一〇八
大小……一〇九
薄板、厚板……一一〇
盆……一一一

五具足飾……一一一
花の姿……一一一
花は一種もよし二三種もよし……一一三
五具足飾の調度……一一四
五具足の飾り方……一一四
五具足飾の歷史……一一五

三ツ具足飾……一一六
五具足飾の省略せるもの……一一六
趣味は五具足飾よりも多し……一一七
變化自在……一一八
挿法も自由なり……一一九

挿けんとする時の準備……一二〇

花の取合せ……八七
趣味の調和が第一なり……八七
木の花と草の花……八八
色の取合せ……九〇
水陸の草木……九一
交挿と一種挿……九二
品格よき一種挿……九二
派手なる交せ挿し……九四
花瓶……九七
花と調和するを要す……九七
形の調和……九八
變格の調和……九九
奇形なる調和……九九
趣味の調和……一〇〇
花瓶の形式……一〇一
見立物……一〇五
花臺……一〇五

投入花の眞行草……六五
道茲に出で千變萬化す……六五
眞體の花……六六
行體の花……六七
草體の花……六八
役枝の說明……七〇
主體と配ひ……七〇
現在と未來……七六
蕾と開花……七八
花を挿すに當りて注意すべき事柄……七九
挿花と裝飾の調和……七九
花の姿は花に任せよ……八〇
花と花瓶の取合せ……八二
花臺と花及び花瓶との調和……八三
手の內にて先づ其姿を整へよ……八四
瓶花の高低と裝飾の關係……八五
置物を高くする場合……八六

不釣合なる釣合……四七

投入花の趣味……四八

その趣味は無盡藏なり……四八
趣味はさま〴〵……五〇
清らかな趣味の瓶花……五一
濃艶なる趣味の瓶花……五二
纖美なる趣味の瓶花……五三
幽靜なる趣味の瓶花……五四
隱逸なる趣味の瓶花……五六
高潔なる趣味の瓶花……五六

投入花の姿……五八

花の姿は千態萬狀なり……五八
要は正と奇の二つのみ……六〇
大體を圓満に挿む……六一
數奇なる狀の花……六二
奇正相交はれる挿花……六三
大自然の情致……六四

作意の有無……二二
枝を矯め葉を透かす……二三
範圍の廣狹……二五
法意は一つの意匠のみ……二七
方面の多少……二九

投入花……三〇

投入花の本領は趣味にあり……三〇
投入花に法則なし……三一
縱橫に濶步す……三二
花に去嫌なし……三二
嘘眞故に粹なり……三三
花を憐め……三四
法の爲に挿花を俗化す……三七
技巧は自ら備はる……三八
出生は不易姿は流行……四一
瞬間の美……四四
夜の花の美……四六

目次

挿花の由來 …… 一
花道の諸流派 …… 一
傳統は池坊流最も古し …… 四
花道愈よ盛んにして趣味愈よ墮落す …… 八
諸流派益す起る …… 九
茶人式の挿花始る …… 一〇
挿花法の革新時期に入る …… 一一
濫觴は古し …… 一二
挿花の目的 …… 一四
裝飾の爲にする挿花 …… 一四
生花觀賞の挿花 …… 一七
神佛に手向の挿花 …… 一八
投入花と流儀花 …… 一九
[illegible]は趣味を主として[illegible]は型を主とす …… 一九

一投入花は花形に羈束を加へず、故にその天地極めて寛裕自在にして姿狀の變化窮りなし。

一變化窮りなしと雖も自然に負くことを許さず、所謂梅は梅らしく櫻は櫻らしくといふもの實にその第一義たり

一投入花は興味を以て生命とす、彼の枝を矯め葉をすかして却てその情趣を殺ぐが如きは絶對にこれを禁忌す。

一投入花は大自然の花にして些の矯情なし、仍ちその風趣は眞にして且つ新なり。

一投入花を學ぶに宗師を要せず、若し強てこれを求むれば花卉草木は即ちこれ斯道の大宗師ならん。

大正四年中秋　　著者識

川合玉堂畫伯題畫

近藤正一翁著

獨習 投入挿花法

東京 成美堂發行

To Mrs. Kelly

From Mr & Mrs Taniya

21 Sept. 1947

Tokyo.